祭りの夜に……

ケールが熱い 2



KAZUMI NITTA

新田一実

ECLIPSE ROMANCE

クールが熱い2

～祭りの夜に～

新田一実

illustration／富士山ひょうた

ECLIPSE ROMANCE

クールが熱い2

～祭りの夜に～

Takaaki Yazaki

Misao Saiga

Toshiaaga Sugimoto

Yūsuke Hashimoto

クールが熱(あつ)い2

～祭りの夜に～

新田一実(にった かずみ)

illustration／富士山(ふじやま)ひょうた

ECLIPSE ROMANCE

CONTENTS

クールが熱い ACT·3 …… 007
クールが熱い ACT·4 …… 089
橋本先輩の秘密 …… 189
あとがき …… 262

初出一覧

『クールが熱い ACT·3』――小説エクリプス10月号（99.09）
『クールが熱い ACT·4』――小説エクリプス12月号（99.11）
『橋本先輩の秘密』――書き下ろし

クールが熱い ACT・3



1

夏休みの宿題に追われるというのは、中学生まで。最終日に向かってせこせこと工作に取り組むなどというのは、小学校で終わりだと信じていた。

もちろん、翔峰学園とて、高校になってまで工作の宿題がある訳ではない。第一、工作の授業自体がないのだ。

それなのに、夏休みの後半を、工作に費やすというのは、どういう事だろう。

「くそったれ！」

「こらこら……」

「チクショー！」

「ほら、飽きたんなら、アイス食べてていいから」

宥めるように声を掛けられて、ますます苛立ちが募ってくる。

「なんじゃこりゃー！」

「後で、セミ採りに行ってもいいよ」

「おりゃ小学生か！　だいたいこんなモン何で俺が作らされてんだよ！」

うがーっと叫んで、操はばたっと後ろに倒れた。

ガンガンにクーラーが効いた部屋。

隣には一応恋人という事になっている男。
もちろん、操は野郎を恋人にする気などない。だが、向こうはすっかりその気になっているし、時々、べたべた引っ付くぐらいで、それ以上余計な事はしてこないので、今のところ容認している。
操にとっては、それが現実であり、事実だ。
実際、操の部屋に閉じ籠って、ジュースなんかが用意されて、他に誰もいないとなったら、少しは色っぽい気分になるかもしれないと覚悟していた。
それなのに、時々肩を抱いたり頭を撫でるだけで、矢崎は真面目な顔をして工作を続けている。別に、色っぽい事になって欲しいわけじゃない。ただ、どうやって逸らかそうか、一所懸命考えていた自分が恥ずかしかっただけだ。これでは、操の方がえっちを期待していたみたいではないか。何だか、ムカつく。
ちょっと不貞腐れて、寝転がったまま矢崎を眺める。
と、眉間に皺を刻んだ矢崎が、操を覗き込んできた。
「操ぉ。お前の所為で、こんなモノを押し付けられたんだからな。ちゃんとやってくれ」
「おれ？　俺の所為？　俺が何したって？」
ジオラマというのだそうな。戦車や兵隊の玩具をリアリティーたっぷりに展示するために、背景をきっちり造り上げるアレだ。その背景だけを造らされているといえば、一番現実に近いに違いない。

ただし、操の目の前にあるのは戦場などではなく、学校がある山だった。
「総統を怒らせたのは誰かな？」
「そんなの、球技大会ん時だけじゃん。そんな大昔の事で、この仕打ち？」
木の種類まで特定されているジオラマは死ぬほど面倒臭い。
「自業自得」
「何がだよ。だいたい、昭夫にーちゃんがデートに誘ってくれたんだからな」
「違う。変なビデオ作るぐらいなら、自然観察ビデオを撮れって言っただろ？」
思い切り目を見開いた操は、矢崎の顔をまじまじと見詰めた。
言った覚えはある。
けど、それは当たり前だと思う。絶対に、矢崎に責められるような話ではない。
そもそもの切っ掛けは、夏休み明けにある文化祭だった。
翔峰学園の男子部には演劇部などない。まぁ、大抵の男子校には、演劇部などないから、そう驚く事ではないだろうが、代わりに映画部があった。それもありがちな事だろう。問題は、その映画部がビデオ作品を作ると宣った事だった。
演劇部などないから、当然、役者はそこいらで調達する事になる。普通なら、このチャンスに女子部の演劇部とお友達になろうと考えるはずだ。が、連中は生徒会に協力を求めてきたのだ。
どういう裏があるのかは知らないが、生徒会が全面協力して、合同でビデオを作るなどという事になったらしい。挙げ句の果てに、操にまで出演命令が下ったのだ。

貴重な夏休みを潰して撮影に付き合わされ、しかもヒロインをやれと言われたら、逃げたくなるのが人情というもの。

折角、自然環境に恵まれているんだから、観察ビデオを撮った方が有意義だと言ったのは、単なる口から出任せだった。言うまでもなく、自分がヒロインをしないで済むように、だ。

まさか、マジになるなんて。

「だからビデオなんだろ？　勝手に撮影すりゃいーじゃん」

「どうせなら、人目を引く展示をやりたいんだろうな」

「やりゃあいいじゃん、やりゃあ。それとこれとどう関係すんのさ！　どーして俺がこーゆー事やらされるわけ？」

怒り心頭。

むかむかして、喉が乾く。

ジュースに手を伸ばした操は、こんもりとした緑の塊を睨み付けた。

ゴジラになって、木々をバキバキと踏み砕き、山を崩して、放射能を吐いて黒焦げにしてやれたら最高だ。

……いや、発泡スチロールの山を崩しても、興醒めだろう。

しかたなく、操は放射能の代わりに溜め息を吐いた。

「自分の発言には責任持とうね」

「やだ」

苦笑した矢崎は、爪楊枝に紙を巻きボンドを付けて、細かく切った緑のビニールに突っ込んでいる。気持ちの悪いてんぷらと言うか、一応、木に見えると言ってやるべきか。

発泡スチロールの土台に、緑のてんぷらをずらっと並べるという単純作業を朝から続けている矢崎は、意外と辛抱強い性格のようだった。

「……大体、翔峰の文化祭なんだから、最初っから女子部に協力してもらって、普通のビデオにすりゃいいんじゃん。それを俺に女装しろとか言いやがって……」

「仕方がないだろう？　バロン祭なんだから」

「何だよ、それ」

「だから……。文化祭。女子部は六月にやっただろう？　お前、授業をサボって見に行ったよな」

どーしてそういう事を知っているのだろうか、この男は。

「だって、前夜祭でクッキーとかケーキとか、美味いのは売り切れるって……。そもそも女子部と文化祭が別っていうのが変じゃん。生徒会の権限で合同にしたら？　ついでにベルリンの壁も取っぱらってさ……」

ベルリンの壁というのは、昔、ドイツが二つに分断されていた時に、街を分けていた国境の壁の事だ。本物は乗り越えるのがばれたら殺されたらしいが、学園にある壁の方は、乗り越えたら停学になる。しかも、ただの停学ではない。ありがたい事に、学校謹慎という、学校に来て、教師とマンツーマンで勉強するという、地獄の責め苦を受けるのだ。

身近にあるだけに、余計に壁の向こうには興味をそそられるし、中を覗きたくなるのは人情だろう。折角大手を振って禁断の花園に潜入できるというのに、手を拱いている男子生徒がいたら、それはもう野郎ではない。

「操ちゃん。女子部の文化祭の名前、知ってる？」

「メイクイーン祭だろ？」

「ウチは？」

「バロン祭」

「バロンの意味は？」

「バロンて……。男爵だっけ？」

「男爵って言ったら？」

きゅっと、眉間に皺を寄せた操は、頭の中で言葉をひっくり返していた。

「ジャガイモ！　そーか、メークインに男爵。両方ジャガイモじゃん」

「……ジャガイモ扱いされたお嬢さん方が協力すると思う？」

全然思わない。

そうか。男爵祭などといって、妙に気取った名前を付けていると思ったら、女子部に対する嫌味だったのか。

長年の——といっても、二ヶ月ぐらいだが——疑問が解けて、操はずいぶんとすっきりした気分になった。

だからといって、ジオラマ製作を手伝わされるのを納得した訳ではなかったが。
「それは判った。女子部に手伝ってもらえないのはいい。……けど、どーして俺がこんな事する訳？　生徒会でもないし、映画部でもないんだよ。そんなん変じゃん」
「今更そんな事を……。ほら、針葉樹、完成。そっちはできた？」
ごろごろと転がっているのだから、何もできる訳がない。それなのに冷たい事を宣う矢崎を、操は上目づかいに見遣った。
「やだ。したくない」
「我儘」
「したくないったら、したくない」
がばっと起き上がった操は、カッターナイフを握り締めた。
ドライフラワーにしたかすみ草を適当な大きさに切って、ボンドを付けて緑のパウダーを振り掛ければ、一応広葉樹の出来上がり。
「べたべたして気持ち悪いだろ？」
「操が言い出したんだから」
「言ってない！」
「みぃさぁおぉ……」
「やだ！」
ガキのようにゴネる。



「やりたくないったら、やりたくない！」
じたばたと暴れてやる。
と、いきなりドアが開いた。
「にゃっ？」
「……あ……と。お邪魔してます」
ぺこりと、矢崎が頭を下げる。
顔を見せたのは、操のすぐ上の兄、隆三だった。
「あれ？　ちい兄ちゃん、仕事は？」
「これからだよ。何してんだ？」
ものすごく不機嫌な顔でテーブルを睨む。
それはそれは怪しいだろう。謎の縞々が描かれた紙と、緑色に塗られた発泡スチロールの意味が判る人間はそうそういない筈だ。
一応、等高線の引かれた設計図と、粗削りが終わって木を植えるばかりとなった山なのだが。
「文化祭の展示物だってさ。ウチのガッコの山。見える？」
「ま、がんばってくれ」
ドアが閉まる。
「……何だろ。何しに来たのかな……」
「……警告だろ」

「へ？」
「さて……。駄々捏ねてても仕上がらないんだからな。宿題を手伝って欲しければ、仕事しような」
渋々と座り直した操は、虚しい作業を再開した。
赤点は免れたものの、誉められたものではなかった数学と物理は、普通の宿題の上に、オマケまで出されている。一人で奮闘する事を考えれば、優等生の助けを借りる方がいい。
このクソ熱い中、タダで家庭教師をやってくれる成績優秀な先輩など、そうそういない。それを思えば、夏休みの工作に付き合うぐらいは、目を瞑るしかなかった。普通ならデートの一つも決めたいだろうに、夏バテが激しい操に付き合って、矢崎は家から一歩も出ない日々を送っているのだ。
お陰で、ごくごく〝望ましい青少年のお付き合い〟が続いている。それとも、操の〝矢崎、兄と同化計画〟が順調に進行していると思った方がいいのだろうか。
男を恋人にするぐらいなら、もう一人、兄を作ってやろうと思ったのだが、ちょっと早まったような気もする。
もしかしなくても、この男が一番口煩いし、その上、飴と鞭を使い分けるのが上手いような気がした。
「はあぁぁぁ」
魂が抜けそうな溜め息を吐いた操は、舞い上がる緑のパウダーを恨めしげに眺めた。

2

休み明けの学校というのは、それはもうダラけているものだ。
夏休みは長いし、その間にはいろいろな事がある。
何しろ、よほど間抜けな事をしない限り、大学に入れてもらえるという特殊環境に生息しているのだ。勉強以外ならば、燃える事など幾らでもある。
バイクに熱中した挙げ句、レース場に通い詰めたヤツもいるらしい。オフロードに燃えて、事故を起こして入院中というクラスメイトもいた。
もちろん、彼女を作ろうと努力して、成功したヤツもいれば失敗したヤツもいる。
互いの顔を見て、背が伸びただの黒くなっただの、たわいもない事を言っているが、本心は彼女ができたのか、どこまで行ったのか、確かめようとしていた。
悲しいかな、操は蚊帳の外だ。
校内ナンバー2を恋人にしているという事になっている操の性体験を気にしてくれる人間など、今更いる訳もない。
きっと、彼女ができたと言えば、驚いてくれるだろう。しかし、話題を提供するためだけに、彼女を探す気にはなれなかった。
夏の暑い最中に、彼女を探す元気があるヤツが羨ましいぐらいである。

ジジイと言われようと、虚弱体質と言われようと、暑いのが苦手なのは昔からなのだ。
「……聞いてんの雑賀？」
「はあぁぁ……」
「雑賀？」
「……暑い……」
「クーラー効いてんじゃん」
そりゃあもうしっかりと。高い授業料を取るだけあって、エアコンは完備されている。それでも、学校までの上り坂は、自分の足で歩くしかないし、真夏の太陽は、朝っぱらから操をノックアウトするには充分の威力だった。
「元気だな……笹木ぃ……」
元を質せば、出席番号がひとつ後というだけだったが、一学期中前後して座っていれば、それなりに親しくなる。
「お前がダレすぎ」
「しょーがねぇだろ。俺ぁ昔っから暑いのダメなんだよ。あー雪降んねぇかな……」
ぶつぶつと呟いた操を、同級生が揶揄う。
「冬んなったら、夏になんないかなとか言ってんじゃないの？」
「ないない。俺、寒いのは平気だもん」
「副総統に引っ付いてるって？」

けっけっけっと笑う笹木は、もちろん操が矢崎と付き合っている事を知っていた。
一学期の終わりに巻き込まれた事件は、単なる噂でしかなかった〝副総統の女〟という説に、信憑性を与えたのだ。
今となっては、誰も疑いもしない。
操も、抵抗する事を諦めていた。
というより、抵抗するのも莫迦らしい。
えっちしたのはたったの一回こっきり。訳の判らない連中に監禁されていた操を助けてくれた時にはちょっとぐらぐらしたのも事実だが、今は兄の一人だ。といっても、誰も信じてくれないだろう。
何しろ、操自身がちょっと信じられない気分なのだから。
「もー何とでも言って。……とにかく今は暑いの！」
「そりゃ、まだまだ夏だもの」
呆れ顔で応じた笹木が、露骨な溜め息を吐く。
その顔をじろりと睨み、操も内心で溜め息を吐いた。
入学したての頃は、あまり構ってこなかったクラスメイトも、今ではしっかりこの対応だ。態の割には、ちょっと危ない男で通ったのは、本当に最初の二月だけ。
何しろ、男相手にエンコーしているとまで噂されていたのだ。ちょっとばかり堂々と授業をさぼって、少々目付きを悪く演出しただけで、である。

流石、お坊ちゃんお嬢ちゃん校と言うべきだろうか。本当に恐いのは、優等生の仮面を被った方々だと、身をもって知っている操としては、突っ張る振りさえ阿呆らしくなってしまっただけだが、周りは取っ付きやすくなったと思ったらしい。

結局、あまり突くとキレると思われたのは、最初の頃だけ。近頃は、キレるはキレるでも、ヒステリーを起こすと知れている。もしくは、本当に危ないお兄さんが出てくると信じられているのだ。

「……たくさー。通知簿出すだけで終わりなら、もういちんち休みにしてくれればいいのにさぁ」

「始業式あるじゃん」

笑いながら言い返した笹木は、一日始業が延びても、暑さに変わりはないと言いたいらしい。そのたった一日でも、寝て過ごしたいというのが、夏バテの症状だとは、判ってもらえないだろう。

まあ、どちらにしても、サボタージュは無理だった。始業式の後と明日はバロン祭の準備に当てられているのだ。だからこそ、全部ひっくるめて、操にとっては逃げ出したいイベントでしかなかった。

「……そういやさ、雑賀って部活やってないよな」

「うん」

「手伝ってくんねぇ？　部の方でサ店やるんだけどさ。人手足りなくって……」

「やだよ。俺、生徒会の使いっぱやってるもん」

冗談。
面倒は嫌いだし、ウエイターなど絶対にやりたくない。
「当日も？」
「うん。何か知らないけど、一日中捕まってるみたい」
本当はちょっと違う。まる一日デートだ、などと、耳が腐りそうな事を朝ッぱらから言われたのだ。もちろん、相手は矢崎である。
夏休みの間、大人しかったヘンタイ副総統は、今朝も校門でお出迎えしてくださった。
一学期の間と同じように、それはそれは幸せそうに。
こんな事だから、全校生徒が操を矢崎の恋人と信じているのだ。自宅にまでお迎えが来ないだけましなのかもしれない。
「そっかぁ。……ちぇっ……どうしてこうカワイ子ちゃんは皆、押さえられてんだろ」
「はぁ？」
何か、とんでもない科白を聞いたような気がする。
文化祭といっても、部活の成果をまともに展示する部はほとんどない。外部入学の操は、聞いた事しか知らないが、体育会系の部活の方が力の強いこの翔峰では、当然の結果だろう、とは思う。当然ながらクラス単位での発表などないのだが、全員が何かの展示に協力しなければならない事になっていた。
皆が皆、嫌々付き合っている訳では、もちろんない。

何といっても、年に一度のお祭りなのだ。それなりに力の入る連中も各クラスに何人かはいるものである。所謂お祭り好き、というやつだ。

何かしらの団体を作り、企画さえ通れば、有志で教室を借りる事だってできるのである。

当然ながら、学校行事に参加すると、真剣に考えての事ではない。

従って、残暑酷しい季節の文化祭は、自ずと室内の展示がメインになる。喫茶室とお化け屋敷ばかりが並ぶのは理解できるし、中でも、規制の緩い喫茶室に人気が集中するのは、当然といえば当然だった。

そう、文化祭などと言っていても、男子校のそれは所詮ナンパの機会。チャンスを狙っている男共にしてみれば、人気のある店を作れるかどうかが鍵になる。

もちろん、一番手っ取り早いのは、顔のいいウエイターを揃える事だ。

しかし、それでは肝心のナンパという目的が達成できない場合が多々ある。

となれば、オカマ喫茶。単純極まりない発想だが、なるべく華奢な一年生を看板に、笑いの取れる〝お兄さん〟を配置するというのが、お約束らしい。

「押さえるって何だよ。自然科学部って、オカマ喫茶やるんだよな」

「そーだよ。看板いなくなってさ。B組の山下に頼んどいたんだけど、あいつ、バンドやるんだって。信じられるか？　夏休みにちょこっとカラオケ行ったぐらいで、すっかりボーカル気取りなんだぜ、あいつ」

そういえば、体育館ではロックコンサートがある。

もちろん、大学ではないので、プロを呼んだりはできないのだが、大学の執行部の伝で、学生インディーズバンドがメインアクトとして出場してくれる事になっていた。

「ひょっとして、お化粧バンド？」

山下は、女装させたいと思うのが判るぐらいの美人だ。しかも、注目されるのが大好きと来ている。喫茶店の看板ウエイトレスぐらいやるだろうし、もっと目立てるのなら、ボーカルに立候補するのも当然だ。

早い話が、楽器を扱えるメンバーを探し出したというだけに決まっている。

「知らね。……そんな余裕ないって……。くそぉ、今から探しても無駄かなぁ……。チクショウ、弱小は厳しいぜぇ……」

「部ん中にいねぇの？」

「いたら苦労しないって……」

確かに。

部活をしていない人間は少ない。その中で役に立ちそうな人員を探すとなったら、それなりに大変だろう。逸早く生徒会の手伝いをすると決められた操には、誰も声を掛けなかった。

笹木も、ダメもとで声を掛けたのだろう。あっさりと引いてくれる。

もしかすると、部の先輩辺りから、聞いてこいと命じられただけなのかもしれない。

そういえば、今日のスケジュールを始業式で終わりと思っている人間も、操以外にはそうそういないだろう。大抵の人間は、明後日から始まる文化祭に向けて、最後の追い込みに忙しいのだ。

実際、一年C組の教室の後ろにも、クーラーボックスだの紙コップの箱だのが積み上げられている。

今日明日が文化祭の準備日に当てられているといっても、それだけで済む筈はなかった。

どうせ夏休み中もずっと部活はあるのだし、最後の数日は文化祭の準備に当てていたのだろう。

「ところでさ。……自然科学部って元々は何やってんの？」

「来てくれれば判るよ。一応、壁に展示してあっから。副総統と一緒でいいから、お茶しに来てよ」

「……あ……うん」

自然科学部の活動になど興味はないが、不気味な化粧をしたクラスメイトはちょっと見てみたいような気もする。

お化け屋敷とどっちが不気味だろう。規制が多いという事だから、お化け屋敷の方はあまり期待できない。

自分が参加する気など全くない操は、どうやって時間を潰せばいいか、どこが一番涼しいか、一所懸命に考えていた。

3

「あれ？　兄ちゃん？」

九月二日。
日はまだまだ長い筈なのに、すっかり辺りは暗くなっている。
別に、こんな時間まで、矢崎といちゃついていた訳ではない。思いの他本格的な展示になった〝翔峰周辺の自然〟展示の手伝いをしていたのだ。
下手をすれば徹夜だと思っていたのだが、夏バテ小僧は役に立たないと、お役御免になった。しかも、家まで送ってやれと、矢崎まで付けてくれる親切さだ。
真っ直ぐに立っていられないほどふらふらしている操が、無事に家へ辿り着けるか怪しいと思ったらしい。
確かに、このまま蒸し暑い夜道を歩いていたら、どこで倒れても不思議はなかった。
いっそ背負って帰ってくれないか、などと虫の良い事を考えながら校門を出たところで、お誂え向きに三男坊の車を見付けた。
ありがたい事はありがたいが、何だか都合が良すぎる気もする。
「何してたんだ？　こんな時間まで」
「バロン祭の準備……」
「なんだそれ。……いいから乗れ」
「……うん……」
窓を開け放して止まっていた車に乗り込む。
「ありがとうな。……後は俺が引き受けるから」

すぐ上の兄が、当然のように告げると、矢崎は至って素直に頷いた。
「はい……。じゃあ……操、明日はちゃんと来るんだぞ」
「……うん」
眠くて眠くて死にそうだ。
いい加減に頷いた操は、シートを倒して、身体を預けた。
目を閉じると、エンジンが掛けられて、涼しい風が吹き出してきた。
「あれ？　来たばっか？」
一瞬の冷気が、眠気を払ってくれる。
「ああ」
「いいタイミング」
「何が……。いきなり人を呼び付けやがって」
「へ？」
今度こそ、目が醒めた。
なるほど都合が良い筈だ。
「呼び付けって……。え？　矢崎さん？　ちい兄ちゃんの携帯、知ってたっけ？」
「教えといたんだよ。なんでもかんでもヤツの世話になるこたないだろ？」
「はぁ……」
何かよく判らない理屈だ。

生まれた時からずっと構われていて、いいように利用させてもらっていた人間が言う事ではないかもしれないが、そろそろ弟離れした方がいいような気がする。

そう、和隆のように。

長兄が口煩いのは相変わらずだが、近頃少しは監視が緩んでいる。それは矢崎の兄、昭夫と友達付き合いを始めてからのような気もした。実際、二人がどういう関係かは、まるで判らないが。

とにかく、隆三も、恋人の一人もできれば弟にばかりかまけていられなくなるだろう。

マイナーとはいえ、一応ロッカーなんていう派手な職業なのだから、彼女の五人や十人いてもいいと思う。もちろん、同時進行で五人は多過ぎると思うし、隆三がそんな器用なタイプでない事は知っていたが。

とにかく、この際、たった一人でいいから、弟以上に気になる人を探して欲しかった。

「……あり？　どこ行くの？」

〝翔峰山〟を降り切ったところで、車が逆方向へ向かう。

「俺、全然役に立たないからね……。飲み会もパス……」

「判ってる……。寝てていいから……」

「早く帰ろ。おれ、死にそうに眠い……」

「寝てていいから……」

「だから。夏バテしてるんだって……」

「判った、判った。……明日、送ってってやるから……」

珍しい事もあるものだ。
操がちょっとでも熱っぽいとでも言おうものなら、旅行さえ中断する隆三が、ドライブを続けるという。
「……酷い……」
「だから、寝てていいって。何だったら、しっかりパジャマに着替えさせて、ベッドまで運んでやるから……」
ついさっきまで、恋人でも見付けて欲しいと思っていたが、こんな風に冷たい隆三は嫌だった。鬱陶しいぐらい甘い兄ちゃんに慣れているのに、いきなりこれはないと思う。
「俺、具合が悪いのに……」
「夏バテだろ？　だから、ちょっと遠回りするだけだって。めちゃくちゃ美味いケーキ買ってやるから……。好きだろ？　ゼリーで包んだヤツ」
「本当？」
「本当本当。だから、寝てなさい」
よく判らないが、機嫌を取ろうとしているらしい。
まぁ、今日の所はそれで許してやるか、などと、ちょっと不遜な事を考えながら、操はもう一度眠る体勢になった。
いつもいつも何かしら器材が積まれている所為で、後ろは埋まっている。本当なら、身体を伸ばして寝られるだけのスペースはある筈だが、確かめるのも面倒で、操は窮屈な姿勢で目を閉じ

た。
そういえば、こんな風に隆三の車に乗るのは久し振りである。操が夏休みの間、隆三は半分以上、家にはいなかったのだ。どこかのミュージシャンのサポートで、全国を飛び回っていたのである。
いつもの事ながら、ライブの出来を良いとも悪いとも言わなかったのは、お仕事だからだろう。親しい人間の手伝いだと、煩いぐらいにライブの感想を言い倒すのだ。
「……ひょっとして、気に入らなかった？　今度のライブ」
「何だ、寝てないのか？」
「……ぼーっとしてるけどね。……で、どうだったの？」
「まあまあだな」
判断に迷う言いようだ。
好き嫌いがはっきりしている隆三が、言葉を濁すのを初めて聞いたような気がする。
「下手だった？」
「いや、上手い」
「客が悪いとか？」
音楽に詳しい訳ではないが、兄の仕込みで一端の科白は吐ける。
「かなりいい方だな」
「じゃあどうして？　よっぽど性格が悪いとか、合わせ辛いとか……」



「こっちはプロだぞ。合わせ辛いってのは、こっちが負けたって事だ」
「ふーん」
つまり、相手が下手ではないのに、合わせ辛いという事らしい。常日頃、テクニックに自信があると言い切っているだけに、隆三にとってはショックだったのだろう。
可愛い弟とドライブをしないと、気が晴れないぐらい。
よしよし、ドライブぐらい付き合ってやろう。
気分が良くなった操は、真剣な顔をして車を走らせる兄の横顔を見詰めた。
矢崎が遊びに来るのを嫌がるのはちょっとナニだが、隆三自身が不幸だったと思えば、気も晴れる。
長い夏休みの間、少しも兄を構ってやらなかった所為かもしれない。
今までなら、昼間はクーラーの効いた部屋で眠って、たまに兄の出ている都内のライブに顔を出すというのが、夏休みのパターンだった。兄たちの過干渉を潜り抜けつつ遊ぶには、それくらいしかなかったのだ。
中学生の遊びとしては、PTAの好みでないだろう。たとえ高校生でも、ライブハウスに顔パスで入っていくような子供は、あまり歓迎されないに違いない。
そもそも、操は小学生の頃から、夏の間は夏バテなどと宣って、ほとんど家から出ないという、インドアな子供だったのだ。陽が暮れてから出掛けるのでなければ、家から一歩も出なかったに違いない。高原に別荘があるとか、避暑地と言える場所に親戚がいれば、話は別だっただろう。

だが、別荘を持つほどの財力もない両親は、共に東京生まれ東京育ちで、夏休みに遊びに行く田舎もなかったし、夏バテ小僧にわざわざ旅行するほどの体力が残っている筈もなかった。

「……ちい兄ちゃん。売れたら北海道に別荘買ってよ」

不意に思い付いて、お強請りしてみる。まあ、望みはないが。

「あぁ？　何だ、いきなり」

「夏は、北海道だぜ」

操の譫言以外の何ものでもない呟きに、隆三は事もなげに応じた。

「北海道なら、マキがスタジオ持ってるぞ」

「嘘！」

がばっと起き上がった操は、急な動きに、貧血を起こした。

目が回る。

気持ちが悪い。

「うー……」

「スタジオっていっても、ろくな器材はないがな。まぁ、練習スタジオってとこか？　今年も曲作りの合宿してた筈だし……」

隆三の言葉など、操は上の空で聞き流した。別に音楽がやりたい訳ではないから、器材なんかなくてもいい。北海道という響きが、いかにも涼しげに感じられて、夏バテが解消するような気がする。

「行きたい……北海道……」
これこそ、本物の譫言だ。
「やめとけ。学校さぼったら、煩い連中がいっぱいいるだろ？」
そんな事は、百も承知だ。
「言ってみただけじゃんか……」
ぼそぼそと言い訳を口にすると、隆三は溜め息を吐いた。
「お前なあ……ちゃんと蛋白質摂ってるか？　麺ばっかり食ってると、夏バテは酷くなるだけだぞ」
もともと体力の権化のような隆三に言われても、説得力はない。もっと如何にも、ひ弱そうなくせに元気な人間の進言なら、聞いてやってもいいが。
「そんなこと言ったってぇ……」
「はいはい、そうでしたね。操ちゃんはデリケートだから……」
珍しく皮肉な当て擦りをした隆三は、それきりぴたりと口を噤んだ。
珍獣でも見る気分で、兄の横顔を眺めた操は、ごそごそと尻を落ち着け直した。
――どうしちゃったの？　隆三さん……――である。
よほど、嫌な事があったのだろうか。
隆三の態度が少しばかりいつもと違うだけで、何でこんな事を考えるのだろう。
ふと、現実を見詰めてしまった操は、ヘッドレストに頭を預け、今度こそ眠る態勢に入った。

隆三は長兄の和隆と違って、説教魔神ではないが、何といっても長男と三男は見た目からしてよく似ている。いつ何時説教好きに変身するか、判らない。
ドライブだろうが何だろうが、付き合ってやるのは、可愛い弟の務めだろう。
とりあえず、眠っていていいのなら、だが。
まあ、お駄賃くらいはくれるに違いない。
変なところに連れ出される事のないよう祈りながら、操の意識は微睡みの中に沈んでいった。

4

膝の上に何かがトンと置かれ、操は目を覚ました。
「……ん……」
いや、目を覚ました、というのは嘘だ。
眠りの淵から、現世の境にまで引き戻されただけである。もちろん、目を開こうなどという努力は一切しない。
「起きた？」
妙に甘ったるい声が問い掛けてくる。
「……うん……」
ぼんやりと寝惚けたまま頷くと、ふわりと頭に載った手が、柔らかく髪を梳く。

何となく撫でられる猫の気分になった操は、手近にあった腕にごろごろと懐いた。
「ケーキ買ってきたぞ」
「ん……」
膝の上のはケーキか。そういえば、大腿が酷く冷たい。
惚けた脳味噌でも、それでもどうにか動いているようだ。もっとも、身体の方はぴくりとも動かなかった。
ほとんど金縛りの状態である。
「帰るからな。眠いなら、寝ててもいいけど、落とすなよ。ケーキは」
揶揄うような声が聞こえる。
「しょうがないな……」
声と共に、膝の上の冷たい箱が取り上げられる。
――あ……ケーキが……――
思うのだが、もちろん、身体は動かない。
――ま……いっか――
どうせ、帰るのだから。
あっさりと抵抗は放棄して、睡魔に引き戻されるに任せる。
「制服着てるじゃないか」
妙に刺のある声が、耳に飛び込んできた。

――え？――

ほとんど同時に、ドアが閉じる音。

車の中だという事を、突然思い出した。

ついでに、今度こそ本当に目が覚める。

防衛本能か、野生の勘か、飛び起きてはいけないと、何かが告げていた。

そろそろと薄目を開けると、運転席が見えてくる。その向こうには無闇に車の往来の多い通り。

眼が開くと、急に思考は現実的になった。

なんだか、嫌な予感がする。

助手席のドアの方から、とんでもない声が聞こえてくる。

「えーっ！」

何か喋っているようだが、窓が密閉されている所為か、内容は聞き取れなかった。

むくむくと好奇心が湧いてくる。

自分を覚醒させた言葉が、どうにも引っ掛かっていた。制服を着ている事に何か問題があるのだろうか。

気になる。

どうしても、気になる。

結局のところ、好奇心が勝つ。

操は目を閉じると、寝返りの振りで顔を助手席の窓に向けた。

丁度いい具合に、前髪が目の辺りに垂れ掛かってくる。
耳の情報を頼りに、薄く目を開いた。
「……あれ？」
目の前に見えるのは、何故かジーンズの股間。
思わず目を見開いた途端、運転席のドアが開く。
「しょうがない……今日は許してやるけど、明日は絶対来いよ！」
科白は何様だが、妙に拗ねた声に聞こえる。
「ダーメ！　明日こいつんとこの文化祭だから」
遣り取りが、妙にマジっぽいところが嫌だ。
ジョークなら、かなりの所まで許す隆三だが、モノホンに迫られるのは嫌う。少しでも付き合いがあれば判る筈なのに、しつこく迫っているらしい。
どんな奴なんだろう。
男だという事は間違いない。
女には見えない筋張った腕も見えるし、ごつい棘の生えた蔦のタトゥーも見える。
見覚えのあるタトゥーだ。
「尻に敷かれやがって！」
「それが恋愛の醍醐味ってもんよ。ンな事も判らないんじゃ、まだまだガキだな。……じゃあな！」
「じゃあ、そいつは何なんだよ！」

「お休み！」
何か、とんでもなく不気味な会話が交わされているような気がする。
決してカッコイイとは言えない排気音が響いて、車は動き出した。
「……兄ちゃん……」
ぼそっと、操は呟いた。
なるたけドスの効いた声を出したつもりだったが、ただ低いだけの、掠れた声になってしまう。
挙げ句に、咳まで出てしまったのでは、当初の目論見は、土砂崩れを起こした。
「寒いか？　ブランケットいるか？　クーラー止めてもいいけど……」
確かに、尻に敷かれている。
しかも、嬉々として。
こんな姿を見られたら、大抵の女に振られるだろう。マザコンだのシスコンだのブラコンだの。家族仲がいいというだけで、眉を顰めたり嘆いたりする友達もいたぐらいだから、本当に度を越して甘い隆三など、嫌われること間違いなしだ。
「ちい兄ちゃん。何か、めちゃくちゃ不気味な話が聞こえたんだけど……」
「不気味か？」
「だって……」
別に、男同士を不気味とは言わない。言う言わない以前に、言える立場にない事は、自分が一番よく判っている。現実はともかく、学校の仲間は操が男と付き合っていると信じているのだ。

しかし、だ。操自身は女の方がいい。男同士のえっちビデオなど見たくもないし、女同士の方がまだ楽しいと思う。実際、矢崎以外の男とキスするシーンを想像しただけで、ぞっとするのだ。矢崎の兄が相手なら、キスぐらいは楽しいかもしれないが。

「兄ちゃんと俺だろ？　マジに疑ってなかった？」

「……みたいだな」

「それって、ヤかも……」

隆三が黙り込んでしまう。

これは、やはりわざと誤解されるような事をやったに違いない。

なんてこった。

「兄ちゃん。芝居するんなら、先に言っといてよ」

「矢崎とかいうやつに誤解されると困るからか？」

「え？」

「あんまり目立つ事はするなよ」

隆三の言いように、酷くカチンと来る。

「なんだよそれ！」

元々、操に女装させたり、ゲイの振りをさせたりして遊んでいたのは隆三だ。恋人にするのは、男だろうと女だろうと、性格のいいのにしろ、などと宣った事もある。その隆三が、矢崎は気に入らないらしいのだ。

父親が文句を並べるのならまだ判る。
いきなり息子が男を恋人にしたなどと知ったら、泡を吹いてぶっ倒れるかもしれない。が、隆三に限っては、免疫がなかったとも、想像もしなかったとも言われたくなかった。
そもそも、操が男に迫られてパニックを起こさなかったのは、隆三が免疫をつけてくれていたせいでもあるのだ。
その隆三が、たいして話もした事がない相手を、気に入らないと決めつけるような事を言うのが嫌だ。別に矢崎を弁護する気はないが、フェアじゃない。
「矢崎さんと付き合うなってか？」
聞いた途端に、妙にドスの利いた声が返ってくる。
「ガキの遊びで済む事と済まない事がある」
「何だよ、それ！」
冗談じゃないか。
常日頃、学校で延々と噂されているから、つい口走ってしまっただけだ。
「……俺が、高校の時に、同級生と付き合ってたの、知ってるか？」
「はにゃ？」
あまり突飛な事を言わないで欲しい。
寝惚けていない自信はあるが、脳味噌が正常運転するには、もう少し時間が掛かる。それでなくても夏バテで、頭の動きが鈍くなっているのだ。

「それって、女の人？」
「……そうだよ」
呆れているのが見え見えの声が返ってくるのがムカつくが、この際それは聞き流して、できるだけ意地悪く問い返す。
「で？」
「俺の事が忘れられないから、離婚したんだとさ」
「何それ……。ちい兄ちゃんが高校生ってったら、十年も前の話じゃん」
「そんな事を言い回ってるんだよ。浜田のババアが……」
近所でも有名なお喋りおばさんだ。どうやって収集しているのか知らないが、一人ワイドショー状態で、ガセネタ半分の噂を振り撒き続けている。
地域活動には熱心らしいが、それ以上にはた迷惑な人間として有名だった。
「お前、十年経っても言われるぞ。高校の時から男を連れ込んでたって……」
男を連れ込む？　思わず、蛙をつぶしたような声が出る。
「げぇ……」
そんな、生きているかどうかも判らない先の事など、考えられない。第一、訳の判らないババアの事など、どうして気にしなければならないのか。
「まぁ、今回は、最後に模型の運び出しなんていう大イベントがあったから、毎日毎日男が訪ねてきた理由ははっきりしただろうがな」

「何だよ、それ。……全っ然、関係ないじゃん。俺が男と付き合おうと、ババアと付き合おうと、浜田のババアに何か関係があるってのかよ！」
「ないな」
「だろ？　だろ？　ババアんちに娘がいて、二股掛けたってんなら判るけど……」
ムカムカする。
このまま叫び出したいほど腹が立つ。
思い切り体温が上がったような気もするし、頭ががんがんしてきた。
今、目の前にババアがいたら、きっと殴り掛かっていたに違いない。
「……操？」
「何だよ！」
「お前、今、浜田のババアをぶっ飛ばしたいとか思っただろ」
どうして、こんなに変な事ばかり言ってくるのだろう。まるで酔っぱらいにからまれている気分になる。
「悪いかよ！」
ムカつきついでに、怒鳴り返すと、妙に冷静な返答が返ってくる。
「それやったら、お前が悪モンになるだけだからな。……向こうはマッサラ何も悪くない憐れな被害者でございって事だ……」
「どーしてよ！　どーしてそんな事になるんだよ！」

「別に犯罪を犯してる訳じゃないからな。どれだけ迷惑なババアでも、それなりに付き合うしかないんだよ」

本当に胃がムカついてきた。

絶対付き合いたくないと思うような、とんでもないヤツはいくらでもいる。実際、矢崎を逆恨みした挙げ句、父親のライフルを持ち出したバカに酷い目に遭わされた。

だが、奴らはそれなりの罰を受ける。

肉体を傷つけようとしたからか。

心を傷つけるのはいいのか。

「ムカツク……」

「しょうがねぇよ。自分のプライバシーは守りたい、けど、他人のプライバシーなら、ケツの穴まで見たいって人間が、現実にいるんだからさ」

そういえば、隆三は昔、写真雑誌に載った事がある。

アイドル歌手の恋人と間違われたのだ。バックでドラムを叩いていた時がドレッドヘアー、打ち上げの最中に罰ゲームで髪を切られたのが、誤解の原因らしい。

まぁ、隆三の場合はただの笑い話で済んだからそれで終わりだったが、信用できない記事が多々ある事は、良く判った。脅迫者がでっち上げた事件をそのまま買い取って、脅迫の片棒を担いだ週刊誌もあるぐらいだから、報道の自由などというお題目も、怪しいものだ。

そんな連中が垂れ流すゴシップと、近所のゴシップババア。

波及効果の範囲に多大なる差があっても、どちらもムカつく事この上ない。所詮は人事の芸能人ゴシップと違って、実生活に影響があるだけに、ご近所シリーズの方が始末が悪いかもしれない。

「……あのおばさんも、昔は結構な美人だったらしいがな。悲しいかな、今はあんな顔だ。……人間、五十も超したら自分の顔は自分が作ったって思って間違いないな。皮一枚の出来の善し悪しなんぞ、何の意味もなくなるって事だ」

「なんだよそれ」

露骨な話題転換。元々浜田の婆さんの話からして、そうなのだろう。

だがまぁ、言っている事は判らないでもない。

「相手が若けりゃ、見た目で判断するなとか、顔に惑わされるなって、言えるけど、五十にもなったら、顔で判断していいんじゃないか？　少なくとも、嫌な顔だって思った相手は、自分の性格じゃ付き合わない方がいい相手って事が多いからな」

「何だよ、それ……」

「本当はいい人だったんだ、と思っても、やっぱり良くない人だったって話」

「よく判らないぞぉ……」

「判らなくていいから……。ほら、寝てろ」

「いい。ケーキ食べるし……」

ごそごそと、後部座席を探って、ケーキの箱を引っ張り出す。

如何にも高そうな、丁寧なデコレーションのケーキが五個と、ゼリーが五個。いつもよりはかなり奮発してくれたようだ。

この夏のツアーでは、いろいろと大変な事があったらしい。

きっとその中に、弟を恋人扱いしてまで逃げ出したい相手が含まれていたのだろう。それこそ、弟のところに足繁く通ってくるというだけで矢崎が気に入らなくなるほど、あるいは近所のスピーカー婆を悪者にして文句を並べなければならないほど。何があったのか想像などしたくないが。

よしよし。隆三はとても不幸だったのだ。

よく判らないが、今日のところはケーキに免じて許してやろうという気になった。

「ジュースは？」

「紅茶なら、ホルダーに入ってるぞ」

用意がいい事だ。

そんな些細な事で機嫌の良くなった操は、たっぷりと詰められた保冷材の間から、ケーキを引っ張り出した。

5

昨日までの夏バテが嘘のように、体力が戻っている。

いつもなら、十月に入ってから感じる感覚だが、今年は一月ばかり早い。

そういえば、昨日はケーキをしっかり食べられたし、その上、夕飯も食べた。頭から湯気が出るほど腹を立てて、自棄食いをしたのが良かったのだろうか。それとも、朝の山登りを回避できた事が良かったのだろうか。

約束通り、朝ッぱらから車を出してくれた隆三は、校門の前まで操を送ってくれたのだ。

とにかく、原因は何にしろ、昨日までとは別人のように、操は快調だった。

快調ついでに、生徒会室に突入したほどだ。

「げ！」

そして、一気に気分が悪くなった。

「何だこれ……」

見渡す限り、野郎が転がっている。

どこから引っ張ってきたのか、タオルケットや毛布まで持ち出して、なるべく寝心地がいいように工夫している辺りが憐れだ。

操がケーキを持て余すほど食べて、手作りのソーセージとスモークチキンを食べている間も、彼らは展示の最後の追い込みをやっていたのだろう。

根は人の良い操は、何となく良心に痛みを感じてしまう。

「……あの……朝だけど……」

手近に転がっている人間に声を掛ける。

「……できてるって……」

うにー、とも、うにゃー、ともつかない妙な呻き声に混じって、答えらしきものが返る。
これはひょっとして、一人で受け付けをやらなければならないという事だろうか。
最後の追い込み作業の現場から、さっさとリタイアしたという事実は消えない。やはりこれは、一人ででも案内をするのが、大人な態度というものだろう。
「しょうがないな……」
目が覚めたら、交代に来てくれるだろう。
時計を見れば、開場まで三十分。
それぐらいあれば、だいたいの状況を把握できる。
「……おやすみなさーい」
そろりとドアを閉めて、化学室に向かう。
一階の教室は成績のいい体育会系クラブが占拠している。文化部は大抵二階だし、生徒会と合同展示になった映画部も、二階だった。
どうせ、真面目な展示を見に来る客などいないだろうとは思うが、夏休みを潰した模型の出来上がりを確認したい。
最後の追い込みに、右往左往する人間の間を抜けて、化学室に向かう。
「あれ？　鍵は……」
開いていたら不用心で嫌だし、閉まっていたら、鍵を探さなければならないから嫌だ。などと、我儘な事を考えながら、化学室のドアに手を掛けた。

「ちっ……閉まってるよ……」
がっくりと肩を落とした操は、職員室に行くべきか、生徒会室に戻るべきか、頭を巡らせた。
と、ガラス窓の向こうを人が通る。
「へ？」
どうやって入ったのだろう。
展示の都合で、びっしりとカーテンを引き回しているので、僅かな隙間から覗くしかないのだが、確かに人影が過ったのだ。
「誰かいる？」
乱暴に、ドアをノックする。
「準備室から回れよ」
矢崎の声だ。
「ありゃ。副総統？」
「準備室の方は開いている」
「判った！」
大声で答えて、隣の化学準備室に回った。
びっしりとガラス瓶が並んだ薬品棚。実験道具が並ぶ棚。
本当に危ない薬品は、金庫に入っているという事だが、準備室を含めて、化学室を貸して貰える辺りに、教師の生徒会への信頼の厚さが窺えた。

それでなくても不気味がられている山本に、部屋を貸してくれと言える勇気のある生徒が、そうそういないという現実もある。
「何？　一人で頑張ってたわけ？」
「いや。昨日あのまま帰ったからな。今朝、早めに来たんだ」
「おー……。いい人じゃん」
ぱちぱちと、白々しい拍手を送ってやる。
深々と頭を下げた矢崎は、つかつかと歩み寄ると、腕を回してきた。
「何やってんのさ」
久し振り、というのなら判る。
だが、昨日もずっと一緒だったし、夏休みの間も、二日以上顔を合わせなかった事がないほど、しょっちゅう会っていた。
「顔色がいいな」
唐突な科白に、操は目を丸くした。
「へ？」
「夏バテ、少しは治ったか？」
「……あ……うん」
なんだ。心配していたのか。
そう思うと、この暑い最中に、べたべた引っ付かれるのも容認できた。

真冬に、ガンガンにストーブを焚いて、アイスクリームを食べたり、厭になるほどクーラーの効いた店で、激辛タレの焼肉を食べるようなものか。

流石に、ちょっと違うような気もするが、暑苦しい身体に引っ付かれるのが嬉しいという感覚は、それぐらいしか思いつかなかった。

「準備は？　終わった？」

肩を抱かれたまま、至極現実的な確認をする。

「ああ。……見てごらん。それはそれはもう、汗と涙の結晶で、涙なくしては見られないという出来だ」

「何だかなぁ……」

言われるまま、化学室に向かう。

窓際にずらりとシンクと水道の蛇口が並ぶ化学室は、大きなテーブルが据えられた、大きな教室だった。

部屋の大きさといい、最初から暗幕があるところといい、本当なら、お化け屋敷に使いたいだろう。

もっとも、映画上映には向いているとも言える。そもそも、映画制作の話は、この部屋を獲得したからこそ、出てきたのだろうか。

そう思うと、ただの展示になってしまったのは口惜しいかもしれない。モニター用の大きなテレビと、ずらりと椅子が並ぶというセッティングは、どう考えても、客を呼びそうになかった。

何しろ映し出されるのは、今までの映画部が映していたビデオの編集モノ。〝翔峰山〟の過去と現在の比較という、絶対面白くないと断言できるような、ひたすら真面目一辺倒のドキュメンタリーだった。

部屋に入って左半分は、中央に矢崎の努力の結晶の模型が座っている。巨大なチュッパチャップスのようなマーカーは、AからJまで。同じマークが付いた十四型のテレビデオが、壁際に十台並んで、画像を垂れ流しにしていた。

「うーん……地味っていうか、愛敬がないっていうか……」

腕組みして、テレビと模型を見比べる。

クヌギの場所が表示されているのがC。ビデオにはクワガタやカブトムシが映っている。

実は、結構珍しい鳥が、毎年営巣する木もあるし、撮影にも成功しているらしいが、それは展示しない事になっていた。

何しろ、ニュースで流されると、必ず雛が盗まれるというのだ。今は空の巣でも、来年はどうなるか判らない。それぐらいだったら、何もないフリをしようというのが、全員の一致した意見だった。

「だからって、捨てられた巣ってのはなぁ……」

昔は鳥が住んでいたという木の洞。どこが珍しいのか判らないような花。見る人が見れば意味があるそうだが、操にはどうもぴんと来なかった。

「……どうした？」

廊下側の展示をしていた矢崎が戻ってきた。
「結構せこいかな……なんて」
「こらこら……。これでも、なるべく人手を割かなくていいように、いろいろと考えたんだぞ。どうせ役員は見回りやイベントの仕事で忙しいし、こういう形式なら、受付に一人いれば済むだろう？」
そんな事を言いながら、出口近くのテーブルには、しっかりコーヒーメーカーが準備されて、豆はもちろん、砂糖とポーションのミルクまで揃っているあたりは立派だ。
「ひょっとして、ここでさぼろうって？」
皮肉混じりに聞き返すと、矢崎は真顔で応じた。
「かもしれないな。……どうせ、映画部は記録で飛び回る事になるし、生徒会は先輩の接待で忙しいし……」
「げげ！」
確かに、そんな風に忙しければ、ここはなるべく暇にして置きたいだろう。
そういえば、元々やろうとしていたドラマ上映も、受付の人間はただ座っていればいいだけだった。
「結構大変だ」
「……まぁな」
ふわっと、腕を回してきた矢崎は、耳の横にキスをした。

「何すんだよ」
「キス」
軽く音を立てながら、キスを続ける。
「昨日、兄ちゃんに電話したんだって？」
「まぁ、一応……。模型運ぶのも手伝って貰ったし、お礼は早いうちにしとかないとね」
どうして迎えに来させる事が礼になるのか、いまいちよく判らない。
だが、矢崎と隆三の間に、妙な戦いがある事は、操にも判っていた。
「やだ。何すんだよ」
ネクタイを引き抜こうとする手を捕まえる。
「いいだろ？」
「良くない！」
「しっ……操……。しー」
「やだって！　見付かったらどうすんだよ！」
じたばたと暴れる。この際、男同士がどうのと言っても、通じないだろう。だったら他人の存在を利用させて貰う。
幸い、廊下の外にはいくらでも人はいる。派手な悲鳴でも上げてやれば、誰か助けに来てくれるかもしれない。
ところが、矢崎はにんまりと笑った。

「準備室の鍵も掛けたし、開場が遅れるってお詫びの看板も掛けてきた」
確信犯だ。
矢崎が外回りの展示を弄っている事は判っていたが、そんな企みだとは思いもしなかった。
「叫ぶぞ！」
「いいぞ……」
と、騒々しいアニメソングが聞こえてきた。
そういえば、隣りはアニメ研究会だ。
「卑怯者……」
「何とでも……」
「やめろって！　おれは男とえっちしたいなんて思った事ないんだから！」
ふっと身体を剝がした矢崎が、真っ直ぐに操の目を覗き込んできた。
平然と人を殴れる男の目だ。息を殺して、その強い視線を受け止める。
と、一瞬、矢崎の顔が泣きそうに歪んだ。
「……本気か？　本気で言ってるのか？」
初めて、矢崎の真剣な表情を目の当たりにしたような気がする。どうすればいいのか、何と答えるべきか、言葉も見付けられず、操はただ視線を受け止めていた。
「……操……」
甘い声。

矢崎は、自身が真剣なのだと、その声だけで伝えてきた。
「……逃がさないよ。操……」
囁きながら操に伸し掛かった矢崎が、ごそごそと動いていたと思うと、いきなりビデオが動き始めた。
数台のビデオから、てんでばらばらにナレーションが流れる。
煩い。
「操……」
それなのに、耳に流し込まれる甘ったるい男の声が、操の背筋をぞくぞくさせた。
「あんまり我慢させるなよ……。みっともないぐらいガッついてる……」
「知るかよ。男に欲情してんじゃねーよ」
どうやら矢崎は〝兄にしてしまえ大作戦〟に乗せられていた訳ではなさそうだ。
長い夏休みの間、それなりに楽しい計画など立てていたのだろう。それなのに、初めて見る人は必ず大病ではないかと心配してしまうほどの夏バテの所為で、何も言い出せなかったらしい。
可哀想に。
ちょっとばかり、心が痛む。
何しろ、雑賀さんちの操くんは、友達が遊びに誘ってもくれなければ、臨海学校も欠席しなければならないほどの虚弱体質という事になっているのだ。実は夏期限定の虚弱体質だという事は、まだ理解していないに違いない。

「お前、兄貴が一人増えたぐらいに思ってるんじゃないの？」
まさか、そうなるべく、必死で努力したとは言えない。
ぷるぷると首を横に振る操に、矢崎は苦笑を浮かべた。
「それとも焦らしてるのか？　男を手玉に取るのが、そんなに面白いか？」
「殴る！」
ぶん、と突き出した拳を、矢崎は掌で受け止めた。
そのまま拳を握り込んで口元に運んだ矢崎は、ねっとりと舌を這わせた。
「判ってるか？　男を揶揄うとどんな目に遭うか……。判っててやってるのか？」
「揶揄ってなんか……」
「知らないとでも言うつもりか？　何も気付かなかったって？」
「……だって……。言ってくんないじゃん。言ってくんなきゃ判んないよ」
拳に、歯を立てられる。
「痛い……」
嘘だ。
傷みなどない。
ただ、痛いと言って、甘えているだけだ。
「痛いよ……」
そういえば、兄達は手を引いてくれた。操を大事にしているのなら、矢崎も手を引く筈だ。

だが、首筋に歯を立てられる。
シャツが脱がされて、ズボンが下ろされる。
「ち、ちょっと……。タンマ！　待て！」
がっしりとした、もう半年の間、同い年の男の身体が伸し掛かってくる。
キス。
矢崎のキスは、目の裏がくらくらして、自分の身に何が起っているか、判らなくなるぐらいだ。
「んん……」
喉の奥が鳴る。
「操……操……」
慌ただしく、身体を這い回る手が酷く熱い。
重なる身体も。
「やだっ……」
身体の奥を探る指。
ぞっとする。
自分が男だと、本来は男と結ばれる身体ではないと、意識させられる事。
そう、男が男の恋人を選ぶのは、近所の口さがないババアに付け入る隙を与えるぐらい、悪い事なのだ。
「いやだ！」



思い切り暴れる。
「いやだあぁぁ！」
瞬間。恐怖が、操を支配していた。
精一杯暴れているのに、微動だにしない。いつでも殺す自信があるからこそ、矢崎は操の我儘に付き合っていたのだろう。
同じ猫科だからと、圧倒的な力の差に気付きもせず、仔猫がライオンにじゃれ付いていたようなもの。
好きとか嫌いとか言っていられる段階ではなかったのだろう。
最初から暴力だった。
強姦とは思っていなかったが、操が認めた行為ではない。
それでも、キスは好きだった。
そして、今の操に容認できるのは、キスまでだった。
「操？」
「……」
悔しくて、涙が零れる。
そんな事を矢崎に知られたくない。それなのに、必死で逸らす顔を、矢崎の手はあっさりとねじ向けた。
「そんなに嫌？」

酷く真剣な顔。
口を開けば、そのまま声を上げて泣き出してしまうだろう。
だから、操は唇を引き結んで、矢崎の顔を見詰めていた。

6

冷たいタオルで顔を拭ってもらって、制服を着せてもらう。
その上、山本先生ご自慢の重役椅子を占拠した操は、目で矢崎の動きを追っていた。
どんな実験に使うのかは知らないが、製氷機まで備え付けられている化学準備室は、本当に何でも揃う。
まさか、いい歳をして泣き出した生徒の目を冷やすために使われるとは、想定されていないだろうが。
氷の詰まったビニール袋と冷たいタオルを受け取った操は、頬を膨らませていた。
どんな顔をすればいいのか判らない。ある意味で、生徒会室で抱かれた時より、ずっと酷い目にあったような気がする。
今更、泣き顔を見られた事が恥ずかしいというのではない。しかし、矢崎に泣かされたのだと思うと、どうにも承服できない気分にさせられた。
ダメージを受けるのは、何も肉体だけではないと、思い知らされていた。

痛いのも苦しいのもしんどいのも、全部操だとすれば、不条理だと思う。
それなのに、甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる矢崎が、妙に傷付いた顔をしているのが、余計に気に障るし、腹立たしかった。
「もういいよ。客を入れたら？」
素っ気なく告げる。
「……そうだな」
「早くしろよ。これ以上変な事を言われるのは、勘弁だからな。こんな展示で準備中で人を入れないなんて、怪しすぎるよ」
「……本当に操はいい子だな……」
ぎこちない笑みを見せた矢崎は、軽く首を竦めると、化学室に向かっていった。
がたがたと音がするのは、ドアを開けているからだろうか。
「ごめん……。だって……」
タオルに顔を埋めた操は、大きく溜め息を吐いた。矢崎の事は嫌いではない。だが、恋人にしたいのかと言われると、違うと思う。あんな風に傷付いた顔をさせたくはないし、やたらと構われるのも嫌いではなかった。
「……けどさぁ……」
えっちしたくないと言ったからといって、拗ねられても操は困るしかないのだ。絶対、自分は悪くない。

それなのに、何かが引っ掛かっていた。
折角、夏バテが回復してきたのに、こんなに思い悩んだら、また食欲がなくなる。そして、何も考えたくなくなるのだ。
考えなければならない事でも、ほんの少しでもいいから、先送りしたいような気になる。
うだうだと悩んでいた操は、化学室との間のドアが開く音に、視線を上げた。
表情の硬い矢崎が、ぎこちない笑みを浮かべる。
「……操……。お兄さんが来てるが……」
「……ちい兄ちゃん？」
「ああ……」
「本当に来たんだ……」
「あ？」
「何でもない。……いいよ、行くから……」
下手に渋ったりすると、後で何を言われるか判らない。
自分に気合を入れるように立ち上がった操は、もう一度目に氷の袋を押し付けると、それを持ったまま、化学室に向かった。
疎らに客が入った部屋の中で、隆三は一際異彩を放っていた。
いくら一般客の出入りが自由だとはいえ、ロッカーでございます、というスタイルの隆三は人目を引く。

「……何してたんだ？」
憮然とした顔で、隆三が模型を睨んでいる。毎日毎日矢崎が訪ねてくる口実になったものだと思うと、腹も立つのかもしれない。
「誰かさんのお陰で寝不足でさ……。夏バテも酷くなったし……」
昨夜の所業を当て擦ってやるのだが、ひょいと眉を上げただけで無視した隆三は、操の首を捕まえた。
まじまじと目を覗き込んでくる。
「どこでもサカるんじゃないよ、青少年。ちょっと体調が良くなったら、これだ……」
「え？　サカる？」
さすがに、十六年間、間近で観察を続けていた隆三は、何かあったという事には気付いているようだった。
まさか、未遂だったとは言えない。
まるっきり外れともいえない事を想像して、ぎろっと、矢崎を睨んだ隆三が、操の肩を抱く。
「貰っていっていいかな。どうせ役に立たないだろう」
「はい」
あっさりと応じる矢崎は、これ以上操の面倒を見る気はないという事らしい。
さすがに、橋本王国のナンバー2だ。隆三の意味ありげな視線を平然と受け止めた矢崎は、操には一瞥もくれなかった。

そのまま、隆三に拉致されるように、化学室から連れ出される。
等身大の女の子の手書きポスターを所構わず貼り付けた、アニメ研究会。恐ろしくチープなハリボテを被った特撮研究同好会。
操にとっては騒々しいだけで、何の興味もない展示がされた部屋の前を、隆三に引き擦られて歩く。
「何だよ。……何すんだよ！　いーじゃん。俺あそこで休んでんだからさ」
「うるさい」
びくっと身体を震わせた操は、恐る恐る兄の顔を見上げた。
怒っているのか。
今まで、こんな事は一度としてなかった。
大事にしているスネアをブチ破った時も、ゲンコツいっこで許してくれたぐらいだ。
「……何だよ……」
腕を掴まれて、引き擦っていかれる。
「何だよ。ちい兄ちゃん、痛いって！」
どうして、こんなに怒っているのだろう。矢崎を恋人だと、勝手に誤解して勝手に怒っている。
これじゃ、ゴシップをばらまく浜田のババアと同じだ。
隆三も、矢崎も、操の事を見ている訳じゃない。自分の思い込みを勝手に押し付けているだけだ。

ずん、と、頭の上に重しが載ったような気がする。
隆三は三人の兄の中でも、一番、話ができると思っていた。何があっても、最後には絶対味方になってくれると思っていた。
思い違いだったのだろうか。
何があっても、隆三だけは操を見捨てたりしないと信じていたのに。最初から、見ていなかったら、味方も何もない。
「……どうして男なんか……」
ぼそっと、自嘲気味に呟かれた言葉は、操の背筋を凍らせた。
足が重くなる。
「勝手に決めるなよ……」
ばっと、手を振りほどく。
「なんだって、勝手に決めるんだよ！　勝手に決めつけるんじゃねぇよ！」
「操？」
訝しげに眉を寄せた隆三が、はっとしたように息を呑む。
どうやら、隆三にしてみれば、無意識のうちに呟いた言葉だったらしい。
「拘りたくもねーんだろ？　いーよ。ほっといてくれよ！」
握り締めたままだった氷の袋を投げ付け、ばっと駆け出す。
顔も見たくなかった。

気に入らないなら気に入らないで、はっきり言えばいいのだ。それを、近所のババアに託けて妙な説教をしてみたり、弟を猫可愛がりする兄を演じてみたり。

真実を確かめる勇気もないくせに、妙な説教をたれるような人間を兄に持った覚えはない。

真っ直ぐに向き合っていれば、疑いを晴らす事もできただろうし、万が一、本当に矢崎を恋人にしたとしても、相談する事も、折り合いをつける事もできるだろう。

だが、隆三は自分を見てくれていなかった。

それが悔しい。

今の今まで気付かなかった事が悔しい。

階段を掛け上がり、渡り廊下を走り抜け、生徒会室に飛び込む。

と、そこには誰もいなかった。

「何だよ……」

いつも自分の事をいいように揶揄ってくれる生徒会の面々も、今日は忙しく飛び回っているに違いない。

「チクショウ……」

のろのろと部屋に入り、小さなキッチンに潜り込む。

「……くそ……。暑いじゃねーか……」

二畳サイズの小部屋に、シンクとガス台、小さな冷蔵庫が置いてある。

まだほんのりと熱が残っているガス台。元気に動いている冷蔵庫。

その両方が、この小部屋の温度を上げているのだ。
ムカムカと腹を立てながら、膝を抱えると、腹立ちと悔しさで、涙が溢れてくる。
「……あれ？　操くん、いない？」
ドアが開く音の後、聞こえてきたのは昭夫の声だった。
「……矢崎……さん？」
「お兄ちゃんの方だけど……」
キッチンにいると判ったのだろう。ひょいと顔を覗かせた昭夫は、思い切り眉間に皺を寄せた。
目が赤くなっているだろう。
バカみたいに、だらだら泣いてしまっていたのだから、目を擦ったぐらいでは、ごまかせるはずもない。
それなのに、昭夫は何も気付かない振りをしてくれた。
「ひょっとして、お留守番？　ここにいなきゃダメなのかな」
「全然、問題ないです。ひょっとして、アメフト部に行くんですか？　だったら、お化け屋敷、付き合ってくださいよぉ！　一人じゃ怖くってぇ」
おどけて言って見せる。ついでに、思い切りよく笑ったつもりだった。
しかし、失敗したようだ。
顔を歪めた昭夫が、手を伸ばしてくる。
頭を抱いて、柔らかく撫でてくれた。



「何？　何かあったの？」
何か、昭夫にはみっともないところばかり見られているような気がする。それとも、一度見られたから、二度も三度も同じだと、心のどこかで思っているのだろうか。
子供のようにだら泣きしても、決して見捨てられないと思っているから、ガキみたいに泣いてしまうのかもしれない。
「まさか、孝昭が何かしたんじゃないだろうね」
ぷるぷると首を横に振る。
この、見た目はたおやかな麗人は、怒らせない方がいいと思わせる何かがあった。
操が泣いてしまった原因の半分は弟さんです、などと言ったら、何をやるか判らない。
「違いますって。……夏バテで、ちょっとナーバスになってるから……」
「何、バカな事言ってんの。夏バテして泣くなんて、聞いた事もないよ。嫌だったら、何があったのか言わなくてもいいけど……。それって、操くんにも責任があること？　ほんの少しでも、自分にも悪いところがあったって思える？」
「……そう……だと思う」
口籠もるように応える。
「僕の目を見て言える？」
凛とした声が、自然と背筋を伸ばさせた。
むさ苦しい男どもを従える〝女王サマ〟が、その本質を垣間見せていた。

「納得できること？」
「……納得はできないけど……仕方ないかもしれない……」
ほうっと溜め息を吐いた昭夫は、こつんと、額を合わせた。
「いい？　たとえ、孝昭が相手でも、僕は操くんの味方だからね。もちろん、他人なんか、どうでもいい。……だから、誰かに話してもいいと思ったら、真っ先に僕に話してくれるよね」
こくりと頷く。
引っ付いた額の部分が、ぐりっと動いた。
「……兄ちゃん……」
隆三と言い掛けた言葉を一瞬飲み込んで、関係のない長兄の名を挙げる。
「和隆兄ちゃんが相手でも？」
どうやら、時々会っているらしい長兄の名を口にしてみる。
「……お兄さんが、何か言ったの？」
そうだった。
ふんわりと優しい雰囲気を持っていても、昭夫は翔峰の生徒会長を務めたほどの男だった。察しはいいし、解析能力も人並み以上だ。
柔らかい物腰に騙されて、ぺらぺらといらぬ事を喋ってしまったらしい。
「……和隆さんじゃないよね。今日はどうしても来れないって言ってたし……。ひょっとして、隆三さん？」

うわ。どうしよう。
ばっと、口を押さえる。
その行動が、何より如実に事実を白状している事になると判って、わたわたと慌てる操に、昭夫は悲しげな笑みを見せた。

7

アメリカンフットボール部がやっているお化け屋敷は、それはそれは盛況だった。
昔、痴漢騒ぎがあってからは、直接手を触れてはいけないとか、客にライトを持たせなければならないとか、いろいろと制約が付いたらしい。
だが、夏場の文化祭で、一番人気なのは、やはりお化け屋敷なのだ。
しかも、アメリカンフットボール部は、力技の仕掛けが人気を博していた。
「相変わらず派手だねぇ……」
派手なだけで、チープな入り口の看板を見上げた矢崎昭夫は、操の腕を摑んで、中に突入した。
お化け自体は怖くはない。
ダースベイダーだの、マミーだの、中にはゴリラのマスクを被った者までいるが、頭抜けた大男がやると、それなりにインパクトがある。ただし、安っぽいマスクの所為で、半分笑いを取るという形になっていた。

ライトで顔を照らされて、慌てて逃げ出すマミーなどというのは、コミカルな光景だ。
ついつい、真剣になってマミーを追い回すなどという客もいるのだが、彼等が行った先は、足元が揺れる仕掛けになっていた。
一瞬、床が揺れたように思う。
もちろん、床ではなく、似たような素材を張った板を、力任せに持ち上げたのだが、客に悲鳴を上げてもらうには、充分な切っ掛けだった。
女の子の悲鳴は、お化け屋敷に必要不可欠な効果音だ。
「……うわぁ。凄い凄い。今年は凝ってるねぇ！」
楽しげに宣う昭夫。
うっとりと眺めているのは、壁の血糊だ。
何しろ、暗幕を引き回して、真っ暗にした教室。ちょっとした迷路仕立てになっているルートを、自分で探そうとして、血飛沫だの、壁に埋め込まれた顔だのを照らし出してしまうのだ。
「うぎゃっ！」
顔が動いた。
尻尾を踏まれた猫のような、潰れた悲鳴を上げてしまった操は、昭夫の腕にしがみ付いた。
「……なるほど。こうやって使ったのかぁ。ほらほら、この顔。ベースがマネキンなんだよ。知り合いの倉庫に転がってるのを見付けてさ。けっこう不気味なのに、欲しいなんて言うから……」
「……そ、そうなんですか……」

でれっと目玉を垂れ下がらせた顔が、操の動きに合わせて動いている。
「ううう……」
偽物だと判っている。だが、判っていても、気持ちが悪い事には変わりはないのだ。ついつい昭夫にしがみ付いてしまう。
「大丈夫だって」
「あの顔、見てるよぉ」
昭夫は兄達以上に、操を甘やかすのが上手い。抱き付いていれば安心できるし、駄々を捏ねるのも楽しい。
同じ男と付き合うのでも、こういう人と付き合うなら、たいして悩まないだろうに。
莫迦な事を考えていると、不意に目の前が明るくなる。
「半分来たみたいだね」
ふたつの教室のドアとドアの間を真っ赤な布で繋いでいるのは、入り口のところからも見えていた。
さらに、もう一教室分、こんな状態が続くのかと思うと、何と言うか、嬉しいようなうんざりするような……。
と、通路の途中を捲り上げた昭夫が、通路以外の空間へと平然と足を進めた。
「へ？」
「おいで……」

手招きされて、後に続く。
「あれ？　矢崎先輩……。休憩ですか？」
こちらを向いたのは、トイレットペーパーを巻き付けたマミーだった。
このクソ暑いのに、ご苦労な事だ。
「悪いけど、ちょっと休ませてくれる？」
「どうぞ、どうぞ」
どうやら、入り口側の部屋のドアを取り外して、ベニヤ板で遮った残りの半分を、控え室への入り口としているようだ。
ライトはないが、窓を塞いでいないので、充分に明るい。その所為で、トイレットペーパーのマミーは笑いを誘うものだった。
「操ちゃん、怖かった？」
巨大なマミーの正体は、どうやら雪弥らしい。聞き覚えのある声に、操は大男をしげしげと見上げた。
「上手かっただろ？　あのマネキン……。結構、狙って動かすの大変なんだぞ」
「雪弥ちゃん、そういう事してたわけ？」
「だって、矢崎の命令だもん。操ちゃんが入ったら、怖がらせろって……。まったく、なーに考えてんだか……。まぁ、考えるまでもないがな」
ひひひひと、マミーに似合いの笑い声を上げた雪弥は、ベニヤ板に顔を押し付けた。

ご苦労なことだ。
普段はマミーを演じて、休憩時間まで仕掛けを動かすとは、なんて働き者だろう。
「矢崎さんね。……趣味悪いなぁ」
「きゃーとかいって、抱き付いて欲しかったんじゃねーの？　まさか先輩と来るとは思わなかったしさ……」
顔はベニヤ板に向けたまま、マミーが宣う。漏れ聞こえてくる女の子の悲鳴は、雪弥の努力が報われている証拠だった。
恋人を連れてお化け屋敷に入る男の目論見は、彼女に頼られてみたいからに違いない。矢崎も、そんな下らない画策をして、喜びそうな男だ。
「操くん？　こっちへおいでよ。コーラもあるよ」
長細い控え室は、奥にクーラーボックスが備え付けられている。
「ここだったら、絶対に見付からないから。判ってるよね？　デートの邪魔はしないでよ」
言葉の後半は、雪弥に向けられたもの。ばっとベニヤ板から顔を外した雪弥は、きっぱりとした敬礼をしてみせた。
「……かしこまりました」
苦笑を浮かべた操は、素直なマミーに手を振って、奥に向かった。
ディレクターチェアが用意されているあたり、ちゃんと考えられている。布の椅子は、教室の椅子よりのんびりできるのだ。

「静かにね。……声が聞こえるかもしれないから」
そんな事を言いながらも、昭夫はくすくすと笑っている。
真っ暗闇の中を歩いていて、押し殺した笑い声など聞こえたら、それはそれで恐ろしいだろう。
『橋本さんいないじゃん。どうしてよぉ！』
『知るわけないだろ。去年は、ちゃんとエスコートあったんだから』
『詐欺だよ、詐欺。なんでいねーのさ』
『くそ。今年こそ捕まえて、一発やってやる気だったのによ』
うんざりするほど乱暴な口調の女が、机と椅子を積み上げた壁の間を歩いている。
真っ黒な顔に、色を抜いた髪。似合いもしない化粧がまざまざと脳裏に浮かんでくるような口調だ。
げっそりとする操に、昭夫はコーラを差し出してくれた。
「可愛いねぇ」
と、たおやかな美人が、とんでもない事を口走った。
「可愛い？　ひょっとして、あれが？」
机の壁を親指で示した操に、昭夫はにっこりと笑う。
「可愛いじゃない」
オヤジな発言だ。まさか、大学生になると、あんなバケモノみたいな女が、可愛く見えるようになるのだろうか。

「同級生とか仲間の目ばっかり気にして、どんどんエスカレートしちゃってるんだよ。ほら、男だって、同じようなものじゃない。未だにソリコミ入れて、前髪立ててるヤツとか、絶対似合わないのに、ロン毛にピアスとか」

それは認める。

要は、女の子の方が目立つというだけだろう。それでも、彼女にしたいかと言われると、勘弁してくれとしか言えなかった。

『えー？　矢崎さんいないのぉ？』

『矢崎さん、アメフト部じゃないし』

今度は、男女の組み合わせだ。聞き覚えのある男の声は、アメフト部員らしい。どうやら先程の女が言っていた、エスコートサービスは、今年もあるようだ。

『ひょっとして、可愛くない子はエスコートしないとか？』

『あったりまえだろ。別に決まりがある訳じゃないし……。可愛い子が怖がってたら、ついてってやるって、言うだけだよ』

熊とらしい科白でも、自分が可愛いと認められたら、悪い気はしないだろう。

まんざら嘘でない証拠に、最初の二人にはエスコートもなければ、マネキンの首回しのサービスもないようだ。ベニヤ板から顔を離した雪弥は、トイレットペーパーの隙間にストローを突っ込んだ。

烏龍茶を啜ると、仕事を再開する。

「お……。なんだ、戸田の奴……」
部員がエスコートしている女の子が可愛かったのか、ベニヤの穴を覗き込んだ雪弥が、手元のレバーを操っていた。
悲鳴。
どうして、女の子はこうも楽しそうな悲鳴を上げられるのだろうか。
『やだぁ！』
『大丈夫だって』
男の声も楽しげだ。
『矢崎さん、どこにいるのよ』
『やだ！　ミカちゃんが見付けたんだからね。手ェ出さないでよ！』
『そんなの判んないじゃん。矢崎さん、ロリロリ嫌いだよ』
『嘘ばっかり！　ミカちゃんが好きだって言ってんだよ！』
きゃあきゃあ喚いているのは、窓の外の少女だった。
夏の最中に、白い肌を保った二人は、白いワンピースを着ている。背の低い方の少女がミカちゃんらしく、小さい目を精一杯大きく見開いていた。
「……すっげ矢崎さんもてるんだ……」
初めて、女たちの意見を聞いたような気がする。
髪を伸ばしている訳でもないし、染めても、脱色してもいない。ちょっと見は、真面目一辺倒

に見える男だが、現実には複雑な事情を抱えている。それが、影があるように見えるのだろう。
もともと顔はいいのだし、もてない筈がない。
それなのに、どうして男になんか興味を抱いたのだろうか。
「……ひょっとして、孝昭さんて、趣味が悪い？」
「趣味はいいと思うよ。僕も、自分をミカちゃんなんて呼ぶ女は、好きじゃないな」
「そっかぁ、昭夫さんはガングロ娘の方がいいのかぁ」
「ミカちゃんよりはね」
くすくすと笑う昭夫は、ポケットから財布を取り出した。
「悪いけど、お好み焼き買ってきてくれる？　五人分ぐらい。……マネキンは僕が動かすから」
奢ってくれると判断したのか、雪弥は嬉々として、持ち場を離れた。
「あ、やらせて、やらせて」
お化け屋敷で脅かし役というのは、結構楽しそうだ。
少なくとも、一瞬でも、矢崎の事を忘れられるだろう。
夏バテの頭で、答えの出ない事をいつまでもうだうだと考えたくない。
雪弥に席を代わってもらった操は、ベニヤ板の穴を覗き込んだ。
ぼんやりと、通路が見える。
「……あれ？」
通路を通っている時は気付かなかったが、赤いライトが点いている。そういえば、マネキンの

顔をいつまでも照らしていた訳ではないのに、その動きが見えたのだ。
「よし……」
二三度、マネキンの首を動かす。
「ゆっくり動かした方が怖いからな。がんばれよ」
雪弥がアドバイスをくれる。
「判った！」
舌なめずりした操は、真剣に犠牲者を待っていた。

8

『……大丈夫？　泣かなくていいから……』
聞き覚えのある声に、操の神経は一気に研ぎ澄まされた。
『だってぇ。ミカちゃんお化け嫌いだもん』
ミカちゃんだと？　そいつが、何で矢崎弟と一緒にいる？
おい、待て。
矢崎。お前はそんな女が趣味なのか？　そいつは昭夫がガングロ女の方がまだましだと言ったぐらいの女だぞ。
腹の底から湧き上がる怒りに、操はマネキンを動かすレバーを握り締めた。

『ミカちゃん、もう歩けないぃ』
覗き穴の向こうには、矢崎と目の小さい女がいた。腕に女をぶら下げて歩く矢崎は、口元に笑みを浮かべている。
「何だよ、あれ……」
ついさっきまで、操を口説いていた男が、今は女をぶら下げて歩いている。
きっと、文句を言う筋合いはないのだろう。えっちもさせてくれない、恋人とも認めてくれない相手に、いつまでも拘るような男は、未練がましいと言われるのが普通だ。
しかし、それでも、こうもあっさり切り替えられると、何だか悔しい。
腹立ち紛れに、マネキンの首を矢崎に向ける。
『やだぁ！　あの首、ミカちゃん見てるぅ！』
ええぃ、このバカ女。
小麦色というより、墨色に焦げた、恥じらいも何もない女の方が、百倍もましだ。
何が腹が立つといって、矢崎に似合っているのが、腹が立つ。
目が小さいのも、今時のアイドルの大半と同じと思えば、可愛らしいと言えるのかもしれないし、さらさらの長い髪は、暑苦しいというよりは、女らしさを演出しているものだろう。
「うりうり……。怖がれ。こいつ……」
内心の呟きの筈が、ついつい口から零れる。
途端に、わざとらしい悲鳴が帰ってきたところが、尚のこと憎たらしい。

『やだぁ！　見てるってばぁ！』
マネキンの首をコントロールするのは、難しい。
『やめる？　ここで抜けられるよ』
『やめるぅ。ミカちゃん、だめぇ……』
糸を引くような甘え声。
間近に聞こえた声。
それは操が潜む控え室とは別の方向に抜けていった。
「……何だかなぁ……」
全身の力が抜ける。
ぐったりと、その場に座り込んだ操は、机に載せられたお好み焼きに手を伸ばした。すっかり冷えてしまったお好み焼きは、硬くて不味い。
結局、アメリカンフットボール部の女王サマは、部員に拉致されたまま。ここは操が一人で残っている。
誰もいない部屋で、不味いお好み焼きをもそもそと食べるというのは、とことんみじめな気分になった。
「やっぱ女がいいんじゃん。……ちぇっ。気紛れに付き合わせるんじゃねーよ」
烏龍茶でお好み焼きを飲み下し、再びベニヤ板の穴を覗く。
「そーだよ。初めっからおかしいんだって。女にモテまくるくせに……。オレなんか、どこがい

いってのさ……」
ぶつくさと文句を並べる。
乱暴に動かすマネキンの首は、一瞬、女の子に悲鳴を上げさせられたが、すぐに笑い声を浴びせられた。
男同士の恋愛沙汰など、笑い話以外の何者でもないだろう。
「……そーだよ。女の方が面倒ないじゃん」
男の方がいいのは、絶対妊娠しないという点ぐらいだ。だが、勝手に濡れない男に突っ込もうとすれば、ゼリーを使ったり、舐めたり解したり、めちゃくちゃ手間が掛かる。
それぐらいなら、コンドームを使う方が、ずっと便利で楽だろう。
とりあえず、操にもそれくらいの判断はできる。
「……だよ。……うりゃ！　驚け！」
人影を見付けると同時に、思い切り良くマネキンを動かした。
「うわっ！」
叫んだのは操だ。
首が抜けた。
「まず……」
「くおら、操！　何やってんだ？」
マネキンの首が、覗き窓に突き付けられる。



「うきゃっ！」
「うきゃっじゃないだろ。うきゃっじゃ。全く乱暴なんだから。ほら、しっかり持ってろよ。差し込むから……」
覗き穴の向こうには、マミーがいた。
どうやら、雪弥は持ち場に戻ろうとしていたらしい。
「ごめん……」
「いいから……。ちゃんと持ってて」
ごりごりと音を立てて、マネキンの首が差し込まれた。
「ゆっくり動かした方が怖いんだから。振り回すんじゃない」
「ほーい」
子供のような返事をした操は、トイレットペーパーの怪人の動きを見守った。
コミカル部門のキャラクターは、物陰に潜んで女の子を待っているようだ。
見上げるような大男が、身体を揺らしながら逃げるというのは、確かに楽しいだろう。しかも、隠れる場所が違うために、何度でも楽しめるという趣向になっている。
「がぁぁぁ……」
『きゃあ！　やだぁぁぁぁ。酷い。矢崎さん。ミカちゃんこんなの嫌いだって言ったのにぃ！』
〝ミカちゃん〟だ。
途中でリタイアしたくせに、又しても入ってきたらしい。

『だから、待ってれば、探してきてあげるから』
『捨てて行くの？　酷い。ミカちゃん置いてくなんて、酷い！』
なんなんだ。
ホントにあんなのがいいのか。
余りにも何度も聞かされていると、本気で腹が立ってきた。
『だから……。ガラスのイヤリングだよね。探してあげるから、外の明るいところで待ってればいいよ……』
矢崎の優しげな声に、本気でムカムカと腹が立ってきた。
『一人で行けないもん』
『判った判った……』
再び、二人は途中離脱した。
「……何だアレ……」
呆れた声を出す操。
「可愛い……」
うっとりと呟くマミー。
あんなのがいいという男は、ここにもいたらしい。
「ガラスのイヤリングだって。探してやれば？」
壁越しに助言すると、元気のいい声が返ってきた。

「おう！」
マミーの演技を忘れた雪弥が、その場にしゃがみ込んだ。
脅かし役はライトを持っていないので、手探りでも探すつもりらしい。
つまり、ミカちゃんは、雪弥にとってそれだけの価値がある女なのだろう。
矢崎も同じかもしれない。
自分の事で手一杯の操は、あんな女を可愛いとは思えないが、体力にも頭脳にも自信がある男は、あんな女こそ可愛いのかもしれない。
「……莫迦みたい……」
あんな女に負けたかと思うと。
いや。戦いにすらならなかった。
溜め息を吐いた操は、悲鳴と足音が近付くのを待って、穴を覗き込んだ。
滲んだ視界では、相手が誰だが判らない。だが、ゆっくり動かすのなら、相手が誰でも同じだろう。
何も考えたくないから、マネキン操りに専念する。
そうやって、昼休みのベルが鳴るまで、操は控え室に籠もっていた。

クールが熱い ACT.4



1

「雑賀！　雑賀ってば！　シカトすんな！」
大声で呼ばれて、振り向いた操は思わずその場から逃げたくなった。
マミーやらフランケンシュタイン博士の怪物やらに声を掛けられても、ここまでの衝撃はないだろう。
血塗れの扮装でも、明るいところで見ればただの笑い者になる。
だが、焦げたような日焼けに白髪としか言いようのないメッシュの入った灰色のロングヘアに、白と水色、挙げ句にラメまで入ったメイクにちらちら揺れる蝶の髪飾り。さらに、太股剝き出しのミニスカートに、毛糸のベスト。もちろん足元はルーズソックス。それらを総て身に着けた、恐ろしいまでにプロトタイプ的なコギャルファッションというのは、生半可なバケモノよりもっと怖かった。
「……杉本？」
「何、ボケてんだよ！　これっぱか塗っただけで判んねぇのか？」
判るわけがない。まるっきり、目一杯、女に見える。ただし顔だけ。
しっかり筋肉が発達した脚は見間違う事なく野郎のものだ。
そう思うとパンツが見えそうな短いスカートは一種凶器だった。

視線がスカートの裾の辺りを彷徨っていたのだろうか。
杉本は恐ろしい事を聞いてくる。
「ぱんつ見たい？」
「勘弁してよ……」
あっさりと泣きを入れた操に、杉本は楽しげに笑った。
「何やってんだよ。どこのオカマ喫茶だぁ？」
「違えよ。バンド、バンド」
「お前が？」
「そ。ダンサーズ」
間違いなくコミックバンドだろう。
しかし、誰も彼もが、そんなに女装したいと思うものなのだろうか。〝伝統〟のオカマ喫茶ならまだしも、バンドのバックダンサーまでが女装する必要はない筈だ。
まぁ、変身願望を、一番手軽に満たしてくれるものと思えば、理解できなくもないが。子供の頃に、散々妹代わりにされた操などは、想像するだけでも食傷する。
「暗くなって、そんな恰好でうろつくなよ。思いっきりバケモンだよ、それ」
「山姥ってか？」
「何、誰かに言われたわけ？」
「……うっせーな」

ひょっとすると、親に何か言われたのだろうか。不機嫌そうに鼻に皺を寄せた杉本は、ベストの下を引っ張って、風を送り込んだ。

しかし、よく焼けたものだ。

夏バテで、陽があるうちは一歩も外に出なかった操とは、見事なまでに好対照である。

「そうだ。お前、美白娘やんない？」

「へ？」

「ガングロ部隊は結構揃ってんだけどさ、白組が足りねーのよ」

莫迦莫迦しい。

映画のヒロインをやりたくなくて、模型造りに励んだ操である。女子コーセーなど、死んでもやりたくない。

「イーヤー」

「へぇ。やりたいんだ……ホント、イイ奴だね、お前」

「……んだと！」

「まあまぁ」

一切の返答には耳を塞ぐと、最初から決めていたのか、杉本はこれ以上なく強引に、操の腕を引いて歩き始めた。

「放せ！　バカーッ！」

と不意に、杉本は操の耳元に、妙な色で塗りたくった唇を寄せてくる。

「いいの？　みさおチャンてばそんな事言って……お前、指名手配されてんだよ」
態とらしい囁き声に、つい操も囁き返してしまう。
「なにそれ？」
「だからぁ、指名手配。……総統と副総統と……それから、恐ろしくガタイのいい兄ちゃん――あれって、雑賀のアニキ？」
凄く、ものすごーく厭な顔触れだ。
その心情が顔に出たのか、杉本が厭味なほど嬉しげに微笑む。
「て、ワケで。おいらは、可愛い親友を匿ってやろうって言ってんの……判る？」
「でも……だって……」
そんな風に言われてしまうと、つい抵抗する力が抜けてしまう。
「任せろって。思い切り大人数だから、混ざってりゃ判んないって……。２Ｂの教室が俺らの楽屋だからさ」
「ちょ、ちょっと待てよ。で、やるのは何なのさ。曲は？　ダンスったって、いきなり踊れないぞ」
「大丈夫大丈夫。みさおチャン、マジに考え過ぎ」
杉本の方が考えなさ過ぎという案はないのだろうか。
妙に自信たっぷりに言い切った杉本は、操の手を摑むと、ぐいぐいと引っ張って階段に向かい始めた。

「お……おい！」
よろけても、転がりそうになっても、杉本は手を放そうとはしない。
逃げられると思っているのだろう。
概ねそれは正しい。
幸か不幸か、階段に蹴躓く事もなく、操は二階に連れていかれる。階段を上り切ったところで、一瞬だけ足を止めた杉本が、品定めをするように操の身体を眺め回した。
「雑賀なら、モノ本の制服で平気そう」
「なにそれ……嘘モンとか本モンとかある訳？」
「あるワケ。モノ本は、ネェチャンのお古とか妹の現役モノ」
「じゃ、偽モンは？」
何だか、妙に好奇心を掻き立てられて、操はつい真剣に聞いてしまう。
「コスプレ用のヤツ。……ウエスト六十から七十……からってトコが凄いだろ？」
「ふーん」
真顔で頷くついでに、逃げ出す気力が抜け落ちてしまった。多分、理性と一緒に耳からでも零れ落ちたのだろう。
莫迦な事を連想しながら、引かれるままに廊下を歩く。逃げ出す事から意識が解放されると、廊下に屯している人間達の眼が自分たちに注がれている事がよく判った。
主に、杉本にだが。

まず、顔に注がれた眼が、少しずつ下がっていって、スカートの裾辺りで落胆の色を浮かべるのだ。中には操と杉本を見比べて、?マークを浮かべている輩もいるが、それはこの際無視である。
「はい！　とうちゃーく！」
ノックもせずに教室のドアを開けると、何故か野太い悲鳴が迎えてくれた。
そして、次の瞬間には、詰まらなそうなぼやきに変わる。
「なーんだ……杉本かよー」
平素通りに机の並んだ教室が、何故か女子部になっていた。外から見られる事を恐れてか、しっかりカーテンが引かれているというのに、皆が皆、教室の中央に集まっている。
流石に変身過程は見られたくないらしい。
「早く、ドア閉めろって」
「なんだよ！　その扱いは！　美白娘を調達してきたんだぞぉ」
と、今度はどよめきが湧き上がる。
「えっ！　美白娘って……雑賀かぁ!?」
「だよん」
杉本が得意げに胸を反らす。
「でかした！　と言いたいとこだが……」
唯一自前の制服の男が、ちらりと隣に立った偽者女子コーセーに視線を流す。
「雑賀は不味くないか？」

ぼそぼそと呟く声は、何故か操の耳にはハンドマイクで喚かれたように聞こえた。挙げ句に何故不味いのかもピンときてしまったものだから、堪らない。
「やりますよ。――絶対やる！」
叫んだ途端に、教室内にいた全員の視線が注がれた。
「なに力んでんの？」
訝しげに覗き込んでくる杉本を押し退けるようにして、現場監督らしい男に歩み寄る。
男の周囲にいた連中が、皆一歩退くのが腹立たしい。
「制服は？」
「え……あ……」
たじたじと後退る男に更に詰め寄る。
「それに化粧は誰がしてくれんの？　それとも自分ですんの？」
「あーっと。俺、舞台の方行かないと……杉本……お前、手伝ってやって」
杉本と、偽者女子コーセーが同時に叫ぶ。
「何ですと!?」
「逃げんのか!?」
唖然と三人の顔を眺め回した操は、小さく溜め息を吐いた。
逃げるとは、どういう事なのだろう。
「俺は地雷かっての」

そんな風に見られているかと思うと、逆らいたくなるのが心情だ。どうせ、ここの奴らが畏れているのは矢崎だろう。雑賀操が地雷だというのなら、思いっ切り被害に遭って頂こうではないか。罷り間違って、ステージ上にいる操を見付けたら、矢崎は確実に雷を落とすに違いない。

そんな意地の悪い事を考えている操を眺める杉本は、何故だか機嫌がいい。

「まぁまぁ。副総統自ら足を運ばりぇて……れ？　りぇ？　いいや。とにかく、必死こいて探してたからさ。そりゃビビるって」

慣れない敬語を使おうとして、舌を痙攣させた杉本は、けたけたと笑った。

「ここまで？　いつだよ」

「ついさっき。三十分ぐらいかな……」

「女連れで？」

「女ぁ？　いなかったと思うけど……。こんなとこに女なんか連れてきたら、そりゃ大騒動だって……」

「そりゃそうだ」

展示に使われている部分ならまだしも、控え室の並びに女を連れ込んだらどうなるか、先ほどの男共の視線で充分理解できる。

「ほれ、制服。汚すなよ」

ぶん、と音がしそうな勢いで突き出された紙袋には、見たような、見た事がないような制服が入っていた。

「どこの？」
「どこだろ……。誰かのねぇちゃんのだって言ってたけど。ほら、そんなんどうでもいいから、さっさと着る。それと、紺のハイソ。新品だよん。……頑張って着替えてくれ」
オヤジじゃあるまいし、高校生の制服を見ても、別にわくわくしたりしない。
「はいはい……」
顔だけはにこやかに答えると、操は恐る恐る中身を引っ張り出した。
チェックのスカートは、恐ろしく短い。どうやら、黒組だろうが白組だろうが、格好はほとんど同じらしい。
「そんなん穿くんか？」
ちょっと身体を折ったら、パンツが剝き出しになりそうだ。ステージなぞに上がったら、間違いなくまる見えだろう。別に見られるのが恥ずかしいとは思わないが、他人に見せて喜ぶほどヘンタイでもない。
「ほーらほら」
べろっと思い切りよくスカートが捲られると、巨大な黄色のネズミが現れた。
「なんだそりゃ」
「ガキのパンツ。けっこうデカイの売ってんのな。ほらほら、お前のもネズミだぜぇ」
確かに。
国産のゲームキャラではなく、アメリカ産のメジャーキャラクターだが、ネズミはネズミだ。

一応トランクスなのだが、子供用を無理に穿いているので、ケツの食み出しそうなショートパンツにも見えた。

「他にも、クマとかアヒルとか、取り揃えてたんだけどさ。早いもん勝ちだからさ」

別にパンツがネズミだろうとクマだろうと構いはしない。

何のかんのといって、笑いを取るという基本は忘れていない事を知って、操は安堵の息を吐いた。

ちょっと嗜虐的な気分になっている操にしてみれば、笑いを取る女装というのは、一番の気分転換になりそうだった。

2

耳を劈く大音量の、ド下手なギター。

せめて、ドラムかベースがしっかりリズムを取ってくれたら、下手なデスメタルと言ってやれるのに、全部がばらばらではただの騒音だ。金切り声に、割れた音。

音に煩い、一部ではテクニシャンとして有名な兄を持つ操には、到底耐えられない騒音が垂れ流しになっていた。

「うがあぁぁぁ……。ド下手！」

「操！」

息声で怒鳴る杉本は、周囲の人間を気にしているらしい。
「だって下手じゃんか。なんだよ、あれ」
「やめろって。操」
別に、カラオケが下手でも文句は付けない。どんなオンチでも、肉声ならばそれは笑いに変わる。しかし、楽器は頂けない。
「ものには限度ってもんがあるだろうがよ」
一応、声は潜めてやる。
「だから。ンな事言うなって。お祭りなんだから、一々気にしてもしょうがないだろ？」
「うっせーな。俺はリズムセクションには煩いんだよ」
ミニスカートを気にもせず、その場にしゃがみ込む。
もっとも、体育館の舞台の袖では、眺めてくれる人間もいなかったが。
「頭割れそ……」
冗談や喩えではなく、頭が割れそうだ。
「おいー。今更リタイアはナシだぞ」
「だったら、あの騒音を止めてくれ」
一応、声を抑えて頼んでみる。
「我儘言ってんなよぉ」
「チクショー」

こうなったら、自分がバックダンサーをしているバンドが、聞ける音を出す事を祈るばかりだ。下手くそだったら、その場で気絶してしまうかもしれない。
「だいじょぶだって、俺らのトコは、一応、ライブハウスに出たりしてるくらいだから」
「ホントかよぉ」
「マジマジ、ボーカルとベースだけだけどな」
「えぇ」
「大学生とかとバンド組んでるらしいよ」
あっさり暴露してしまってから、初めて露骨に嫌な顔をした操に気付き、杉本は心底しまったという表情になる。
「なんでそいつらと出ないのよ」
「え……そりゃ、ウチの生徒じゃないからでしょう……」
「え？　そんなキマリあるの？」
「さぁ。出場登録しようとして、センちゃんのチェック入ったって言ってたけど？」
「じゃなに？　ギターとドラムが即席ってコト？　やだ――」
更にごねようとした操の口を、杉本が慌てて塞ぐ。
「まぁまぁ、文句は後で聞くから……」
杉本の視線が泳いでいる方向を、なんとなく見遣った操は、そこに恐ろしい人物を見付けてしまった。

恐ろしいというより、会いたくない人物である。
つい今までごねていた事などすっかり忘れて、こそこそと杉本の背後に回り込む。
鬱陶しいロングヘアの鬘に、女子コーセー姿だ。面と向かって顔を合わせない限り気付かれないだろう。
「どうした？　さい――」
杉本の口を慌てて塞ぐ。
折角、変装しているのに、態々ばらされては困る。
「……あんだよ」
手を振り払った杉本は文句を言いながらも、操の意図するところは理解したようだ。
そう、舞台の袖に姿を現したのは、操を指名手配した〝ガタイのイイ兄ちゃん〟こと兄の隆三だった。
堂々と現れるところが嫌だ。操がここにいると聞いてやって来たのだろうか。
こそこそと盗み見ると、操の知らない男と、親しげに言葉を交わしている。しきりと照れ笑いを浮かべる相手の男は、隆三に憧れているようにも見えた。
「なぁ、アニキと話してんの誰？」
声を潜めて聞くと、杉本は同じく声を落として答えを返してくる。
「誰って……オレらのボーカル様だ。……ってやっぱ、あれお前の兄ちゃん？」
「だよ。顔見知りみたいだね」

「あの風体からすると、リーマンの兄ちゃんじゃネェよな」
考える素振りで、杉本が呟く。
「そうだけど……」
と、突然、杉本が間の抜けた声を上げる。
「あちゃー。出番なくなるかも……」
「なんでさ」
「いつもの音が出せないから、お賑やかしなんだもん。お祭りって事で……。マジに演奏する気なら、ダンサーズなんていらないじゃん……になんじゃねえ？　お前の兄ちゃんて、結構有名なドラマーなんだろ？」
「さぁ？」
謙遜でも何でもなく、隆三が有名かどうかは、操には判断しかねる。
大体、杉本自身、自分が知らないくせに、そういう質問をしてくるのは反則だ。
「さあって、自分の兄キだろうが。……まあ、有名じゃないにしてもさ。仮にもプロが入るなら、おちゃらけたプレイはしないんじゃないの」
「でもさー。兄ちゃんは、ここの生徒じゃないじゃん」
「もう登録は済んでんだから、ちょっとしたアクシデントってヤツでしょう」
杉本は暗にバンドのメンバーにとって、予定の行動と言いたいらしい。
「だったら、自分とこのメンバーこっそり呼んどくっしょ」

つい、捻くれた解釈を提示したものの、誰も彼もがそんな風に姑息に策略を巡らすとは限らないのだ。腹黒い人間ばかり近くにいると、考え方が捻くれていけない。

まぁ、ボーカル氏の真意はともかく、操にもはっきり判る事はあった。杉本の言うように、出番がなくなるはずはない。

そもそも、隆三が計画的にここに来たとも思えない。まず、偶然の産物だろう。

余りに間が悪いが。

密かに溜め息を吐いた操は、ちらりと隆三を見遣った。

どう見ても、楽屋見舞いに来た客という雰囲気ではない。弟子の激励に来た師匠、である。一度として、翔峰の生徒と知り合いだなどとは聞いた事がないのだが。

頭の中がクエッションマークで飽和状態になる前に、操は思考そのものを放棄した。

「あ、杉本！　ちょっとこっちへ来い！」

まずい！

そう思った時には、兄と目が合っていた。

思い切り訝しげに眉を寄せて、操を頭の先から脚の先まで観察している。

「操？」

少々薄暗いとはいえ、元より狭い場所だ。繁々と観察されれば、ばれない方が不思議だった。

白を切るのは諦めて、近付いてくる兄に会心の笑みをサービスする。

が、兄は露骨に顔を顰めてくださった。

「何してんだ？　お前……」
そりゃあ不気味だろう。弟が男と付き合うというだけで、やいやい言っていた直後に、弟の女装なんぞは見たくもないに違いない。
嘗て、自分がした所業など、どうせ棚上げになっているに決まっている。
操が答えかねている間に、横から杉本が割り込んできた。
「ダンサーズでっすぅ！」
見事なガングロ娘が、シナを作る。
「あれか？」
「そうっす。全部で十人……かな。いいすかね？」
「いいな。操！　お前、精一杯ぱんつ見せて踊れよ。ラジオ体操第一から行くからな」
「なんじゃそりゃ！」
喚いても無駄だという事は、よく判っている。何しろ、生まれてからずっと隆三の玩具だった操だ。性格も好みも嫌というほど判っている。お祭り騒ぎが大好きなドラマーは、急ごしらえのダンサーズを踊らせるためだったら、何でもやってのけるだろう。
弟の性癖がどうのなどというシリアスな問題は、しばらく無視する事にしたらしい。
「ラジオ体操だって？」
「第一だ。できるだろ？　それぐらい。初っぱなはそれで行くからな」
諦めるしかなさそうだ。

何時の間にかわらわらと舞台の袖に集まってきた不気味なコギャルたちは、呆れるほど簡単に隆三に掌握されていた。
下手な教師など、到底太刀打ちできない。
「何なんだよ？　全く……」
「ドラムが緊張でブッ倒れたって……。ボーカルが、お前のニーちゃん捕まえたらしい」
杉本が小声で告げる。ご親切にも、現場責任者から聞き出してきてくれたらしい。
「……にーちゃん、カッコイイなぁ」
誰かが、操の耳元で囁く。
「どこが？」
ぞろりと長い髪を一つに引っ括り、汗止め代わりのバンダナを巻いた大男だ。パワフルなドラムに似合いの、がっしりした筋肉まで付いているのだから、むさ苦しいと言うのが正しい評価に違いない。
「やっと終ったか……。じゃ、合図するまで出てくるなよ。インパクト勝負だからな」
恐怖のお祭り男は、音の暴力としか言いようのない演奏が終った事を確認すると、改めて楽しげにコギャルたちを見渡した。
「おい……いいか……」
手近な男に何事か囁く。指示を出しているのだろう。
何しろ、打ち上げの飲み会ですら、演出しないと気が済まない男なのだ。



「おい。整列整列」
予想通り、細かい指示を出したらしい。
「誰だ、あれ？」
「リュウさんだろ？　違うか？　セイジのバックやってた……」
「うっそ。どうして」
「雑賀の兄貴だって噂だけど」
「兄貴？　ホンモンの？　それともアニキなわけ？」
「え？　雑賀って、副総統のじゃないの？」
割れるような拍手とか歓声でもあれば、聞こえない会話だろうが、体育館に集まった観客は、呆れているのか気絶しているのか、拍手どころかブーイングさえ聞こえてこない。
頭痛がする。
チクショウ。
それでなくても気分が悪いのに、こんな話は聞きたくなかった。声を抑えて、気を遣っているらしいのが、余計に腹立たしい。
「……もういい……」
「へ？」
「もういい、って言ったんだよ。……チクショウ。てめえら好き勝手言いやがって。どーせ俺ぁ、女顔だよ。にーちゃんとは全然似てねーよ！　俺の所為かよ！　しょーがねーだろ！」

肩を怒らせた操は、見上げるばかりの巨大なガングロ男の指示に従って、列に着いた。
「雑賀ぁ」
宥める声が、尚更ムカつく。
「黙れ！　俺はパーフェクトにラジオ体操やるぞ！」
こんなものは真面目にやればやるだけ笑えるはずだ。折角笑えるパンツを穿いているのだから、精々見せ付けてやろう。
舞台に上がった兄の動きを見守りながら、操は自分の神経が焼き切れていくのを感じていた。
「みさおチャン……」
後ろから猫撫で声が聞こえてくる。
「なんだよ。何か言ったらブッ殺す」
低く囁き返すと、後ろでごくりと喉を鳴らすのが聞こえた。
それきり、宥める言葉も、揶揄う言葉も聞こえてこなくなる。脅しが効いたのかと思うと、少しは気分がすっとした。
「どすどす出ちゃ駄目だよ」
誰かが、あってもなくてもいいような指示を出している。
ぶち壊してやりたい気持ちと、完璧にこなしたい気持ちが、操の中では半々に鬩ぎ合っていた。
前に並んだ一人が、妙な動きをしている。何となく眺めていると、掌に何かを書いて飲む動作をしているらしい事が判明した。

こんなところで、上がってどうする——内心で嘲笑った操は、ステージを盗み見ようとして、前の方ほど身長が高い事に気付いた。

ちらりと振り返ると、後ろに行くほど背が高い。どうやら操と杉本が谷底のようだ。

またもや、怒りのテンションが上がる。

もう、気分はジェットコースターだ。朝から、昇ったり下りたり、忙しい事この上ない。自分がナイーブだなどと、自認した事は一度もないが、そろそろ限界である。

ラジオ体操でもいいから、思い切り動いて発散しないと、本格的に切れそうだ。

ありがたい事に、これ以上の我慢はしないで済みそうだった。

流石に高校の学園祭のライブである。器材の大々的な入れ換えなどなく、出演者が自分の楽器と共に引き上げてきて、次の出演者が楽器と共に出ていくだけだ。もちろん、隆三も、今日ばかりは自前の楽器ではない。

「よし！」

自分に気合を入れた操は、思い切りのいい笑顔を貼り付けて、舞台に足を向けた。

3

ラジオ体操第一から始まり、各自が音楽に合わせて勝手に踊る。一曲分を挟んで、最後はラジオ体操第二で締め括ったダンサーズは、やんやの喝采を浴びながら、舞台を降りた。

教師へのサービスなのか、隆三の趣味なのかは知らないが、おちゃらけ演奏の後、立て続けに演奏された古いロックは、現役の高校生にも結構受けていた。
「やっぱ、雑賀のにーちゃんかっこいいわ」
化粧を落とす事も忘れて、舞台を見詰めている杉本は、妙にしみじみと呟いた。
「何がよ」
「全然違うじゃん。そりゃ、あいつら、大学生と組んでるぐらいだから、上手いとは思ってたけどさ。……ギターの奴も思ったよか全然上手いし……」
それは認める。
ステージに残った彼らは、気持ち良さそうに演奏しているのだが、予想より全然聞けるものだった。
「ドラムがプロだと全然違うんだな。すっげ、音が締まってるし……」
はったりかどうかはともかく、意外と、杉本は聞けるタイプらしい。
初めて、心の底から杉本に賛同した操は、久し振りの隆三のドラムに浸っていた。
今年はあの忌々しいジオラマのお陰で、隆三のライブなど聞きに行く余裕などなかったのだ。
もっとも、隆三の方もコンサートとかいう方が似合いの、ホール・ツアーに出ていたのだから、聞きに行くのも難しかったが。
「やっぱかっこいいわ」
思わずといった風に呟いた杉本に、操は満足げに相槌を打った。

「だろ？」
「おれ、初めてお前が羨ましいとか思ったもんな……」
「へへへ……」
本人にはっきりと言った事はないが、操は隆三を尊敬している。ステージにいる隆三はもちろん、仲間と飲んだくれて莫迦騒ぎしながらセッションしている時もカッコイイと思ってしまう。
身内の欲目かとも思っていたが、杉本に誉められて悪い気がする筈なかった。
盛大な拍手と、アンコールの声。
多分に、サービスも含まれているだろうが、客の反応もいい。
「操！　操！」
「にゃ？」
「ほら、呼ばれてるって」
見れば、ステージ上で兄が手招きしていた。
「俺？」
自分の顔を示して、問う。
おいでおいでというように、手招きする兄は、如何にも嬉しげに笑っていた。
周りを見渡すと、ダンサーズは半分残っている。一応仲間だというのなら全員残っているべきなのだろうに、ただのお賑やかし部隊は、どこかへ消えていた。
「行くぞ！」

杉本の手を引っ張って、舞台に出る。
わっと沸いてくれた乗りのいい客に向かって、思い切り良く頭を下げる。ついでにスカートを捲り上げてネズミ模様のパンツを見せてやるのは、お約束だろう。
ちらりとこちらを見遣った隆三に、ウインクを返してやる。
後ろから抱き付いてきた杉本を、ヨイショとばかりに背負って、ずりずりとドラムセットに近付いた。
杉本を振るい落として隆三に、親指を立てて見せる。
「どうだ？　カッコいいだろう？」
操はうんうんと頷いた。
胸を張った隆三は、なかなか可愛い。
兄に向かって可愛いもないのだろうが、本当にそう思えるのだから仕方がない。
密かに優越感を覚えながら、兄の隣に並ぶ。
取り敢えず、出演者全員が舞台に並んで、お約束の沙汰をする。
ステージ上はもちろん、体育館全体が少し異様なテンションに包まれていた。学園祭のライブという雰囲気ではない。それも、トリのバンドならともかく、高校生バンドなのだから大したものだ。
「ほれ……退却だ」
操がトンと隆三に背中を押されるのを合図に、化け物紛いの女子高生が駆け足で袖に引っ込む。

リハーサルをした訳でもないのに、なかなか見事に揃っていた。
全員が引っ込んだ途端に、何とアンコールまで掛かる。
「ありゃー。困った」
リーダーは満足げな表情とは裏腹な科白を吐いた。
その横では、ライブイベントの責任者が、本気で困った顔をしている。次の出演者に至っては、はっきり不機嫌そのものの顔だ。
面構えはもちろん、髪型やら服装からしても、高校生ではなさそうである。
彼らがだらだらとステージに出ていくのを見届けて、杉本が喉で笑う。
「なによ?」
「大学から来て頂いたゲスト様……。ホオズキとか、ホタルブクロとか……。とにかく〝ホ〟の付く植物……」
「あらまー」
前座にこれだけ沸かされると、メイン・ゲストとしては面白くないに違いない。
しかも、どう見ても、フォーク系の雰囲気のメンバーだった。
ハードロックそのもののプロのドラマーなどといったら、気に入るとか気に入らないとかの以前に、既に敵の部類に入るだろう。
知ってか知らずか、無闇に盛り上がっている隆三を胡乱に眺めた操は、杉本の肩を摑むと、そろそろと出口に向かう。

出口といっても、そこは学校の体育館の事。要するに客席になっている体育館のフロアに繋がっているのだが、暗幕一枚分だけは目隠しが作られている。舞台袖への出入りが目立たないための配慮らしい。

「なんだよ」

流石に逃げ出す意味は理解しているのか、杉本はドアを出た途端に口を開いた。

「なんだよって、なんだよ。……逃げるに決まってんだろ」

「そりゃ判るけど……なんで俺まで……」

未練がましくぼやく杉本を、ぎろりと睨み付ける。

「友達だろ」

訳の判らない理屈を真顔で告げて、操は暗幕の陰から外に出た。

ステージを注視している人間たちを横目に、体育館の端を早足で歩く。諦めたのか、杉本も素直に付いてきた。

半分ほど歩いたところで、血相を変えた教師と擦れ違う。

「あちゃー。部外者がステージに上がったってばれたみたい」

「そりゃ、丁度(ちょうど)いい」

自慢の兄である事には変わりがないが、やはり、まだ面と向かって隆三と話をする気にはならない。

隆三の相手は、教師に任せる事にして、操はさっさと体育館を抜け出した。

4

今度こそ、どこかにふけて、そのまま潜伏してしまおう。このまま、帰ってしまうというのもいい案かもしれない。

操がそんな事を考えながら、体育館の渡り廊下を歩いていると、突然、目の前に男が立ち塞がった。

「ぎゃっ！」

思わず悲鳴を上げて立ち止まった操の背に、杉本が追突する。

「バカ！　何してんだよ」

鼻を押さえながら、顔を上げた杉本が、目を剝いた。

「……あ……」

「おい、お前……」

百七十強というところか。

ぴっちりと身体に張り付くようなタンクトップに、黒のジーンズ。手首に棘の生えた蔦のタトゥー。

「リュウはどこだ」

偉そうに顎を突き上げて問う男は……。

「セイジ？　うそ！　どーしてこんなとこにいんのさ！　え？　今日、ライブとか？　あれ？　勘違い？」

わたわたと、手を振り回す杉本は、どうやらこの派手なボーカルのファンらしい。

柔らかそうな、ふわふわとした髪はステージでは好き勝手な色に染め上げられている。化粧をし、派手な衣装を着ているところしか見た事のない操などには、一瞬判らなかったが、ファンなら一発で見破れるようだ。

そして、今更のように、兄に迫っていたタトゥーの持ち主がこの男だと思い至った。ギターやベースにしなだれ掛かって、女の子に悲鳴を上げさせるボーカリストが、兄に迫っていた人物だと思うと、妙な気分だ。

人気商売にも拘らず、目の前の芸能人様は、杉本など完璧に無視して操を睨み据えた。

「てめェは、あんなバカやるために、俺の仕事断わらせたのかよ！」

もっとも、無視された杉本の方も、そんな状況は全く認識していなかった。

「うっそー。信じられねぇ。握手してください！」

ごしごしとミニスカートで手を擦った杉本が手を差し出す。

「うっせぇな！　ちょっと待ってろ！　俺ぁ、このガキに話があんだよ！」

柄の悪いロッカーそのものである。

――ガキって、やっぱ俺？――詰まらない自問をしている操の顔を、男は射殺さんばかりの目付きで睨み下ろしていた。

こういうのを強い目というのだろう。妙に納得はしたものの、答えるべき言葉はまるで浮かんでこない。

そして、助け船は外からやって来た。

「校内での喧嘩は困ります。……うちの生徒に何かご用でしょうか」

舞い上がって大騒ぎをしている杉本。一人で暗雲を背負っているセイジ。状況が今一つ飲み込めず、ただ呆然と立っていた操。

全員がばっと顔を向けた先には、矢崎が外交用の笑みを貼り付けて立っていた。

「うるせえ！　関係ないヤツはスっ込んでろ！」

「……あの……」

ようやく口を開いた操が、言いたい事を唇に乗せる間もなく、セイジは険悪な言葉を立て続けに浴びせる。

「そーだよ、ガキ。お前だ、お前。何甘えくさってんだ。あぁ？　判ってんのか？　仕事とお前の我儘とどっちが大事だってんだ！」

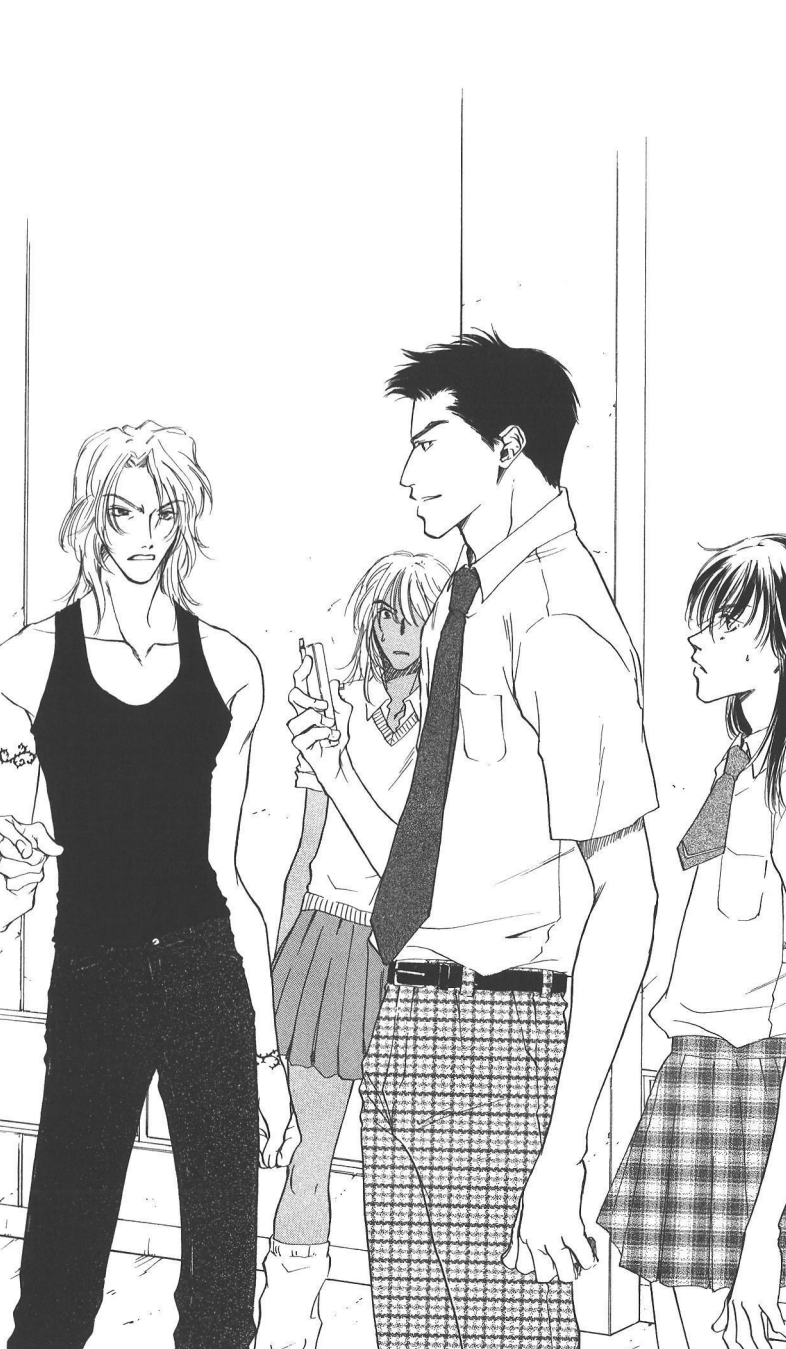
どうやら、隆三は今日の仕事を断わったらしい。

まぁ、ボーカルに本気で迫られたら、逃げるしかないだろう。

悪ふざけなら、とことん付き合う隆三だが、こんなところまで乗り込んでくるところを見ると、嘲笑う訳にもいかない。昨夜の、妙に煮え切らない話の理由を理解した操は、それゆえに、何も言えなくなっていた。

実はボクは弟です、と白状するのは簡単だ。しかし、操を恋人として見せ付けるなどという、陳腐な手まで使ってしまうほど隆三が追い詰められているのかもしれない。
どう対処するべきか考えている間に、セイジは益々怒りを燃え上がらせていった。
「何シカトこいてんだよ！　えぇ？」
「困ります」
低い声。
次の瞬間、操の視界は広い背中に塞がれていた。
「引っ込んでろって言っただろ！」
「これ以上騒がれるようでしたら、校内から退出していただきます」
迫力のある声にも、セイジはまるで動じる様子がない。
「退出だぁ？　なーに偉そうな事言ってやがんだ！　追い出せるものなら、追い出してみやがれ」
殴るのは不味い。
矢崎は知らないかもしれないが、この男は過激な男性ファンが付いている事で有名なバンドのボーカルなのだ。
事情を知っているらしい杉本も緊張する。
ところが、矢崎は平然とポケットから携帯電話を取り出した。
「……矢崎です。……ああ、見付けた。体育館裏にいる。捕まえておくから……」
それだけ言って、通話を切る。

「何だ、それ……」
「迷惑しているんですよ。隠密に探し出せと言われましても、我々の責任ではないし。そもそも呼び出し放送もせずに、校内にいる客を探し出せというのが、不条理ですしね」
おそらく笑っているだろう。
背中を見ているだけでも、矢崎の冷たい笑みが見えるようだった。
今まで微塵も退く気配などなかった男の顔に、ちらりと不安の影が過る。
やはり、矢崎が探していたのは、操ではないだろう。見付けて捕まえておくのは、こちらの芸能人様に決まっている。誰がセイジを探しているのか知らないが、少なくとも生徒会に隠密で探せなどと、ごり押しのできる相手であるのは確かだ。
そんな埒もない事は思い浮かんでくるのだが、肝心の今の自分の立場は、それこそ、どうしてよいやら、呆然と立っているしかない。
「ガキ！　おら！　無視すんじゃねぇよ！　てめぇ。何、隠れてンだよ！」
ばっと、矢崎を押し退けるようにして、セイジが顔を出した。憎々しげに歪む顔に、次の瞬間、苦痛が混じる。
何をしたのか、視界からセイジが消えた。
「いい加減にしてください。こちらも、なるべく穏便に済まそうとしているんです。何でしたら〝カタファルク〟のセイジを探してくれって、校内放送掛けましょうか。ちょっと気の荒い連中も集まっているようだし、追い掛けっこも楽しいかもしれませんね」



穏やかな口調。
だが、その声は、ぞっとするほど冷たいものだった。
「こらぁ。誰を脅してんだ!?」
「脅すなんてとんでもない。協力しているだけですよ」
しれっと宣う矢崎は、その場から動く気はなさそうだった。
代わりに、操がじりじりと後退する。
「逃げんじゃねぇ、この野郎!」
セイジが駆け出そうとした瞬間、足が宙を掻いた。
恐ろしい。
反射神経と力があり余っている矢崎は、ベルトを摑み、右手一本で釣り上げたのだ。
「何しやがんだ!」
「お迎えが来るまで、ここにいてくれないと困るんですよ。……君たち。悪いが、呼んできてくれないか。ハリウッド映画のコメディーに出てくるギャングみたいな二人組だ。すぐに判ると思うから」
まさか君たち、などと言われるとは思ってもいなかった。
きっと、矢崎には矢崎の考えがあって、そう言った筈だ。ひょっとすると、操の名前を知らせないために、態とそう呼んだのかもしれない。
理性ではそう思っている。

それなのに、頭の中は、君たち、という呼び掛けがぐるぐる回っていた。
「……あ……いた！　あの人たち？」
能天気な声を出す杉本の指差す先には、小走りに駆けてくる二人組のギャングがいた。
まさしく、コメディー映画に出てくるような、典型的なギャング。このくそ暑いのに、黒いスーツ姿に、日本人離れした長身。まぁ、ソフト帽までは被っていなかったが。
はっきり言って不気味な光景だ。
「ありがとうございます」
「お手数お掛けしました」
見た目と違い、存外穏やかな声を出す二人は、矢崎に会釈すると、セイジに向き直った。
「いい加減にしろ」
こちらに向かっては、ギャングそのもののドスの効いた声。
「何だよ！　何しに来やがった！」
「客はもう集まってンだよ。まったく。お前がやるって言い出したシークレットライブだろうが」
「俺ぁ、リュウのドラムじゃなきゃ歌わねぇぞ！」
「客の前で言ってみろ。大ウケだぞ」
がはがはと笑った男たちは、それぞれがセイジと腕を組んだ。
「やめろって言ってるだろうがよ！」
百七十はある男の足が宙を掻く。両側の大男は、百九十はあるだろう。

笑っちゃいけないとは思うが、無闇におかしい。
あの、ステージではくすりとも笑わない、MCすらろくに喋らない事で有名なボーカルが、子供のような駄々を捏ねている。
「……なんか……。ただのガキじゃん。……ひょっとして、操のにーちゃんに逃げられて、駄々捏ねてる訳？」
「だと思うけど。俺も事情知らないし……」
うんうんと頷いた杉本が、楽しげに宣う。
「それにしてもさ。お前のにーちゃんがセイジのバックやってたなんて……おれ見に行ったけど気付かなかったよ」
「お前らしいよ……。そういや、シークレットライブがどうのとか言ってたな。お前、セイジのファンなんだろ？　行かないの？」
「ま、ね。……けどシークレットライブったって、すっげマニアなファン集めてジョージのライブハウスでやんだよ。飲み会みたいなもんだからさ。ビンボー人には辛い訳よ。めっちゃ過激な連中ばっかだしさ」
そこからトンズラしたのなら、お迎えも来るだろう。
「なるほど……ね」
溜め息混じりに応じると、急に杉本が真顔になる。
「お前、めちゃめちゃ苦労が多いな……」

しみじみとした口調で言われると、妙に自分が可哀想になってくる。
確かに、朝からロクな事がない。
いや、正確には昨日からだ。
「苦労してんのは兄ちゃんじゃない？　……そういや、先ちゃんに捕まってんだよな。大丈夫かな……」
「急病人のピンチヒッターだしな。親切な父兄がいたというだけだ。問題はない」
頭の上からの声に、背筋が凍り付く。
目に見えて顔色が変わった杉本は、そのままじわじわと後退った。
どうやら、誰より存在感のある男がいるのを、すっかり失念していたらしい。
能天気なヤツだ。
「え、と……おれ。後片付けがあるし……。雑賀、服、早いとこ着替えた方がいいよ。教室、四時には閉まるから……。じゃ！」
脱兎のごとく。その表現のままに、杉本が逃げ出す。
短いスカートが思い切りよく捲れて、ネズミのプリントが、ちらちらと見えた。
それを、おチャメとは微塵も思わないだろう男が、ぼそりと呟く。
「……全く。面倒な事を……」
怒っている。
それはそうだ。

訳の判らない芸能人が現れて、文化祭のイベントをいいように引っ掻き回した挙げ句、妙な事を口走るスター様まで現れたのだから、生徒会としては対処に苦慮しただろう。
しかし、操に怒りの矛先が向かってくるとなれば、それは承服できない。
我知らず身構えた操を眺め下ろした矢崎が、酷く疲れた笑みを浮かべる。
「判ってるよ……お前の所為じゃない」
酷く疲れた声だ。
「そんならいい」
心持ち顎を反らし、矢崎を一瞥した操は、走って逃げたい気分を押さえ付けて、ゆっくりと矢崎の脇を擦り抜ける。
「操、どこへ行く？」
「着替えに」
背中から降った声に、素っ気なく答えると、矢崎は並んで歩き始めた。
「そんなに急ぐ事ないだろう？」
「のんびりする理由もないけど？　いつまでもこんなカッコしてたくないもん」
反論は何も返ってこなかったが、矢崎は操の隣を歩き続けていた。
黙りこくったまま校舎の昇降口まで辿り着いてしまう。
「なんで付いてくんのさ」
「いや、なんとなく……」

珍しく口籠った矢崎を、ちらりと操は盗み見た。
何時もならば、滔々と言葉を溢れさせる唇は引き結ばれ、強い眼差しが操の顔に真っ直ぐ注がれる事もない。
昇降口への数段の階段を昇り、開け放したままの扉を通り抜けざま閉じてやろうか、などとも考えたが、流石にそこまではできずに、歩調だけを速める。
一度早足になってしまうと、スピードは速くなるばかりだ。
二階への階段を昇る頃には、ほとんど走っていた。
もちろん、矢崎も付いてくる。
踊り場で身を翻した途端に、矢崎が目に入った。走っているというより、あくまでも早足に見えるところが、妙に腹立たしい。
「付いてくんなよ！」
腹立ち紛れに叫んだ操の腕が、突然引かれる。勢い余って、操はバランスを崩した。
階段を踏む筈の足が宙を踏む。
「あーっ！」
そのまま、後ろに自分の身体が傾いていき、視界がコマ送りのようにずれて、普段見上げる事などない天井しか見えなくなった。
首を緊張させると同時に、肩に中途半端な衝撃が走る。
何故か一拍置いて、尻餅をついた。

そして、妙な呻き声。
「え……？」
身体を起こそうとしたが、どうした訳か両腕が動かない。
「大丈夫か!?」
パニックを起こし掛けた操は、誰かの叫び声に我に返った。
腕の自由を奪うのが、矢崎の腕だと気付く。
例の怪力で肘の辺りをしっかりと抱き絞められていては、簡単には自由になれない。
「矢崎さん？　放して……」
しばしの間の後、力のない声が返ってくる。
「あ……ああ」
さらに時間をおいて、ゆっくりと解放された。
「ちょっと……大丈夫？　頭でも打った？」
操が起き上がると、釣られるように矢崎も身体を引き起こす。
だが、その目は虚ろだった。
「……頭打ったね」
いくら小柄とはいえ、人間一人を抱えて倒れたら、それなりのダメージがあるだろう。しかも、両手は操のためだけに使われていたのだ。
「ああ……」

ゆっくりと頭を左右に振ったと思うと、矢崎の頭がだらりと落ちる。
「うそー、ヤダよぉ」
自分の所為で矢崎が死んだりしたら、それこそ、二度と安眠などできまい。
思い付いてしまった最悪の想定に、操は一瞬、頭が真っ白になった。

5

「みっさおチャーン」
嬉しそうな声が、後ろから飛んでくる。
「……杉本？」
「副総統がお前の下敷になって気絶したって？」
「はいぃ？」
目を瞬かせた操をにやにやと眺めながら、杉本が軽い足取りで走ってきた。
操に追い付き、小さく息を整えると、態とらしく大きな声を上げる。
「階段で足踏み外したお姫様を受け留めたって、大評判！」
「なんじゃそら」
「……気を失ってる副総統に縋って、泣いちゃったんだって？」
「てめー！　そんなデマ誰が流しやがった！」

確かに、ちょっと頭が真っ白になったのは本当だ。
だが、誰かが自分の所為で死んだら、いや、頭を打ってオカシな事になったら、操ならずとも茫然自失するだろう。
あの頑丈が取柄のような矢崎が、一瞬でも意識障害を起こしたのだ。そんなところまで想像がぶっ飛んでしまっても仕方がないと思う。たとえ、実際には軽い脳震盪だったとしても、だ。
そう、何というか、丁度催眠術から覚める時のように、一分も待たずにしっかり何時もの矢崎に戻っていたのである。心配したのも莫迦らしいほど簡単にだ。
操が頭の中で言い訳を繰り返しているのを知ってか知らずか、杉本はあっさりと話題を転換してくれた。
「着替えちゃったんだぁ。映研が凄い勢いで指名手配掛けてたよ。何か、女装するのが嫌だって、逃げ回ったんだって？　せめて記録映画を撮るとかって、大騒ぎしてたぜ」
思い切り、溜め息を吐く。
どういう訳か、夏休み明けの杉本くんはナカナカの事情通になっていた。球技大会でマラソンのボーナスポイントが貰えなかったのがよほど腹立たしかったのだろう。情報の速さからして、それなりの人脈を探し出したようだ。最少の努力で最大の成果をモットーとする杉本らしい。
「どーしてそういう事言うンだよ」
「え？　知らない振りしてた方が良かったのかなあ？」
妙に可愛らしい仕草で、杉本が聞き返す。

「ちげーよ。……現実を思い出しただけ。ステージも撮ってたんだよな、きっと」
「うん。俺、後で自分らのとこ、もらう約束したもん。雑賀の分も頼んどいたからさ。本当は、トリのバンド以外はオマケだったらしいけどさ。盛り下がって盛り下がって大変だったらしいぜぇ。まぁ、文化祭にアコースティックやられたってなぁ……。よっぽど上手くなきゃ聞けたもんじゃないだろ」
楽しげに笑う杉本は、なるほど〝カタファルク〟のファンだった。
「そうだよねー」
首を傾げて、お互いの顔を見合わせた二人は、力ない笑みを浮かべた。
「ところで、雑賀。お前どこ行くの？」
「え？　あ……生徒会室。荷物取りに行く」
「荷物？」
不思議そうな顔をした杉本に、操は小声で答えた。
「矢崎……さんの。今、保健室に監禁されてるからさ」
「あらまぁ……」
「頭に瘤作ってんだよな。自業自得だって言ってんのに、兄ちゃんが送ってくって」
「へぇ」
何故か、杉本は不審げな表情で頷いた。
「何？」

「……いや、リュウさん、妙なのに囲まれてたぞ」
「へ？」
「カタファルクのファンて感じじゃなかったし、全員に襲い掛かられても、どって事なさそうだったけど……」
「なんじゃそりゃ」
「弱っちいのばっかだったって事。喧嘩にはなってなかったな。押し退けたら終わりって感じ？」
「いつ？　俺、さっき会ったばっかだぞ。車回してくるって……」
「じゃ、やっぱあれで終わっちゃったんじゃねーの？　俺が見たの、映研の連中に捕まる前だったから」
言うだけ言って、杉本がけたけたと笑う。
操が眉を顰めたのに気付き、慌てて笑いを飲み込んだ。
「明日は食べ歩きしようぜ。色んな食券貰ったんだ」
少々言い訳がましく付け足すと、杉本はひらひらと手を振って、途中の教室に消えていった。
急造バンドのボーカルの教室だろう。
ひょっとすると、カタファルクのファンという繋がりかもしれない。
「あいつもよく判んないよなぁ……」
クラブ活動もしていない遊び人のくせに、操などとは比べものにならない人脈があるようだ。
妙に憎めないキャラクターも、先輩達に可愛がられる一因だろう。

「やっぱ、長いものには巻かれろってか」
呟いた頃には、長いモノの頂点、生徒会室の前にいた。
だが、操はノックもせずにドアを開ける。
「あ……と。……まだ残ってた……訳？」
話し声もしていなかったし、中に人がいるなど、考えもしなかった。
それが、総統を頭に、生徒会の面々がずらりと揃っている。
「あれ？　操ちゃん。矢崎の付き添いじゃなかった？」
「……すみません。荷物を……。それと……兄が家まで送って行くって事になったんだけど……。いいですか？」
「何？　そんなに具合が悪い？」
「えっと……」
操が答えあぐねていると、〝総統〟橋本は小さく首を竦めた。
「ま、いいか。まだ、明日も一日あるしな。今日のところはそうして貰うか。明日は最後まで頑張って貰うから、そう伝えといて」
「はい」
殊勝に答えると、橋本は真顔で付け足した。
「そういう訳だから、操ちゃんも今日はあいつに無理な運動はさせないように」
「はい、はい」

「あらま、素直な事」
詰まらなそうに、首を竦めた橋本に、操は会心の笑みを返した。
橋本の下世話なもの言いは、何時もの事だ。操が向きになって反論すればするほど、喜んでいると気付いてからは、素直に受け流す事にしている。
片方の眉を引き上げた橋本は、総統様の顔に戻って、部屋の隅にいた生徒に命じた。
「坂井。矢崎の荷物持ってきてやって」
無言で席を立った男が、資料室に消える。
ほどなく戻った彼の手には、矢崎のデイパックがあった。
「どうも……」
バッグを受け取り、ぺこりと頭を下げると、これ以上妙な事を口走られる前に、さっさと生徒会室を退出する。
「矢崎によろしく」
橋本の声は追い掛けてきたものの、誰も引き留めようとはしない。
これ幸いと逃げ出した操があっさりと解放された事を、不思議に思い始めたのは、保健室の前まで辿り着いた時だった。

6

「何拗ねてるんだ？」
別に拗ねてなどいない。ただ、矢崎と話す事などないから黙っているだけだ。話題を探そうと思えば、どうしてもいちゃついていた女の事が頭に浮かぶし、それを口にする事がどれだけみっともないか、操にはよく判っていた。
別れた女が新しい恋人を見付けた事を、裏切り者だの尻軽だのと宣う男みたいだ。
もっと始末が悪いのは、恋人にもなっていなかった事だ。
矢崎がどんな女と付き合おうと、操に文句を付ける筋合いはない。充分判っているのに拘ってしまう自分が嫌だった。
「操？」
「にーちゃん遅いな……」
正門から少し離れたところで待っているのは、好奇の目を避けるためだ。
もっとも、操の細やかな気遣いなど、何の役にも立っていなかった。翔峰学園の有名人と一緒にいると、生徒はもちろん、文化祭に来た客までじろじろと見物していく。何が嬉しいのか知らないが、女たちは笑いさんざめきながら歩いていた。
「操」
操の内心など知る筈もない矢崎は、しつこく声を掛けてくる。
「何ですか？」
素っ気なく応じる。

本当なら、逃げ出したいところだが、助けて貰ったという自覚があるだけに、身動きできなかった。
「怒ってるのか？」
「怒られるような事しました？」
反対に聞き返すと、矢崎は酷く情けない声を出す。
「心当たりがないから困ってるんだがな」
そりゃあないだろう。
思い当たられても困る。女といちゃついた事に引っ掛かっているなどと知られるぐらいなら、助けられたのが気に入らないとでも思って貰った方がいい。
「……実はな……心当たりがないでもない。だが、外れてたら、もっと怒らせそうだし、どうしようかと思っている」
まだ明るい空を見詰めたまま、矢崎が呟いた。
「……ふーん」
矢崎に背を向けて、操はフェンスに指を引っ掛けた。
まだ、学校には人が溢れている。
二日目のための準備をしている者もいるだろうし、展示の手直しに走り回っている人間もいる筈だ。
体育館の前に集まっているのは、明日のライブのための準備をしている連中だろうか。

もちろん、ただぶらぶらしている連中もいるに違いない。
「兄ちゃん遅いなぁ……。まさか捕まってんじゃないだろうな……」
「ファンに囲まれているのかな。……あれほど人気があるとは、知らなかったよ」
まぁ、それはない。シンパはいても、所詮はロック小僧である。隆三があしらえぬ筈はなかった。
が、声を大にして言う事でもないだろう。
「人気？　そんなの俺だって知らないって」
まだ少しぎこちないものの、矢崎と普通に話ができている。
それにほっとする自分が情けないと思いながら、それでも操は矢崎の顔を見られなかった。
痛いほど視線を感じる。
「トリのバンド、凄く機嫌が悪かったって言ってたけど……」
ぼそぼそと口を開くと、矢崎が少しだけ声を落として答えた。
「そうみたいだな。臍を曲げて大変だったらしい。……橋本さんが後始末に走り回っていたようだが……」
首を竦めた操は、校舎の方に視線を移した。
ひょっとすると、生徒会の面々が集まっていたのは、対応を相談していたからだろうか。大学の伝で出演して貰ったというのだから、色々と面倒もありそうだ。
「……すみません」

くすっと、矢崎が笑う。
大きな手が、操の頭を軽く叩いた。
「気にするなよ。――興味のない人間をどれだけ取り込むかが勝負だろう。高校の文化祭に来てやった、という程度の気分なら、客に席を立たれても文句は言えないだろうな」
「うわっ……最低……」
いくら何でも、そこまで酷いとは思っていなかった。だが、友達が出ているからとか、座りたいからという理由で体育館に集まった客が、気の抜けた演奏をどこまで我慢するかなど、考えるまでもない。
「楽しませようっていうスタンスが明確だったらラジオ体操でもウケるっていう事だな」
どうやら、副総統様は、しっかり舞台をチェックしていたらしい。
「ふーん、見てたんだ。あれはやっぱ、パンツでしょう」
「犬だの猫だのネズミだの……よくまぁ、あれだけ集めたな」
「本当」
決して視線は交えずに、それでも話を続ける。気不味い思いが、操にぎこちない敬語を使わせて、余計に言葉が途切れがちになる。
奇妙な空気を持て余しているのは、操だけだろう。
矢崎は、言葉遣いが変わっている事にも気付いていないかもしれない。
「どうせ首謀者は杉本だろう。あのお祭り好きがやりそうな事だ」

「……ふーん……」
どうして杉本の性格を、矢崎が知っているのだろう。
橋本総統や、矢崎副総統の事なら、学園内の誰が知っていても不思議ではないが、杉本というところが妙だ。
「……明日は、受付をやってくれよ」
「あ……。うん」
そういえば、朝、飛び出した切り、一度も化学室に戻らなかった。
矢崎から逃げ回り、兄から逃げ回って、結局酷い目に遭ったような気がする。
「ただ座ってればいいからな」
「それが必要なのは矢崎さんでしょ？　頭打ってんだからさ」
ちらりと視線を上げると、矢崎は不思議そうに見下ろしている。
「なにさ？」
ようやく視線を交えた事に、少しドキドキしながら、それでも、できるだけ素っ気なく問う。
「心配はしてくれてるんだ」
むっと眉を顰めた操は、ふいと視線を逸らした。
いくら〝矢崎が腕を摑んだのがそもそもの原因〟でも、身を挺して庇ってくれた事には変りがない。それを当然だと言い切るには、操は人が善すぎた。
が、素直に心配していると、言えないのも操である。

「副総統様が、パーになっちゃったら困るもん」
憎まれ口で応じた操に、恨み言を言うでもなく、矢崎は喉で笑った。
「確かにな。……でも、そうなったら、操が責任取ってくれるんだろ？　だったら、それもいいかな」
「責任てなによ」
「一生、俺の面倒見てもらう」
そんな風に言われると、何故か心が痛む。
「やだなあ。そんなこと言うと、泣いちゃう人もいるでしょう」
「え？　……なんだって？」
聞き返してくる矢崎の言葉を、頭が理解する前に、操の目は兄の車を見付けた。
「あ、来た」
車に向かって大きく手を振った。
兄が気付いた事を確認して初めて、矢崎が問いたげに自分を見ていると認識する。
「……なんだっけ？」
「いや……何でもない」
黙り込んだ矢崎は、さりげなく操から視線を外した。
やがて、車が二人の前に止まる。
「すまん、遅くなった」

操は一瞬だけ考えると、助手席のドアを引き開けて、矢崎を振り返った。
「矢崎さん、前乗って。後ろじゃ狭いから」
「え？　あ……ああ」
応じながらも、矢崎は操を振り向こうとしない。
「矢崎さん？」
矢崎の視線は、フェンスの内に釘付けになっているようだ。
「……どうしたの？」
「ああ……操……先に帰ってくれ」
「なに言ってんの？　あんたを送るんだよ」
「いや……いい。ちょっと用を思い出した」
「はい？」
顔だけ振り向けた矢崎が、苦笑を浮かべる。
「ちょっと痛ができただけだし、一人でも帰れるよ」
「なんだって？」
「いいから……」
何がいいのか知らないが、矢崎はほとんど力尽くで、操を車の中に押し込んだ。
「ご心配掛けました。……ここに車止めてると煩いですから……」
運転席の隆三に、声を掛けドアを閉じると、矢崎はそのまますたすたと校門に向かって歩き始

める。
「なんだよ、あれ……」
訝しげに眉を顰めた隆三が、憮然と矢崎の背中を睨む。
「……俺が聞きたい……」
確かにあの足取りを見ている限り、態々送る必要はないかもしれない。
しかし、問題はそんな事ではない筈だ。
見ている間に、矢崎は校門の中に消えてしまった。
何故だか、お前の世話にはならんと宣言されたようで、胸の辺りがムカムカとする。
フェンスの向こうに、何か——いや、誰かを見付けたのだろうか。
「兄ちゃん……ぼっとしてるなよ」
「え？」
「車出せって」
「なんだかなー」
ぶつくさと言いながら、隆三はゆっくりと車を発進させた。
「いいのか？　お前の下敷になって頭打ったんだろ？」
「だって、本人がいいって言ってんのに……」
自分で言っておいて、酷く悲しい気分になった。
車が余り速度を上げぬまま、のろのろと校門の前を通り過ぎる。下の国道から昇ってきた道は、

校門前を過ぎると少しだけ狭くなり、山上まで昇ってから反対側に降りていた。背中合わせの翔峰女子部の正門の前を通って、反対側の駅前に続く道に出るのだ。

いくら女子部の校門経由でも、朝から徒歩で山頂まで昇って降りる根性のある者はまずいないが、車で走れば山の反対側に降りる抜け道になっている。狭い校門前でUターンするよりは面倒がないからだ。

車が始終通る訳でもないから、狭い割にはかなり綺麗な道だったが、右には木々が迫っていた。左手には、翔峰の校舎が見える。

ぼんやりと、校舎を眺めていると、要らない考えが後から後から湧いてきた。

矢崎が何故校内に戻ったのか、知りたい。

突然の衝動である。

理由を考える前に、叫んでいた。

「兄ちゃん！　戻って！」

「は？」

「ガッコに戻って！　早く！」

「おい……」

基本的には〝甘い兄〟だ。操の命令には逆らえずに、バスが擦れ違うための退避スペースに入り込んだ。

何度かハンドルを切り返して、車を回すと、再び正門に向かう。

「……操……」
「何？」
「……昨日は悪かったな。ちょっと……八つ当たりした……」
「何それ！」
「冗談で慣れているつもりだったが……マジに迫られてビビっちまった。情けねぇ……」
なるほど他人事だったから、弟を女装させて連れ歩けたのだろう。
操自身、女子の制服を着て、舞台で体操して見せるぐらい、何でもない。それでも、矢崎に抱かれるのは嫌だった。
そういう事だろう。
「それってセイジ？　……子供みたいな駄々捏ねてたぞ」
「会ったのか？」
「もちろん、もうしつこいぐらい文句言われたし……。何か、ギャングみたいなでっかい男に連行されてったけど……」
くっと、隆三は眉間に皺を寄せた。
昨夜の、その場凌ぎの言い訳が思わぬ影響を与えたと、判ったらしい。
「弟だって言ったか？」
「言わないよ。不味いんだろ？」
大きく、体中の力が抜けるような溜め息を吐いた隆三は、操の頭に手を載せた。

「矢崎に引っ付いてろ。……片付けてくる」
「へ？」
校門の前に車が止まる。
「何？　なんで？」
「いいから。いいか？　お前が信用できる、なるべく腕っぷしの強い奴と一緒にいろ。何だったら、兄貴を呼べ。いいな？　一人でふらふらするんじゃないぞ」
操に伸し掛かるようにして、助手席のドアを開ける。
「ちい兄ちゃん……」
渋々車を降りた操に、隆三は酷く真剣な顔を向けた。
「気を付けろよ」
それだけ言い残して、車が走り出す。
「……引っ付いてろって……。何だかなぁ」
セイジと話をする気だろう。しかし、赤ん坊のような駄々を捏ねるセイジを説得するのは、なかなか難しそうだった。
「ま、いっか……」
少なくとも、隆三は好かれているのだから、危ない事はないだろう。それより気になるのは、矢崎だ。
余りにも様子が変だった。

小走りに、前庭を駆け抜けた操は、一瞬立ち止まった後、生徒会室に向かった。

7

「火事か？」
「違うみたいだぜ」
「体育館が……」
周囲の人間の声が、耳に入る。
「火事ぃ？」
「じゃねーか？　煙出てるってよ」
ばっと、操は駆け出した。
歩く者、走る者。皆、それぞれだが、一様に体育館に向かっている。
動く障害物を避けながら、体育館に向かって走る。
と、いきなり腕を掴まれた。
「何すんだよ！」
反射的に、腕を振りほどく。
「やっぱり、お前だ」

見上げた先にへらへらと笑う男の顔があった。
Tシャツにジーパンという恰好だから、翔峰の生徒ではないだろうが、高校生ぐらいに見える。
笑っているのに不気味なのは、目が座っているからだろう。
「いい気になるなよ……」
咽喉の奥を震わせる、妙な笑いを響かせた男は、そのまま校舎に入っていった。
「なんだよ……」
もし、自分に霊能力があったら、幽霊の五、六人も見えたに違いない。男の肩に載った顔色の悪い幽霊を想像して、細やかな憂さ晴らしをした操は、再び体育館に向かった。
「操！」
今度は、矢崎だ。
「何かあった？」
「どうして帰らなかったんだ？」
「気になったんだよ！　何があったのさ？」
「小火だ。……煙を見たような気がして、ここに来たんだが……。明日の舞台装置が燃えたみたいだな」
「舞台装置って……」
「芝居だよ」
「へ？　演劇部もないのに？」

「本格的なモンじゃない。お祭りだからな」
簡単に応じた矢崎を、繁々と眺める。
「で、大丈夫だったの？」
「ああ。コンパネが焦げて、安物のドレスが、派手に煙を噴いていたがな……。まだ運び入れる前で、建物には被害はないし……」
言いながらも、矢崎は周囲を見回している。
犯人を捜しているのだろう。
生徒会という、表向きの組織のサブというだけでなく、翔峰学園を完全に支配している組織のサブでもあるのだ。こんな騒動を起こされて、見逃す筈がない。
「火は消えたの？」
「ああ。大丈夫だ」
どうせ、誰かに消火の指示を出して、自分は犯人捜しをする気になっているのだろう。
「まさか……セイジのファンが……」
矢崎は頷きもしなかったが、否定もしなかった。
可能性はあると思っているのだろう。
熱心すぎる信奉者が、何をやるか、考えるだけ無駄なような気もする。
「一緒に来い。離れるなよ」
兄に命じられた事と同じ事を言う。



やはり、矢崎もセイジのファンが暴れると思っているに違いない。過激なシンパなら、セイジに命じられれば、気晴らしに火を付けるくらいはやりそうである。

普通ならば、仮にも名前の通ったスター様がそんな事をするとは信じないだろうが、何しろ、顔を合わせた当人があの癇癪持ちの男だ。挙げ句にあの兄の反応。何をしても、不思議はない気がしてくる。

そういえば、妙な事を口走ったヤツがいた。

「あ……さっき。変なヤツが」

「どこだ?」

「……ちょっと、カタファルクのファンてイメージじゃないけど……。校舎に入ってったよ。本館の方」

「付いてこい」

命令して、矢崎が足早に歩き出す。

慌てて後に続いた操は、矢崎の後頭部を睨んでいた。

矢崎の部下になった覚えはない。それでも、兄の警告を無視してまで矢崎に逆らうほど無鉄砲でもなかった。

何しろ、妙な男に声を掛けられたのは、事実なのだ。

「矢崎だ。……まだ残ってるかもしれない。手分けして探せ」

ポケットから携帯電話を引っ張り出した矢崎が、声を潜めて告げる。

そのまま本館に入った矢崎は、警備員よろしく、周囲に視線を走らせながら、ゆっくりと廊下を歩いていた。
「矢崎さん、何か？」
操の目にはオヤジにしか見えない、不精髭を生やした男が近付いてくる。
「小火騒ぎがあってな。またやるかもしれんから捜している」
「判りました」
ふっと、わずかに頭を下げた男が遠ざかる。
何を命じた訳でもないし、詳しい事情を説明した訳でもない。だが、矢崎の一言で、あの老けた高校生が、捜索に加わったのは間違いなかった。
途中で、他の男が近付き、数歩一緒に歩くと、離れていく。
「操。離れるな」
つい、足を止めてしまった操に、矢崎の鋭い声が掛かる。
「ひょっとして、手の者とかいうヤツ？」
イメージとしては時代劇だ。している事を考えれば、岡引と下引なのだろうが、夜盗と手下という方がぴったりくる。
「協力者」
「そっか、そういう言い方もアリか」
大股で歩きながらも、矢崎は周囲に目を配っている。

本館の一階は、校長室と事務室、応接室。それに同窓会事務室があるだけだ。文化祭だからといって、展示室には使っていないが、ＯＢの接待のために、人の出入りは多い。
「二階か……」
「うん……」
矢崎と共に階段に向かう。
と、その階段の横のトイレの貼り紙が目に入った。
職員用というプレートの下に、女性専用という貼り紙がしてある。
本来は職員用のトイレが、今日だけは女性用トイレになっているのだ。男子校には、女子トイレなどないから、苦肉の策である。
人間を捜しているのだから、中を確認すべきなのだろうが、普段なら平気で中を覗けるトイレも、貼り紙ひとつでドアを開ける事さえ躊躇われた。
ところが、矢崎は平然とノックをすると、答えが返らないのを確かめて、ドアを開けた。
「もうすぐ閉門です。なるべく早く退出してください」
大声を出す。
半ば感心して、操は矢崎を見上げていた。
堂々と行動すると、女子トイレを覗くという行為も、何の問題もなくなるようだ。
不審人物がいない事を確かめたのか、ドアを閉めた矢崎は顎をしゃくるようにして、二階を示した。

そのまま、階段を小走りに上がる。
「……あ、矢崎さん。二階はいません。二号館は大野が見ています」
階段を上がり切ったところで、男が話し掛けてきた。
見た事のない顔だ。ついさっき、声を掛けてきた男の伝言で、捜索に参加したのだろうか。
「判った」
「三階も回ってみます」
階段を上がっていく男は、だらしなくネクタイを緩めて、シャツのボタンも外していた。ズボンも、制服のデザインとは違っている。それなのに、絵に書いたような優等生の矢崎に指示を仰ぐ事を、不思議とも何とも思っていないようだった。
「どうした？」
よほど変な顔をしていたのだろう。矢崎が訝しげに問うてきた。
「……やっぱり、裏組織ってヤツ……？」
「何をバカな事を……。行くぞ」
連絡橋を使って、三号館に向かう。
校庭には、まだ随分と人影がある。ここで騒ぎを起こしても、すぐに発見されると思うのだが。
実際、体育館は小火で済んでいるのだ。
「こんなに人がいるのに……」
呟いた操の声を聞き付けたのか、矢崎は扉の前で足を止めた。

「人がいるから、だろうな。……体育館で小火騒ぎを起こして、その間に何かしでかす気だろう。本命は別さ」
「陰険なヤツ……」
操が言うまでもなく、放火をする人間が明朗な人間である訳もない。
「そら……ちゃんと付いてこいよ」
ドアを引き開けたまま、操を招き入れる。
こくこくと頷いた操は、人気のない廊下に足を踏み入れた。
展示が主なこの校舎には、人は残っていないようだ。今更、展示物に手を入れ直す人間はいないという事だろう。
「まさか……爆弾仕掛けたりはしないよね」
「いくらなんでも……」
言い澱んだ矢崎は、扉を閉じると、一番近い教室を覗き込んだ。
「お前が見たのはどんなやつだった?」
振り返り様、そう聞かれて、操は小首を傾げた。
「どんなって……危ないニーちゃん?」
「なんだそれは……」
呆れ顔の矢崎が、操を従えて次々と教室を覗いていく。
「この階にはいないな」

「上？」
「そうだな。上から行こう」
「上も展示室？」
「いや……喫茶があったな。それと、軽音の有志が視聴覚室でクラブやってる」
「機材とか壊されたら、騒ぎじゃない？」
その操の思い付きに、矢崎はすぐに賛同したらしい。
操の手を摑むと、階段を駆け上がった。
建物の一番端にある視聴覚室へ急ぐ。
「引っ張らなくても付いて行くって！」
「ああ……悪い」
そう言いながら、矢崎は手を離そうとはしない。代わりに、少しだけ歩調を緩めた。
操は引かれるまま付いて行きながら、通り過ぎる教室を等閑（なおざり）に覗いていく。
喫茶の看板がいくつか並び、ギャラリーなどと看板を掲げた教室もある。他には、占いに、アクセサリーショップ。ガレージセールの看板まである。
どうやら、金を取る催（もよお）しが、この階に集まっているらしい。
不意に手を引く力が弱まる。
「なに？」
振り向いた矢崎は、答える代わりに唇に人差し指を当てた。

数歩先には視聴覚室の分厚い扉がある。
しかも、扉は閉じ切っていない。
操を扉の脇に押し遣ると、矢崎は静かに扉を引き開けた。
覗かなくても、中に人がいるのは判る。
「何してる!!」
がたがたと何かがひっくり返る音。
同時に、矢崎は視聴覚室に飛び込んでいった。
付いていこうか、迷った挙げ句、操も矢崎に続いて中に飛び込む。
明かりの点いていない室内は薄暗かったが、何も見えないというほどでもない。恐らくDJブースのつもりだろう、一段高い場所に、誰かがいた。
矢崎がそこに駆け上がる。
「イテーッ!」
何とも情けない悲鳴と共に、男はあっさりと腕を捻り上げられた。
あっけないほどだ。
「操、来てくれ」
ブースから男を引き摺り下ろしながら、矢崎が呼ばわる。
慌てて駆け寄ると、矢崎は右手だけで男を押さえ付け、ポケットから携帯電話を取り出す。
「生徒会室に掛けろ。二番に登録してある」

「ダメ。圏外って出てる」
「……廊下なら掛かる」
言われた通りに、視聴覚室の外まで出ると、確かに通信可能の表示が現れる。
ほっとして、短縮ナンバーを押そうとした途端、背後から喉元に腕が巻き付いた。
ほとんど同時に、手の中から携帯電話が引ったくられる。
「困るんだよねー」
笑いを含んだ声が、耳元で囁く。
更にもう一人、喫茶の看板を掲げた教室から出てきた。
「来いよ」
操を抱えるようにして、男は視聴覚室に踏み込んだ。
突然の事に抵抗しそびれて、ずるずると室内に連れ込まれる。
「おい……そこのお前」
矢崎に呼び掛けた男の声は、妙に落ち着き払っていた。
あの男だ。
本校舎の前で、操を引き留めた男。
「そいつを放せよ」
矢崎が拒否するなどとは、微塵も思っていない態度だ。
やがて、その理由が判る。

頬に冷たいものが押し当てられた。
「見えるだろ？」
揶揄うような声に、背筋が強張る。
頬に押し当てられたナイフが、視界の隅をちらちらと動く。
「早くしろ！」
矢崎が、男の腕を放した。
「へっ……。こんなオカマ野郎連れてたら足手纏いだろうがよ。バカだねぇ」
へらへらと、男が笑う。
「早くしろ！　こいつら、閉じ込めときゃいいんだよ！」
矢崎の腕から逃れた男も、やはり幽霊の二三人は連れていそうなタイプだった。影が薄いというか、生気がないというか。
その所為か、ナイフを突き付けられていても、それほど恐怖感はない。血は見ても、肉を抉られるほどの事はないだろう。
恐怖というより、幽霊に取り憑かれたような不気味さがあった。
「しばらく大人しくしてろよ」
操のネクタイを引き抜いた男が、後ろ手に腕を縛り上げる。矢崎も同じように、腕を縛られて、フロアに突き転がされた。
「じゃあな！」

男たちの影が廊下に出ると同時にドアが閉まる。
途端に、何も聞こえなくなった。

8

「……なんなんだよ！　こんな事して、何になるってんだ？」
ムカツク。命に危険を覚えてもいないし、怪我をさせられた訳でもない。腕を縛られたネクタイも、ちょっと手間は掛かるだろうが、解くのは難しくない。
だが、この雑な扱いが、頭が真っ白になるほど腹立たしかった。
「チクショウ！　何考えてやがんだ！」
「……それが問題だな……」
「へ？」
落ち着き払った声を出す矢崎は、操と背中を合わせるようにして座ると、ネクタイをほどきに掛かった。
さほど待つまでもなく、手が自由になる。
次は操が矢崎のネクタイをほどく。
ＤＪブースから漏れる光だけでは、手元が覚束ないが、どうにかネクタイを緩めると、矢崎が腕を抜いた。

「あいつら、何を企んでいると思う？」
平然とした足取りで、ＤＪブースに歩み寄った矢崎は、腕組みしたまま中を睨んでいた。
「矢崎さん？」
「触るなよ。……あいつら素手だったか？」
「ナイフ持った方は……。何？　何したんだ？　指紋調べるような事？」
警察で事情聴取されてから、二ヶ月と経っていない。ライフルだのサバイバルナイフだの、穏やかでないものがぞろぞろ出てきた所為で、操も指紋を採られた。
もちろん、何の不都合もなかったし、矢崎が振り回していた特殊警棒も、その場で拾ったものという事で、話は簡単に終わっている。
だが、そのたった一度の経験で、警察がどれほど細かい事まで気にするか、よく判っていた。
「……悪い予感がする……」
それだけ言った矢崎は、ドアに向かうと、ノブに手を掛けた。
思い切り力を入れる。
だが、ドアはびくともしなかった。
「閉じ込められたの？」
「……そのようだな」
確かめたかっただけらしい。別に慌ててもいなければ困ってもいない。矢崎が一緒にいる所為か、操自身も、酷く落ち着いていた。

「まさか、火を付けるとか……」
「そこまではしないと思うがな」
恐らく、矢崎には見当が付いているのだろう。そして、対処できると判っているから、落ち着き払っているに違いない。
「何？　あいつら何をする気なんだよ」
「……ドリンクに何か混ぜたんだと思う」
「え？」
意味を摑み損ねて、操は間抜けな声を上げた。
「まぁ、毒じゃないだろうが、消毒剤とか、洗剤とか……。わざわざDJブースに入り込んでいた目的は、それぐらいだろう。レコードは別に保管しているみたいだしな」
「そういえば、喫茶の教室から出てきた奴がいた」
「なるほどな。ここはついでか……」
あっさりと矢崎は納得している様子だ。
が、操には、簡単には信じられない。いくら何でも、セイジのファンがそんな事をやるとは、思えなかった。
「どうしてだよ。セイジが恨んでるのは俺だろ？　そんな事したって、俺が飲むかどうか、判らないじゃないか」
「……おそらく、セイジのファンじゃない。熱心なファンというのは、憧れの対象と同化しよう

とするものだしな。……あれはどう見ても、ロックファンじゃない」
確かに、その通りだ。
Tシャツにジーンズという表現は同じでも、Tシャツの柄やジーンズの形が違う。少なくとも、セイジの熱狂的なファンは、だぶついたジーンズに白いTシャツという恰好はしないだろう。
それぐらいなら〝ゾンビメイク〟に黒の革の上下というスタイルの方が納得しやすい。
「けど、俺にいい気になるなって……」
「……〝鬼灯(ほおづき)〟か……」
「ほおずき？　何それ」
「今日のトリを取ったバンドだよ」
「なんで？　そりゃ機嫌悪かったらしいけど、あんなかったるいバンドに、そんな危ないファンが付いてたりするわけ？」
「カタファルクのファンが、全員がタトゥー入れて、目の周りを真っ黒にしちゃいないだろ？　全員が全員、喧嘩好きって事もない」
「……まぁ……」
矢崎の理屈はよく判る。けれども、屁理屈(へりくつ)に聞こえてしまうのも確かだった。
操が口に出さなかった反論を、矢崎は鋭く感じ取っていたらしい。にやりと笑うと、ドアに身体を押し付けた。
「……考えてみろ。セイジのファンなら、お前をフクロにすると思わないか？　文句を並べなが

ら、ぼこぼこに殴るって方がすんなり信じられるだろう。こんな回りくどい、不確実な方法は取らないと思うがな……」
「それは……。確かにそう思うけど……」
「お前が毒を飲んだとしても、のたうち回る姿は見れないんだぞ。そんなもので溜飲を下げられるヤツはかなり陰湿だ。セイジはそういうタイプか？」
フクロ叩きにされるのと、毒を盛られる事のどちらがましかと言われても、判断できない。それでも、飲みものに異物を入れるような陰湿さは、我慢ならなかった。
「マジに、何か入れたと思う？」
「それしかないだろうな。まさか、時限爆弾を仕掛けたって事はないだろう」
しれっと宣う矢崎は、烏龍茶のペットボトルを睨んでいた。
ＤＪブースの隅に置かれたダンボール箱は、明日のための準備なのか、それとも買い込み過ぎて余っているのか。
どちらにしろ、蓋の開いたダンボールの中身までは見えなかった。
「確かめるのは、教師に任せればいい。俺たちは単なる目撃者だ。まぁ、明日を無事に乗り切るには、こっちで何とかした方がいいだろうがな」
「……目撃者っていっても……。携帯取られたし……」
携帯電話があっても役に立たないだろう。どうしてか、この部屋は電波を遮断するようになっているらしいのだ。

「どうやって知らせるのさ。窓ないし……」
「鍵を掛けた訳じゃないだろう。外に細工していれば、すぐに見付けるさ」
そうだった。矢崎の手下が動いている。
ほっと溜め息を吐いた操は、ドリンクコーナーに入り込んだ。
長机を二つ並べて、値段表を貼り付けただけのドリンクコーナーは、内側にクーラーボックスと紙コップの詰まったビニール袋が放置されていた。
「なんか、これも危なくない？」
「……そうだな……」
壁際に垂らされた暗幕を捲り上げて、ドアを探す。
ビデオの操作をする小部屋には、窓があった筈だ。しかしながら、ドアはしっかりとロックされていた。
「……くそ！」
「操？」
「閉まってる」
「操、いいから、こっちへ来い。……そんなに待たなくても、すぐに探しにくるよ」
判っている。
きっと、矢崎の手下共は、真面目に、必死になって犯人捜しをしているだろう。視聴覚室のドアが外から封じられていれば、怪しいと思うに違いない。

それは判っている。
だが、落ち着いてみると、矢崎と二人きりで閉じ込められているのは気詰まりだった。頬にナイフを突き付けられた時より、矢崎と一緒にいなければならない今の方が、ずっと気が重い。
「……操。……大丈夫だから。いざとなったら、ドアぐらいぶち破ってやるよ」
きっと、矢崎ならできるだろう。
しかし、そんな力があるという事実が、操を萎縮させているとは、気付いていないようだった。
「……お前、今日、お化け屋敷を手伝ってたんだって？」
「昭夫にーちゃんと、サボってただけ……」
余計な事は言いたくない。妙な事を口走ってしまいそうだ。
「見てたのか？　だから拗ねてるのか？」
急に一番聞かれたくない事を言われ、きゅっと口を噤んだ操は、長机に腰を下ろした。
「……危うく雪弥に殴られるところだったんだ。当て付けに〝ミカちゃん〟を使うな、だとさ。どうやらあんなのが趣味らしい」
あんなの扱いだ。
べたべた引っ付かれて、嬉しそうに笑っていたくせに。
「当て付ける気がなかったとは言わないが、まさか、あんなところを見られているとは思わなかった……」

「あんなところって？　イヤリングなくしたって、騒いでるとこ？」
喉を震わせて笑った矢崎が、歩み寄ってきた。
体温が感じられる。
「雪弥が見付けて、トイレットペーパー巻き付けたまま、渡しに来ていたぞ」
「ふーん」
隣りに、矢崎が座る。
互い違いに狭い長机に腰を下ろすと、顔が思いの他、近くなった。
「何を拗ねてる？」
「拗ねてねーよ」
「あの女は、あんまり煩いから相手をしただけだ。一日中でも喋ってそうな勢いで、こんな可愛い子を一人でお化け屋敷に入らせる筈がない、とか言ってな。……無視しても良かったんだが、それほどの気力もなかった」
「だから、知らねーよ、そんなの」
操の右手を、矢崎の右手が摑む。
「実は……嫉いて欲しかったんだよ」
「ばっかじゃねーの」
「そうだな……」
言いながら、指を絡めてくる。

「何時でも女に戻れるって、確かめたかったのかもしれないな」
「だからってあんな女か？」
「扱いやすいだろう？」
「あれが？　扱いやすい？」
やはり、矢崎は底知れぬところがある。操など、五分と会話を持たせられないだろう。確かに矢崎なら〝ミカちゃん〟の我儘に笑って付き合えるかもしれない。
「……操に比べれば、どんなやつでも扱いやすいさ」
ふわっと、空気が動いた。
唇が重なる。
逃げようとか、嫌だとか思う前に、がっしりした腕に抱き竦められた。
唇をこじ開けて、舌が侵入してくる。
舌と舌を擦り合わせて、歯茎の内側を舌先が擽ってゆく。忙しなく動く唇が、唇を挟み込み、軽く歯が立てられる。
ぴちゃっと音がして、唇が外れた。
「嫌か？」
「キスだけなら……」
再び唇が降りてくる。
ぞくっと背筋が粟立ち、何も考えられなくなってきた。

熱い男の腕に抱き留められ、がっしりとした手で撫で回される。
それが、嬉しい。
矢崎が自分を欲しがっている。
その事実が、嬉しいと思ってしまうのは、自分に対する裏切りだ。
それでも、痛いほど強く抱き締めてくる腕が嬉しかった。
――なんでだろう――
答えを出したくない疑問が、頭の中でぐるぐると渦巻く。
「操……。ごめんな……」
囁いた唇が、静かに離れる。
ほとんど同時に、ドアが開いた。
「大丈夫ですか！」
動じる様子もなく、矢崎は副総統の顔で応じる。
「捕らえたか？　貧相な男だ。三人組の」
「……いえ。何があったんですか？」
「ここに閉じ込められた。誰か、会長を……。烏龍茶に異物が混じっていると思う。近くの喫茶も調べてみろ。……教師にはまだ知らせるな」
きっぱりと、命じる。
その腕に抱かれたまま、操はぼんやりとドアを見詰めた。



がっしりとした体格の男が、矢崎の指示を待っている。
「そうだな。この階に出店している責任者の連絡先を調べておけ。恐らく必要になる」
「はい。――他には？」
「あ、その辺に携帯が落ちてないか？」
「いえ……探してみます」
「いや、いい。それより、俺の携帯に掛けてみろ。まだ連中が持ってれば、鈴代わりになるぞ。……校内にいるならだがな」
「判りました」
ぺこりと頭を下げると、男の姿が消える。
――笑えるくらい素直に言う事を聞くなー。ホント――
妙な事に関心しながら、男の後ろ姿を見送っていると、不意に顎を摑まれる。
急に、自分が未だに、矢崎の腕の中にいた事を意識した。
「わっ！」
慌てて、矢崎の胸に両腕を突っ張る。
「なんだ……急に」
「……見られた……」
「何を？」
しれっと聞き返した矢崎は、改めて操を抱き寄せた。

「放せって」
「橋本さんが来るまでには、まだ少し時間がある」
「バカ言ってんな」
「痛ッ！」
思い切りよく、矢崎の頬を張ると、腕の中から何とか抜け出す。
そのまま逃げ出そうとして、ぐいと引き戻された。
背中が、矢崎の胸板に当たって、元の木阿弥。違いといえば、後ろ抱きに抱えられたくらいだ。
「アブねーだろ！　忘れたのかよ。それで階段からブチ転げたくせに！」
「あれは重力が敵になったからさ」
「今度は肘が凶器になるぞ」
「判った判った……」
一瞬両手をホールドアップした矢崎だが、操が逃げるのは許してくれなかった。
「なんだよ。あいつら捕まえんだろ？」
「いや……急に頭が痛くなってきた」
「は？」
「お前に殴られたせいだ。……階段で打ったところがずきずきする」
「うそ……」
「嘘じゃないって」

言いながら操の肩に腕を回した矢崎は、ずしりと体重を掛けてくる。
「……そういう訳で、引き上げるぞ」
「え？　マジ？」
何故だか嬉しそうに頷いた矢崎は、具合の悪い人間とは思えぬ足取りで、歩き出す。
視聴覚室を出ると、見張り番よろしく廊下にいる男を手招いた。
「会長が来たら、頭が割れそうだから、先に失礼しますって伝えてくれ」
「しかし……」
「後で連絡する。ただし、さっき言った事は確実に伝えろよ」
「は……はい」
困り顔ながらも、素直に答えた男が、気遣わしげに矢崎と操を見比べる。
「操に送ってもらうから。後はよろしく」
らしくもなく、恐ろしくいい加減な沙汰を残して、矢崎はその場を離れた。
もちろん、操を離してはくれない。
肩を借りる振りで、操を促す。
「いい加減な事言って……」
「いいんだよ」
こそこそと囁き返した矢崎は、操の肩を抱き寄せたまま、心持ち体重を預けて階段を下り始める。

妙に軽い足取りに、突き転ばしてやろうか、などと一瞬掠めた思い付きは心の奥底に仕舞い込んで、操は歩調を合わせて足を進めた。

9

どうしてこんな事になったのだろう。

肩に寄り掛かっている男に促されて、操が鍵を開けている部屋は、保健室だった。

古い鍵は、摩耗しているのか、なかなか上手く開かない。

帰ると言いながら、何故だか職員室に立ち寄った矢崎は、事情説明と称して、口止めなのか脅迫なのか判らない言動で、校内に生徒が残っている事を教師に納得させると、操を捕まえたままここまで連れてきたのである。

「詳しくは会長に聞いてくれ、とか言うなら、何のために職員室なんか行ったんだよ」

実際、怪しげな連中が飲食関連の出店で、何やらしていたというのは、矢崎の口からは一言も出なかった。ただ、ちょっとしたトラブルがあったと告げただけだ。

「何言ってる？　お前の持ってる鍵はどこから持ってきたと思ってるんだ？」

「え？　ウソ……これを盗みに行ったのかよ。——わざわざ妙な報告までして？」

ここまで行くと既に呆れるしかない。

しかし。

「でもなんで？」
「さぁ、なんででしょう」
にやりと笑った矢崎が、手の止まってしまった操の手から鍵を取り上げると、何故かあっさりと開けてしまう。
「慣れてるんだ……」
「運動部は常連だからな」
何か違うような気もする。橋本総統に具合が悪いと伝言しておいてこんなところで休むということ自体、変だ。保健医もいないし、頭を打っているのだから、即座に病院に行くというのが、正しい対処の筈だった。
「ほら、入って……」
一瞬迷った後、渋々と保健室に入る。
頭が痛いというのは、間違いなく嘘だろうが、無視する事もできない。その上、真っ直ぐに冷蔵庫に向かって氷を取り出されたら、責任の一端があると思っている者が逃げる事などできる訳がない。
氷をビニール袋に入れて、急ごしらえの氷嚢を作ると、後頭部に押し当てる。
さらに、薬棚を漁る矢崎を、操は不安げに見守った。
「……あった、あった……」
目当ての薬が見付かったのか、矢崎はノートに名前を書いていた。

「鍵、盗んだんじゃ……。そんな事したら」
「大丈夫」
何が大丈夫なのかは知らないが、きっと生徒会だけに使える魔法があるのだろう。
真面目に考えるのも莫迦莫迦しくなって、操は椅子に腰を下ろした。
いつもは、白衣を引っ掛けた保健医が座っているキャスター付きの椅子は、油切れの悲鳴を上げた。
「煩いな……。こっちへ座れよ」
そう言われてしまうと逆らえない。頭が痛い人間に、この金属音は凶器になるだろう。
首を竦めた操は、勧められるままベッドに移動した。
「ひゃっ！」
首筋に、冷たい手が触れる。
「何してんだよ。頭痛いんなら……」
「口実……」
ぼそりと返った答に、操は目を瞬かせた。
「へ？」
いささか乱暴に、氷の詰まったビニール袋を投げると、小さな手洗いシンクに、見事に命中する。
「今日のトラブルは、下手をすれば警察沙汰だ」

「あ……うん」
それはそうだろう。本当に飲みものに異物が混ぜられていたら、冗談で済ます事はできない。
橋本総統が穏便に済ます気になれば別だが、どうも彼は事を大袈裟にする方が好みのような気がして仕方がなかった。
「事情聴取だ何だとなったら、また、夜中まで拘束される事になる」
「……うん……」
目撃者の調書を作るのも、何時間も掛かるという事を、操は身をもって知っていた。テレビドラマだと、ただ話を聞くだけで終わりなのに、現実は、一々詳細を聞き取りながら、口語調の調書を作り上げるのだ。
「下手をすれば、文化祭は中止だ」
「……うん……」
小火騒ぎだけでも危ない。
いくら生徒の自主性に任せるという経営方針でも、ものには限度があるだろう。
それくらいの事は、操にも想像できる。
「だから……」
「え？」
「今朝の続き」
「ちょ……ちょっと。厭だって言っただろ！」

泣きを入れた。それでどうにか見逃してもらったのだ。どうしても厭だと暴れて、お前はレイプ魔だと言い切ったも同じだった。

あの一瞬の、細胞の総てが拒絶するような、感情の爆発を忘れた訳ではない。全身で拒絶された矢崎が、そのまま手を引いた筈だ。

「……キスはいいんだろ？」

耳元で囁かれて、渋々と操は頷いた。

さっきも、今朝も、キスは好きだった。

唇の横に軽い音と共に落とされるキスも、舌と舌を絡めあうようなキスも。

だが、そこまでだ。

「痛いのは厭だ……」

「痛くしない」

「だって……間違ってる……」

「何が？」

懲りない男は、操のシャツのボタンを外し始めた。

「惚れてもいない女と寝るより、よっぽど道徳的だと思わないか？」

「まあ……」

「男同士で寝たら、犯罪になる国に生まれた覚えはないし、殺されなきゃならないなんて宗教も信じてないしな」

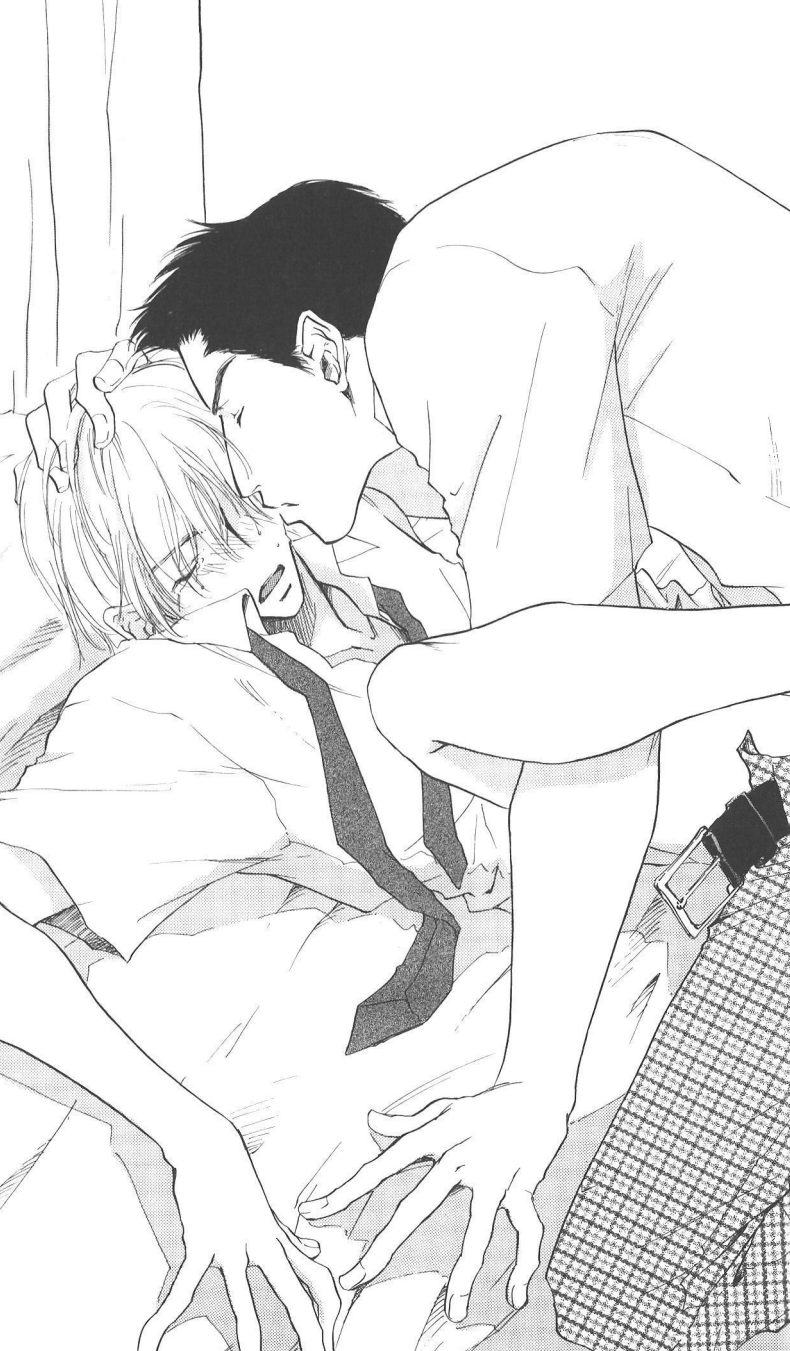
屁理屈だ。
それだけは判るが、操には反論するほどの頭はない。
「キスしてくれ」
操をベッドに押し付けて、伸し掛かってくる男が、のうのうと呟く。
その図々しい唇にキスしてやる自分も、大概だ。
「操……」
熱い身体が重なってくる。
目を閉じた操は、抵抗する努力を放棄した。
協力してやる気はないが、後先考えずに暴れるには、力の差を認識し過ぎていた。
「……人にとやかく言われるのが厭なら、他人の振りをしてもいい。ただの先輩後輩でもいい。……けど、時々はこうして抱き締めさせろ」
言いながら、矢崎が首筋を舐める。
「何だよそれ……」
「操が俺のものになってくれるなら、いくらでも妥協する」
「……それって、結構みっともないじゃん」
まるで、がっついているだけの、もてない男みたいだ。
だが、矢崎が女の目から見ても、充分魅力がある事は今日思い知らされた。
「みっともなくさせてるのはお前だ」

耳に言葉を注ぎ込まれ、熱い指が制服のズボンの中に忍び込んできた。
「なんでだよ……。どうして……」
「知るか。どうしてもお前が欲しいんだ」
自分のものではない指が、股間をまさぐる。肉厚の指は、この行為が気の迷いや勘違いでない事を教えていた。
女の嬌声を浴びる男が、他人の男である印に指を這わす。
「なんで……」
まだ納得していない。
男なのに、男に抱かれる事を、認めた訳ではない。それなのに、背筋を這い上がる感覚は間違いなく快感だった。
「操……みさお……」
首筋に歯が立てられる。
「……や……だ……」
どうして、身体が裏切るのだろう。声が甘く掠れていくのが、許せない。あの、爆発するような拒絶の感覚をはっきりと覚えているのに、たかが半日で、この身体は矢崎の手を受け入れているのだ。
「やだっ……やっ……」
舞い上がり、掠れる声が許せない。

縋り付くように、矢崎に抱き付いた操は、慌ただしく唇を合わせた。
痙攣する舌も、勝手に舞い上がる息も、全部キスの所為だ。
うっとりと、ただ唇の感覚だけ追い掛けていた操は、不意に忍び込んだ指に、目を見開いた。
ぬるりと、さして抵抗もなく入り込んだ指は、何かが塗られているのだろう。
ねちゃねちゃと動く指が、酷く落ち着かない気分にさせた。
「や……だ……」
「ごめんな操……。けど……諦められない」
苦しげに歪んだ顔が、操を見下ろしていた。
そのまま、瞼にキスされる。
頬に。
首筋に。臍に。
「やだっ！」
熱い舌が、目覚めた牡に絡み付く。
「やだっ……やめっ！」
すっぽりと呑み込まれたものが、ひくひくと痙攣している。軽く歯を立て、敏感なところを舌で擽りながら、後ろに忍び込んだ指がゆっくりと前後する。
逃げる気で立てた膝が、かくんと崩れて、そこに矢崎の髪が触れた。
硬い髪が太股に触れてちくちくする。

「やだっ！」
内側を愛撫する指が増やされる。
「やあっ……んっ……」
揺れる指先が、操の理性を奪っていく。
ぺちゃぺちゃと、厭らしい音を立てて舐め回る舌が、傷みとないまぜの熱が、襲い掛かる。
ずん、と、下半身が重くなった。
目の裏が真っ赤になる。
解放。
「はあ……ん……」
一瞬の脱力。
その隙を衝いて、矢崎が入り込んだ。
みっしりと充実した肉が、操を串刺しにした。
「……いた……い……」
ぽろぽろと涙が零れる。
痛い訳でも、苦しい訳でもない。
自分でも理解できない感情が、行き場を失って涙となったかのようだ。
「ごめん……ごめんな……」
ゆっくりと、操の身体に腕を回した矢崎は、そのまま動かずにいた。

「……操……操……」
顔中にキスの雨が降る。
意味もなく、ただ流れる涙を吸い取ってくれる矢崎は、愛しげに髪を撫で上げていた。
「ごめんな……。けど、もう離さないからな……。諦めてくれ……」
無茶な事を宣言する矢崎は、ゆっくりと動き始めた。
「やめ……。やだって……」
この前は、さっさと気絶したから、何があったのか、ほとんど覚えていない。しかし、何かぬるぬるするものを塗られた所為で、それほど痛みがないのが、幸いなのか、不幸なのか。
自分がどれほどみっともない恰好をしているのか。矢崎がどんな顔をしているのか、操は妙に冷静な頭で観察していた。
「……操……みさお……」
ぞくぞくっと、快感が背筋を駆け上がる。
「あっ……あ……」
冷静な自分と、周りが何も見えなくなっている自分。
男に抱かれる自分を蔑む自分と、快感に溺れていく自分。
「やだぁ……あぁぁ……」
「操……みさっ！」
矢崎の動きが激しくなる。



揺すぶられる身体が、どうしようもなく熱くなった。
「みさ……おっ！」
息が詰まるほど抱き締められる。
その一瞬、操は大きな身体を、愛しげに抱き締めていた。

10

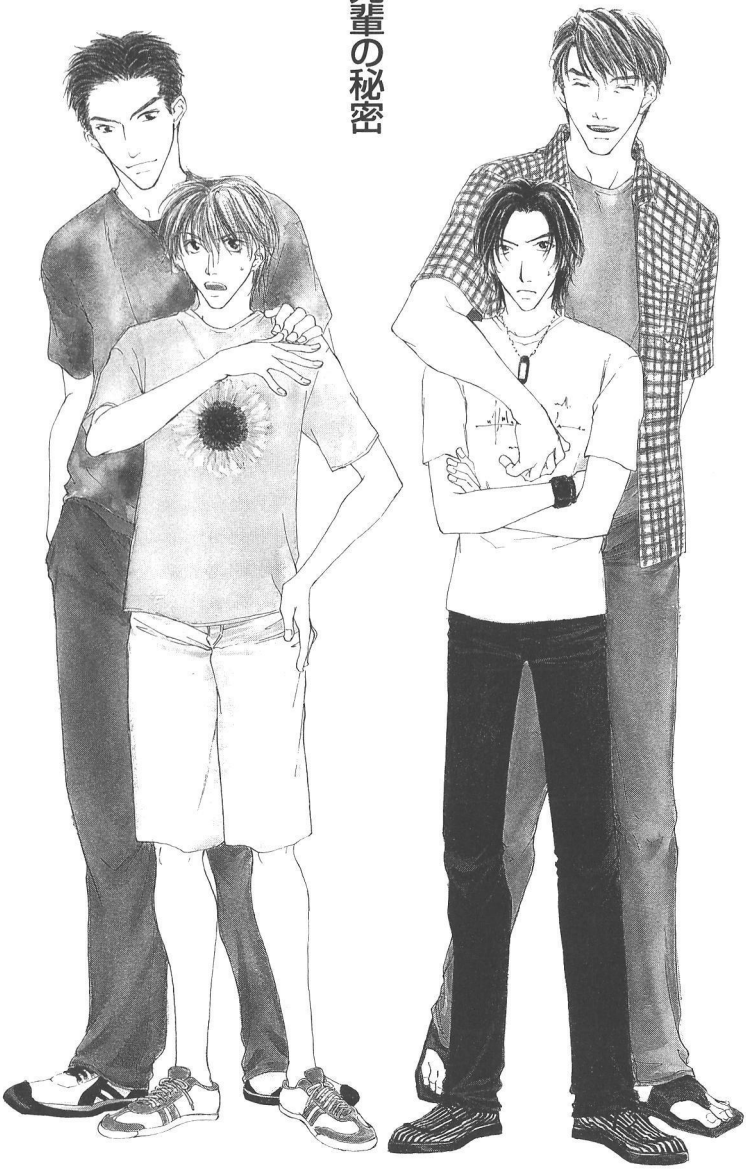
「……じゃあ、警察には知らせずに？」
「まぁ、そうしてもいいが。……とにかく、校舎に残っていた総ての飲食物は引き取らせたし、代わりに、缶入りの飲みものを用意させた。舞台装置もドレスも大学のものを使うという事で話が着いたし……後は、向こうでやるだろう」
カーテンの向こうで、矢崎と橋本が悪巧みをしている。
教師も、もちろん警察にも介入させずに、自分たちに有利に話を進めようと考えているらしい。
「ばれたらどーすんだよ」
呟いた操は、そろそろと身体を起こした。
口の中に呟いた筈なのに、何故かご丁寧な解説が返って来る。
「大丈夫。大学側からの申し入れだ。高校生の分際で、系列の大学生には逆らえないだろう？　一応、大学のバンドのファンだしね。こっちは親切心で知らせた。で、口止めされたんだよ。……

まぁ、後々問題になったら、可哀想な高校生が脅されたという事だな」
ざっと音を立てて、カーテンが引かれる。
「判ったかい？　操ちゃん」
地獄耳だ。
「……可哀想な高校生？」
名前も、写真も公開される事がない高校生だ。大学生に強要されたという記事が出れば、全員が大学生に非があると思うだろう。
しかし、橋本や矢崎の写真を見れば、その判断に至る確率は半分に下がる筈だ。
この二人は、そんじょそこらの大学生には太刀打ちできない迫力を持っていた。
「捕まえたの？」
「もちろん。ウチのアイドルを監禁した奴らだからねぇ」
「けっ……」
思わず、口走ってしまった。
途端に、橋本が操の耳を引っ張った。
「い……痛い。そ、総統……。痛い」
「無理な運動はさせるなって言わなかったっけ？」
思い切り、両方の耳を引っ張られる。
「俺に止められる訳ないじゃん！　止めるんなら、矢崎の方を止めろって！」

耳が解放される。
同時に、橋本は身体を捩って笑い始めた。
渋い顔をした矢崎は、薬品棚の下からシーツを引っ張り出した。
「操。……動けるようなら、どいてくれ」
「あ……うん……」
「いやぁ、若いねぇ……。まさか、矢崎がここまでがっつくとは思いもしなかったねぇ。もう少し後先を考えてやったらどうかな」
くそジジイ。
現役高校生の筈だが、ジジイな発言はめちゃくちゃ腹が立つ。
敵わない事は判り切っているが、身体が自由に動いたら殴り掛かっていただろう。
悲しいかな、今の操は、シーツを身体に巻き付けて、起き上がるのが精々だった。
操の動きを見た橋本が、急に眉を顰める。
「無茶させて……」
シャツを軽く払って手渡してくれる。
「……そんなに下手くそなのか？　可哀想になぁ。何だったら、俺で練習するか？」
「総統？」
何を言っているのだろう。
呆れて見上げた操を、背後から回った腕が軽々と抱き上げた。

「余計な真似はしないでください」
「……冗談だろ、冗談。全く――」
ぶつくさと文句を並べる橋本が、矢崎の代わりにシーツを掛け始めた。
どうやら、トラブルが片付いて、機嫌が良くなっているらしい。
だからといって、無闇に絡むのは勘弁して欲しい。まぁ、浮かれる気持ちは判らないでもないが。
「……ご苦労様」
「はいはい。生徒会は皆様の下僕です」
よく判らない事を呟いた橋本は、矢崎に抱き留められたまま操の頭を、乱暴に掻き混ぜた。

橋本先輩の秘密



1

晴れて、二年に上がった春。
よほど間抜けな事をしない限り、大学に席が用意されている高校生など、呑気なものだ。
新入生も、ほとんどが中学からの持ち上がりなので、これといった話題はない。
去年の自分達が置かれていた状況がどれほど特殊だったのか、寿はつくづくと感じていた。
近年稀に見る〝新人の美少女〟の雑賀操が、悲しくなるほどのただのヤローだったとか、その親友の寿もいつまでもちっちゃいとか、ろくでもない事で盛り上がっていた連中の気分が、ほんの少しだが判ってしまった。
今年もどうやら、幻想を抱く莫迦者が、ちらほらと紛れ込んでいる。今年始めて雑賀と同じクラスになった面々だ。
まぁ、こうして机を挟んで向かい合って座った寿の目から見ても、やはり、雑賀は見た目だけは見事に美少女である。
「……終わりだな……」
ぼそりと呟いた雑賀に、つい聞き返してしまう。
「何が？」
聞き返した事が既に気に入らないのか、返事は酷くぞんざいだった。

「こいつらの人生、終わってると思わねぇか？」
今年からクラスが一緒になった雑賀は、憎々しげに顔を歪めた。人が外見で判断できないというのを証明するように、思い切り雑な性格をした雑賀は、自分を見詰めているクラスメイトの存在が気に入らないらしい。
去年、同じクラスだった連中は、雑賀がただのガキだという事をよく理解しているようだ。美少女扱いして喜ぶより、可愛い弟扱いというのが、正しい取り扱い方だと理解しているらしい。
だが、このクラスになってそろそろ一月になろうというのに、未だに幻影を抱いている人間がいるのは、大笑いだった。はっきりいって、そんな幻想は、しばらくすれば霧散することは目に見えているが、まだ魔法は解け切ってはいないらしい。
「操ちゃん。ほい、ラブレターだよん」
取り扱い免許を受けた一人が、雑賀の前でぴらぴらと紙を振った。
「なに？　召喚…状？」
「そ。生徒会役員やれってさ」
「うそ！」
ばっと立ち上がった雑賀が、紙切れをひったくった。
酷く真剣な顔で紙を睨む雑賀は、生徒会長の想い人だ。矢崎会長がなりふり構わず意思表示しているのに、雑賀の方はのらりくらりと逃げ回っているようにも見える。
「横暴だ！　チクショウ！　橋本総統がいなくなったと思って、好き勝手やってやがるな！」

ぐしゃぐしゃと紙を丸めた雑賀は、音を立てて椅子に腰をおろした。
「今更じゃん。よく我慢したよ。俺、三学期から呼び出されると思ってたもん」
寿にしてみれば当然の感想を言っただけなのに、雑賀は本気で噛み付き返してくる。
「なんだよ！　それは！」
「だって、そうだろ？　会長んなったら、補佐役は任命できんだからさ。よく今まで我慢したって思わない？」
ぶっと頬を膨らませた雑賀が、恨みがましげな目を向ける。
雑賀が矢崎と付き合っているという噂は、一年の中頃からあった。実はそれが真実だと判ったのは、趣味の悪い前会長が決定的なシーンを見せ付けてくれたからだ。
もちろん、寿は雑賀の事を白い目で見たりしなかったし、言いふらしたりもしなかった。代わりに、自分の一番の秘密を打ち明けたぐらいである。
という事で、秘密を握り合った二人は、今まで以上に親しくなった。
「……ところで、あのオッサンは？　まだ毎日電話掛けてくんの？」
秘密を告げたといっても、橋本と付き合っていた事は教えていない。だが、離婚した母親の再婚相手の子供、という、いささか複雑な関係だという事は、告白していた。
そして、互いの不幸を嘆いたのだ。肝心要（かんじんかなめ）は黙っているのだから、罪悪感がないといえば嘘になるが、流石に何もかも正直に告げる気はなかった。どうせ、雑賀も全部は喋ってはいまい。
「ここんとこ音沙汰なし」

「……寂しいって？」
「ばーか」
橋本は、当初の予定通り、京都大学に進学した。
東大に行って欲しいという教師の願いも、翔峰大に来いという先輩の言葉もぶっち切って、ただアメリカンフットボールをやるためだけに、京都に行ったのだ。
もちろん、寿は祝福した。
自分の意志を通すのは大事な事だし、何でも京大のアメフト部といえば、関西でもトップクラスだというのだから、橋本には何より前向きな選択なのである。
などというのは、表向きの理由だった。
橋本の事は嫌いではない。どちらかというと、何でも言う事は聞いてくれるし、付き合うにはいい相手だと思う。たとえ、男でも、だ。しかし、あの息がつけないくらいにべったりと引っ付いてくるところは頂けない。
何しろ、暇さえあれば隣りにいるのだ。もっとも、校内では意地になって拒絶していたから、もっぱら家に帰ってからだったが、鬱陶しい事には違いがない。秀才と誉れの高い橋本様には、受験勉強など必要なかったようである。
だから、彼が京都に旅立ったのは、寿としても歓迎すべき事だった。
別に、縁を切りたい訳ではないのだから、距離だけが開くのは望ましい。
ところが、その日から電話攻勢が始まったのである。

日によって掛かってくる時間は違うが、外出していたりすると、どこで何をしていたか、逐一聞き出そうとする。

嫉妬深い中年男のような所業に、寿はうんざりとした。挙げ句に、専用の携帯電話を買ってやるとまで言い出したのだから、ほとほと愛想が尽きるというものだ。

何がそうさせるのか、既に理解の外である。

結局、寿の方がキレて、二三日、留守番電話にしておいて、連絡を取らなかったのが気に入らなかったのか、ここ一週間ばかり、電話は掛かっていない。

「呼び出されたんじゃねーの？　行かなくていいのか？」

「オレ、図書委員だもん。生徒会と掛け持ちはできないさ」

操が妙に自信たっぷりに宣う。

どうやら雑賀は、矢崎に呼び付けられる事を予想して、図書委員などという、似合わぬ役職を引き受けたらしい。

面倒な事は嫌いだと公言しているのに、定期的に昼休みを潰されて、放課後も拘束される役職を選んだ理由が判って、寿はにやにやと笑った。

「きっと、何か屁理屈を付けるんじゃないのか？　司書の先生に頼み込むとかさ……」

「やめて……。そういう不吉な事は言わないでくれる？」

げっそり、という顔で机に突っ伏した雑賀は、大きく溜め息を吐いた。

「……ご愁傷さま」

矢崎の執着ぶりは、ちょっと常軌を逸している。橋本も大概だと思うが、矢崎に比べればまだ辛抱が効いていた。

「いいなぁ。矢崎の野郎も京大に行くとか言い出さないかな……。北大でも琉球大学でもいいけどさ。とにかく毎週帰ってくるとかできないトコ」

可愛くない事を宣う雑賀は、実際に矢崎が京都に行くと言ったら、意地でも付いていくような気がする。同じ学校はちょっと無理だろうが、関西の大学というだけなら、いくらでも学校はあるのだ。

まぁ、矢崎に雑賀の気持ちを試す度胸があるとは思えなかったが。

「やっぱり翔峰に行くんか？」

「じゃないか？　そのまま剣道続けるって言ってるし……」

「普通そうだよな」

誰が好き好んで受験戦争の最前線に身を投じるものか、である。

「ま、橋本さんのバヤイ、親が新婚さんやってたら、一緒にいたくないよね」

「生まれたばかりのガキもいるし……」

これは正真正銘の半分血の繋がった弟だ。母親の再婚相手の連れ子である橋本は赤の他人だと言い切れるが、橋本の弟の方は寿の実の母の子なのである。

「……なんかさ、雑賀の兄ちゃんの気持ちがちょーっとだけ判るような気がする。やっぱ、この歳んなって弟ができるのって、複雑」

「橋本総統が兄ちゃんになるんだろ？　オレにしたら、慶介くんに同情しちゃうよ」
これには頷くしかない。
父親と、父親モドキがいるというだけで、将来に同情してしまう。しかも、橋本は間違いなく口煩いジジイになるに違いなかった。
悠介に慶介。いかにも兄弟だと主張している名前を付けられた弟が、兄に似ない事を祈るばかりだ。
「ゴールデンウィーク帰ってくんじゃないの？　で、オトートに引っ付いてんの」
声を潜める雑賀は、意味ありげに笑っていた。
「あのオッさんが？　オシメ替えんの？　不器用そうだけどなぁ」
「ンな、赤ん坊なんかよか、しっかり喋れる弟の方がいいんじゃねーの？　また、飯食わせろって騒ぐんだろ」
「げえぇぇ」
去年の夏休み。毎日毎日弁当を作らされた。
受験生なのに、アメリカンフットボールばかりやっていた橋本は、弁当の差し入れを強要したのだ。
結局アルバイトという事にして、しっかり金をふんだくったのだが、練習が終わるまで見物させられた所為で思い切り日焼けしてしまった。白い方がいいなどとは思わないが、Tシャツの跡がくっきり残る日焼けというのは、かなりみっともないものである。

「なんか、オレらって春先から不幸だよな……」
はああ、と溜め息を吐いた寿は、うつろな目を窓に向けた。
グラウンドの桜はすっかり散って、若葉が目立ち始めている。
去年は、あそこにでかい図体の男が溜まっていた。
何故か今年は、誰もいない。目立っていた連中のほとんどが卒業してしまったからだが、人をぞろぞろ引き連れて歩くのが好きだった橋本が、いなくなった所為もあるだろう。
もっとも、好き好んでそうしていたなどといえば、橋本は向きになって否定するだろうが。
「ゴールデンウィークねぇ……」
雑賀の予想も否定はできない。
京都から帰った橋本が、寿のところに入り浸る可能性は大だ。
ちらりと雑賀を盗み見ると、形の良い眉を露骨に引き上げた。
「駄目だよん。今年は遊びに行くんだもん」
「なんだよそれ。なんにも言ってないだろ？」
「え？　ウチに泊まり込むとか言うんじゃないの？」
「言う訳ないだろ。……ウチのとーちゃんの晩飯がなぁ」
そうは言ったものの、正直なところ、雑賀の突っ込みは正解だ。
まぁ、できる訳もないとは知っているのだが。いや、できるできないの以前に、雑賀の所など、隠れ家にもなりはしない。

「けど、いいなぁ。ゴールデンウィークなんて、出掛けた記憶もないぜ。いっその事親父ほっぽり出して遊び行っちゃおかな」
「何なら、一緒に行く？」
事もなげに誘ってくださったが、お邪魔虫になるのは御免である。雑賀が遊びに行く相手となれば、矢崎に決まっていた。他に可能性があるとすれば、家族くらいだ。
どちらにしても、寿が居心地が悪い思いをするに決まっている。
「バイトする」
「はぁ？　バイトって……。ゴールデンウィークの間だけ？　ンな短期のあるのか？」
「ジジイんちの庭の手入れ。本家の孫が合宿でいないから、オレにお鉢が回ってきたんだ」
いつもなら絶対に近付きたくない家だ。だが、橋本から逃れるためだと思えば、ジジイの戯言に付き合うのも意味があると思えた。
もちろん、庭の手入れを孫にさせるのに、わざわざ小遣いをくれるようなジジイではない。しかしながら、同じくジジイを苦手にしている父親なら、小遣いを奮発してくれる筈だった。滅多に帰らない実家の御機嫌伺い、という訳だ。
寿にしてみれば、泊まり込みの期間限定バイトとも言えるのである。
「バイトねぇ。……そういや、ちい兄ちゃん、今年もカタファルクのツアーを手伝うって。チケット、都合してくれるってさ。東京は無理だけど、地方なら最前列も押さえられるってよ」
「うそ！　マジ？」

「だから、頑張ってバイトしなよ」
「おおよ！　草刈りぐらいいくらでもやってやるぜぇ！」
いきなり、肩に力が入る。
生きる目標ができたではないか。
急に、目の前が開けたような気分になって、寿は心の底から笑みを浮かべた。

2

「……あの……。雑賀先輩……これ……」
ばっと封筒を突き出した少年が、そのまま脱兎の如く逃げていく。
少年とは言っても、雑賀よりずっとがっしりした体格だった。つい最近まで中学生だったとは、とうてい思えない。入学から一月ばかりで雑賀に向かって、こんな所業をする辺り、多分、持ち上がり組だろう。
それも、あまり事情通ではないやつだ。
まぁ、中学校の校舎は併設されている訳ではないから、何も知らなくても不思議はない。
「ふーん。嫌がらせだって意識はあるのか……」
少年の後ろ姿を見詰めた雑賀は、溜め息と共に封筒をポケットにしまった。
「何？　一応、読んでやる訳？」

「果たし状かもしんないだろ？」
それを、一縷の望みと言うのだろう。
苦笑した寿は、正門の前で仁王立ちになっている大男に気付いて、表情を引き締めた。
前会長橋本と、現会長矢崎の間でどういう話をしたのかは知らないが、寿だけは雑賀に引っ付いていても睨まれない。
とはいえ、いつまでも矢崎の理性が働くとは限らないので、彼の前では、なるべく距離を置くようにしていた。
寿がどうやって逃げ出すか考えている間に、雑賀は物騒な科白をぼそりと吐く。
「あの野郎、部活サボりやがったな……」
会長を野郎呼ばわりできるのは、雑賀ぐらいだろう。毎日毎日、雑賀の下校時間に合わせてランニングをする袴姿の生徒会長というのは、嫌でも目に付いた。
噂がどうこうと言う以前に、自分達の仲を喧伝しているようなものだ。それでも、兄代わりにしているだけだと信じている生徒がいるのは、偏に雑賀の対処が巧いからだろう。
「何してんのさ、会長！　部活は？」
大声で叫ぶ。
唇の端を下げ、顎を上げて雑賀を見下ろす矢崎は、如何にも不機嫌そうな表情を作っている。
ところが、細められた目は、子猫を眺める猫好きの目だった。態とらしい事、この上ない。
「今日は中止だ。……杉本、そんなにのんびりしていていいのか？」

「へ？」
このジェラシー魔神は、雑賀のクラスメイトというだけで、気に入らないのだろうか。
それならば、権力者らしく裏から手を回してクラスを別にするとか、自分が落第して同じクラスになるとかすればいいのだ。まぁ、後者に関しては、そんな事をした日には、生徒会長の地位も危ないだろうが。
校門前で雑賀の連れにガン垂れているのは、せめてもの抵抗。妙な事に文句を付けるのは、雑賀と二人きりになりたいからに違いない。
「んじゃ、お先に失礼します」
逆らうのも莫迦莫迦しいので、寿はあっさりと雑賀の側を離れた。会長様の心情など察する筈もない操は、寿を引き留めたい素振りだったが、敢えて校内権力者に盾突く根性など持ち合わせていない。
朝は気合を入れて登る坂を軽い足取りで降りていく。
下りは下りで、膝を悪くしていると、結構な苦行らしい。アメフト部の面々が、文句たらたらで坂の悪口を言っていたのを思い出して、寿はくすくすと笑っていた。
「……ご機嫌だな」
聞き覚えのある声。
ばっと振り返った寿は、フルオープンの車に納まった橋本を見付けた。
「……どうして……」

エンジン音など、気にもしなかった。
毎日送り迎えされている者は流石にいないが、それでも十台や二十台の車が登下校時に坂に溜まるのだ。まぁ、大抵は朝の風景、すなわち遅刻ぎりぎりに、母親に送って貰うか、タクシーで乗り付けるという事情だったが、お迎えの車そのものはそう珍しい訳ではない。
「何してんすか、ンなトコで……」
「待ってたんだよ」
京都にいる筈だ。自分の意志を強固に押し通して、官僚養成校とは対極にある最高学府に進学した筈である。
どうしてこんなところにいるのだろうか。
「……幻だ……」
「寿？」
「悪夢に違いない……」
ぼそぼそと呟いて、そのまま坂を降り始める。
「寿！　待てよ！　乗れって……」
「どうしてこんなとこにいる訳？」
今更ながら、矢崎の警告の意味が理解できる。橋本の帰京を知っていたのだろう。
「ヒマなんだよ、大学生っていうのは……」
本当だろうか。確かに、従兄弟の大学生は思い切り暇そうだったが、それでも最初は勝手が判



らず、何かと忙しい思いをすると聞かされていた。
どうも信用できない。
「サボリ？」
「人聞きが悪いだろ。京都なんてそう遠くないし」
「へえへえ……」
ドライブが苦にならない人間にとっては、東京・京都間も、大した距離ではないらしい。父親の玩具だという事を取り上げた橋本は、嬉々として乗り回していた。
きっと、九州だろうが北海道だろうが、車で旅行するタイプに違いない。目の前にいる車は、長距離を運転するには向かないと思うのだが。
「乗れよ」
「何で？」
「久しぶりだし、飯でも食わせて」
「そんな事言って、京都に行く日も食いに来てなかったっけ？　どこが久しぶりだよ」
こっそりと橋本の好みの味付けを探っていたのは内緒だ。日々の買い物が多めになり、橋本がいなくなってからもその癖が抜けず、食品を無駄にする事も多かった。ようやく以前のペースに戻ったばかりだという事も、口が裂けても言う気はない。
「そういう可愛くない事を言っているとだな。お前と兄弟だって、触れ回ってやるぞ」
「どーぞ。矢崎さん、もう着々と人心を掌握してるからね。あんたの威光もせいぜいで夏までじ

やない？　矢崎さんはそのまんま大学に上がるって言ってるし……」
「可愛くない……」
ぼそっと呟く橋本は、本気で嫌がっているようだった。
まぁ、橋本王国と言われていた学校が、卒業と同時に乗っ取られるのは面白くないだろう。
気持ちは判らないでもないが、学校の覇権など、どうせ卒業までの夢幻だ。卒業してまで足繁く通って、後輩の面倒を見ている野球部ＯＢなどは影響力があるらしいが、あれは特例だろう。
前会長の弟といわれても、別段影響はない筈だ。所詮、前会長は〝前〟。過去の人である。
「乗れよ」
「……全く。卒業した途端にこれだから……」
在校生だった間は、少なくとも生徒の目があるところで、誘ったりはしなかった。もちろん、寿自身も無視していたのだが、今なら誰に見られても堂々と理由を説明できる。
だからこそ、下校時間に通学路で待ち伏せるなどという所業に出たのだろう。
生徒たちの視線を集めている事を判っていながら、車に乗れという神経には、ほとほと感心するしかない。
「判ったよ。乗ればいいんだろ、乗れば……」
これ以上見世物になるぐらいなら、堂々と言い訳してやる。
腹を括った寿は、ドアを乗り越えて助手席に収まった。
「まーったく。大学に行ったら、理性なくなったんじゃないの？」

「……襲うぞ……」
ずるっと腰を滑らせた寿は、橋本から逃れるように身体を捻って、シートベルトを引っ張り出した。
やれるもんなら、やってみろである。
とはいえ、挑発すれば、結果は判らない。本当にやられたら洒落にならないから、口には出さなかったが。
「あんた……いってる事ムチャクチャ……」
寿の呟きにも、にやりと頬で笑った切り、橋本は何のコメントもしなかった。
橋本を見知っている人間からは怪訝な目、判っていない人間からは不信の目。どちらにしろ、あまりありがたくない視線に見送られて、車は発進した。
「……そう言えば、あんた、矢崎さんに会った？」
「なんだかなぁ。俺はあんた呼ばわりで、矢崎はさん付けか」
どうでもいいような事には反応するらしい。
「いいじゃん。……それとも、兄ちゃんとでも呼べってか？」
「あーあ。久しぶりに顔見たっていうのに……どうして、こうも憎まれ口ばっか叩くかなぁ」
「なに？　生き別れのおニーさんとか言って、抱き合って泣けって？　目ドキュかい……こら」
なんだか、止まらない。
会いたくて堪らなかった、などという気は毛頭ないが、ここまで糞味噌に言うほどの事でもな

い筈なのに、憎まれ口ばかりが唇から飛び出していく。
「そうじゃないだろ……。お前、なに尖がってんだよ」
坂下の信号に捕まったところで、橋本は訝しげに寿の顔を覗き込んだ。
「トンがってる？　なにそれ」
言い返したものの、妙に苛付いているのも確かだ。
「はいはい。申し訳ございません。ワタクシの勘違いでございます」
慇懃無礼そのものの態度に、ほっとする。これで、噛み付く理由ができた。
「おちょくるために来たのかよ。だったら降りるぞ」
「またまた……短気だねえ。降ろして上げないよ」
言いながら、信号が変わったのをいい事に、急発進する。
「バーカ……降りねぇよ」
まだ、人目はあるのだ。男の車から飛び降りて逃げ出した日には、明日には尾鰭の付いたしょうもない噂が、学校中に蔓延しているだろう。
好き好んで、噂の主人公になる気はない。
「で、何食わしてくれる？」
懲りない男だ。
「材料があるもんだよ。贅沢言ったら、食わしてやンねぇ」
「贅沢なんて申しませんとも。寿が作ってくれるなら、何でも御馳走……」

本気かよ、である。
京都に行ってる間に、言う事が益々おかしくなっている。
「はいはい……お手軽でいいよな。あんた」
聞こえぬように、口の中で呟くと、寿は今度こそ本当にシートに腰を落ち着けた。
本当のところ、言ってやりたい事は山のようにあるのだ。何で下校時刻に待ち伏せしているのか、とか、来るなら来るで何故連絡をしてこないのか、とか、更に遡れば、どうしてこの一週間何の連絡もしてこなかったのか、とか。
「あれ？」
自分の中で渦巻く文句に、ふと疑問を感じる。どうも変だ。
「何？」
「何って？」
「あれ。とか言ってただろ？　忘れモンか何かか？」
「え……言ってた？」
ここは白っ惚ける。まさか、何でこの一週間連絡してこなかったのか、などとは訊けない。
「まぁ、いいけどな」
少しもよくない口調で橋本が応じる。だが、寿にしてみれば、この男の不満など、知った事ではなかった。
「……ちょっとさぁ。スーパー寄ってくんない？」

無理やりに日常会話に引き戻して、頭に浮かんだ妙な思考は抹殺する。
「スーパー？　はいはい」
「ホールトマト買うから……」
「はいよ」
あっさりと承諾するところが嫌だ。べったりと貼り付かれていて迷惑だと主張しながら、結局その間に何度も買い物に付き合わせた事の証明である。この一月ばかり、買い物はほとんど自前の足でこなしていたから、すっかり忘れていたが、現れたからには、付き合ってもらう。
もちろん、別に意地悪で思い付いた訳ではない。
あと数日で問題の連休だというのに、こんな時期に帰ってこられたら、ジジイのところに泊まり込むしかなくなる。本当にジジイのところに行くのなら、何か作り置きの利くものが必要だと思っただけだ。
そういう意味では、立派な意地悪かもしれないが、やはり、一週間近く、この鬱陶しい大男に貼り付かれるのは勘弁だ。
寿のために毎朝朝食を作るぐらいだから、料理の才能は十分あると思うのだが、自分一人だと湯も沸かさない父親のために、手作りの冷凍食品を作らなければならない。買い置きの冷凍食品だと手を出さないくせに、自分のために用意された物なら食べるというのが、あの中年男の甘えたところだ。
それでも、目の前の大男よりは、可愛げがある。

比べてもしょうがないような事を考えている間に、見慣れたスーパーの駐車場に車が入った。

3

大きな寸胴鍋でミートソースを煮込み、隣りの平鍋ではロールキャベツが揺れている。
まずはコンソメスープで煮ているのは、橋本の好みを考慮しての事だ。父親用には、ベシャメルソースを足して、ホワイトソース仕立てにする。
ゴールデンウィークの間の食事と考えると、結構な量のメニューを用意しなければならない。だから、使い回しの利くミートソースをたっぷりと作っているのだ。
「え……と。これでラザニア茹でて……」
「凄いな。……こんなに一度に作るのか？」
いつもの通り、カウンターの向こうに立った橋本は、寿の動きを楽しげに見物している。
「しょうがないよ。ジジイが草引きに来いとか言ってるし……。ゴールデンウィーク潰される覚悟しとかないと……」
「え？」
「泊まり込みで、庭の雑草毟りをするんだよ。いつもなら従兄弟がやるんだけど、今年は皆クラブの合宿か何かでいなくなっちまうからさ。……たまには、ご機嫌取らんと……」
何で、言い訳までしているのか、自分でも多少承服できないながらも、寿はぺらぺらと喋り続

けた。
「親父の奴、一人になると、コンビニ弁当とか外食で済ましちゃうんだ。それでも、作っておくと食べるからな。――ま、晩飯だけだから、どってことないよ」
「ふーん」
いい加減に相槌を打った橋本の様子がおかしいのに、ようやく寿は気付いた。
何か余計な事を言ったらしい。
案の定、不機嫌だという看板を下げて、橋本がカウンターの中に入ってきた。
一九〇以上もある図体は邪魔だ。だが、それを口に出すほど、寿は命知らずではなかった。
「手伝う事ある？」
気に入らない事があるといって、不機嫌になったり、暴力的になるというのはよく聞く。だが、橋本はただただ寿に纏わり付くのだ。
ひょっとすると、矢崎以上に独占欲が強いのかもしれない。
「ヤマトイモ擦ってくれる？」
「すり鉢で？」
「……別にいいよ、おろし金でも……。けど、不味いとか、舌触りが悪いとかって文句を言うのはあんたなんだからね」
「畏まりました。すり鉢でおろさせていただきます」
軽口を叩いた橋本は、寿の頭の上に手を伸ばした。

釣り戸棚から、すり鉢を降ろす。
寿は場所が判っているのだが、何も知らない筈の橋本が、あっさりと見付けてしまう辺りが妙に悔しい。実際に見えるという事の証明だ。脚立を使わないと取れない戸棚の奥の箱も、彼なら届くだろう。
「……今度、大掃除手伝ってくんない？」
「あ？　大掃除？」
「やっぱ、一家に一台、でかい力持ちがいると便利だよ」
「一台、か？」
不満げに眉を寄せる橋本は、自分がロボット扱いされたと、ちゃんと理解しているようだった。こういうところが、好きだ。
去年の今頃は、皮肉を言ってやっても気付かない、挙げ句に、その解説を迫るような女と付き合っていたのだと、寿は妙にしみじみと思い出していた。
「天袋の奥に、謎の箱があるんだよ。ガキの頃、潜り込んで突っ込んだんだと思うんだけど、脚立だと足元が怪しいし、潜り込める程のスペースはないし、指先しか引っ掛かんないから、力は入らないし……。毎年、引っ張り出そうとするんだけどねぇ……」
「中身は、判らないのか？」
「……まるっきり……」
「黴たブーツとか出てくるんじゃないか？」

「あ、何か、妙なリアリティ。……やったな？」
「そりゃあもう、見事に徹ダンゴになった、ブーツが出てきたよ……」
下らない事を言いながら、橋本は思い切りよく粘る芋を手際よく擦りおろしてしまう。
「それを擂り粉木で擦ってくれると、嬉しいんだけど」
「はいはい……」
こうやって、甘えてやれば機嫌が良くなるのだから、扱いやすい男だ。少なくとも、寿が包丁を持っている限り、抱き付いてきたりはしない。
「すぐに食べるよね」
「……そうだな……」
「じゃ、テーブル用意してくれる？　お吸い物だから、すぐできるし……」
「これは？　小鉢にでも盛るか？」
すり鉢を示しながら、橋本が妙に忠実な事を聞いてくる。
「そのままでいいだろ？」
「こういう所だけは雑なんだから……。そこで料理の雰囲気ってものが決まるんじゃないか」
「雰囲気ねぇ……」
「だろ？」
「まぁ、それは認めるけど……。山かけ鉄火丼に雰囲気なんてあんの？　穂紫蘇とか、芽紫蘇とか用意して？　……芽ネギを盛って上品に？　何か違うと思うぞ。そういう料理じゃないだろ。

やっぱ丼モンなんだからさ。豪快に、がーっとかっ込むモンだろ」
「はいはい」
抵抗を諦めた橋本は、すり鉢を持ってリビングに戻っていった。
テーブルを拭いて、中央にすり鉢を置く。醤油差しの載った小皿と箸を並べると、準備は終わりだ。
「……ほーい、できたよ！　取りに来て！」
タイミングを見はからって、橋本を呼び寄せた寿は、お盆に丼を載せた。
湯葉の入ったお吸い物も、橋本の好みだ。いくら乾物とはいえ、しっかりストックしている辺りが、半年以上もこの大食らいの大男の食事係を続けた物証だろう。
買い物の量は以前に戻ったのに、嗜好の方が橋本に合わせていると知ったら、この大男は小躍りするに違いない。
もちろん、そんな事を喋る気はなかった。
だが、久しぶりに橋本に食事を提供する事で、妙に浮き立った気分になっているのは事実だ。
三つ葉を散らした吸い物椀を持って、テーブルに向かった寿は、父親に文句を言われる事を覚悟の上で、秘蔵の日本酒を出す気になっていた。

4

機嫌良く酔っぱらった橋本が、クッションを抱えるように寿を抱き込んでいる。
「……鬱陶しい……」
「あーやっぱり落ち着く」
「何がだよ」
「こうやって寿の作った飯を食って、憎まれ口を聞かされて……」
背後から、抱き付いた橋本が、肩に顔を擦り付けてくる。
「何甘えてんだよ！」
そう言いながらも、顔がにやけてしまう。
背中に大きな体で覆いかぶさられて、寿は力が抜けていくのを感じていた。
久しぶりの感触。
鬱陶しいおんぶお化けを背負っていた方が安心できるという事実が悲しい。
「京都で彼女作るとか言ってなかったっけ？」
「そのつもりだったんだけどな……。女に声を掛けられる度に、寿の顔がちらつくんだ」
答える橋本の声は、何だか、途方に暮れているように聞こえた。
「バカ言ってるよ、このオヤジは……」
くすくすと笑いながら、寿は橋本の腕を捕まえた。
あまりお目に掛かる事のない、筋肉のしっかり付いた厳(いか)つい腕だ。しかも、持久力の必要なスポーツをやっているだけあって、固いだけの筋肉ではない。脱力していると、中々感触がいいの

である。
当然ながら、女の柔らかい感触とは全然違う。それでも、抱き付き心地が好いなどと思ってしまうのは、問題なのだろうか。
もっとも、野郎の身体を染み染み触れる機会など滅多にない。父親は身長はひょろひょろと高いが、幅や厚みは余りないし、寿自身は筋肉質の身体どころか、身長の方もちょっとばかり悲しいサイズだ。
そのうち、橋本以外で確かめてみようか、などとつまらない探求心を育んでいるところで、突然、捕まえていた筈の腕が、寿の身体をぎゅっと抱き締める。
「何するんだよ……苦しいだろ」
文句を言っても、腕の力は緩まない。
せっかく抱き付き心地が好いなどと思ってやった腕が、がちがちの筋肉に変身してしまっている。
「だーかーらぁ」
少々身動ぐくらいでは、自由は取り戻せそうにない。
「なぁ、お前……」
「だから、なんだよ」
ほんの少しだけ、腕の力が緩んだ。
といっても、逃げ出すのは無理そうである。

「俺が京都で彼女作ってた方が良かったのか」
「へ？」
「宮子さんみたいに、大学生の子供を産むような、根性の座った女……」
「はぁ？」
子供が欲しいのだろうか。
そういえば、慶介の成長ぶりを嬉しげに報告していた。寿の生みの親が産んだ子供だから、確かに実の弟だ。気にならないといえば嘘だが、日々成長を報告されても楽しい筈もない。
それにしても、極論だ。
「それはあんま薦められないな。結局、親に養ってもらう事になるんだろ？　それとも大学やめて働いてもいいって思うような女、めっけた？」
なるべく、素っ気なく言う。
一瞬、体温が下がったような気がした。
それでも、声が震えなかったのは、日ごろの善行の賜物に違いない。こんな事で弱みを見せたら、橋本が頭に乗るのは目に見えていた。
本当にそんな女がいる訳ではないのだ。仮定の話をしているに過ぎないと判っているのに、まざまざと想像できてしまう。
将来有望な男を捕まえておくために、子供を産むぐらいの根性を持ち合わせた女もいるに違いない。

それだけの資産家の息子という事を今更のように思い出した寿は、密かに溜め息を吐いた。
「物凄く分別臭い言い方だな、それ……」
呆れているというより、寂しそうに聞こえるのは、寿の耳の迷いだろうか。
「だってよ、ウチの親父、未だにジジイに頭上がんないもん。学生でガキ作って、生活全部面倒見て貰って、挙げ句に離婚したとか言われてさ……。酔っぱらうと必ずぐだぐだ言うんだぜ」
「……そうか……。そうだよな……」
またぞろ顔を擦り付けてくる橋本は、明らかな意志を持って、耳に舌を這わせた。
「こら！　女をめっけるんだろ？」
「言ってみただけだよ」
セックスの相手とは考えないが、弟として付き合うと言い出すのだと思っていた。やたらと女の話を持ち出すのは、高校時代の気の迷いだったと宣言するためだと信じていたのだ。
どうやら、橋本の関心はまだ寿にあるらしい。
ほっとすると同時に、それを知られたくなくて、いささか乱暴に暴れる。
「やめろって！　何すんだよ」
「セックス」
「だーかーらー。女を探してんだろ？」
「お前は？」
耳元で囁かれる声。

厚い胸板と長身。フィールドで指示を出す橋本の声は、酷く響きがいい。そして、無条件に寿が頼ってしまいたくなる声でもあった。

声が耳に届くだけで、背筋を快感が駆け上がる。

「どうして電話に出なかったんだ？」

それなのに、急に酷く無粋な声が聞いてくる。

「何言ってんだよ」

「女を探してたのか？　中学の頃、結構遊んでたんだってな。鬱陶しい男がいなくなって、羽を伸ばしてたのか？」

バカだ。

前からバカじゃないかと思っていたが、ここまで酷いとは思わなかった。

寿など足元にも及ばないような成績を上げているし、それほど真剣に勉強していた訳でもないくせに、最難関をクリアしてしまうような男だが、高校時代の遊びの相手にここまで振り回されたら、やっぱりバカと言うしかない。

「息が詰まるんだよ。どうして毎日電話してくるのさ」

「心配だからだろ」

「は？　何が？　オトコめっけるって？」

「そうだな……。男もアリだろうな……。女だけとは限らないんだ……」

「何、しみじみ言ってんだよ！　バカじゃねーの。俺ぁ、ヤローと付き合う気はねーんだよ。雑

賀と引っ付いてたって何も感じないのに、今更ヤローなんか、寒気がするだろ！」
くすくす笑い始めた橋本は、太い腕を巻き付けてきた。
暖かい身体が背中を覆っている。その感覚が、寿を安心させた。
「……俺だけは特別か？　嫌じゃないだろ？」
「身体の相性はね……。それは認めてやるよ……」
認めるしかないだろう。
去年の夏から、ずっと続いている関係は、もうごまかしようがない。快感を分け合うパートナーだという事は認めてやる。
だが、精神まで依存している事は、絶対に知られたくなかった。
いつでも別れられる。いつでも義兄弟に戻れる。
それが、寿のぎりぎりの妥協だった。
「そうだよな。……身体の相性は最高だよな……」
鼻面を首筋に押し付けてきた橋本は、シャツの中に手を忍び込ませた。
「こらこら……」
「いいだろ？　相性はいいんだから……」
いつもながらの繰り言かと思っていたが、何か引っ掛かるものがあるらしい。肌をまさぐる手の執拗さに、寿は内心で溜め息を吐いた。
「さっさと済ませろよ。親父、帰ってくるんだから……」

身も蓋もない事を言ってやったつもりなのに、何故か橋本はくすくすと笑い出す。
「いいな。それ……。現場に踏み込まれたら、ごまかしようがないだろ。公認して貰えれば、浮気もできないよな」
「おい……」
ジーンズのジッパーが下ろされる。
忍び込んだ指が、熱を捕らえた。
「……確かに、身体の相性はいいみたいだな……」
「煩い。しょうがないだろ、あんたの声が……」
「バックからされる方が好きだよな……」
喉を震わせて笑いながら、耳に歯を立てる。
「……んっ……」
ぞくりと、身体の中で別の生き物が動いた。
一度目覚めてしまえば、橋本でなければ寝かし付けられない、始末の悪いもの。
普段は、その存在を意識する事もない。きっと、一生の間でも、無視し続ける事はできるだろう。可愛い女の子と付き合って、友人と莫迦騒ぎして。そうして奇麗さっぱり忘れていた方が幸せに違いない。
しかし、橋本でなければ眠らせられないそれは、橋本の声であっさりと目覚めもした。
「……ベッドまで運んでやろうか？」

「いい……。放せ…って……」
腕から逃れようと足掻く。
だが、身長で二十センチ以上、体重は三十キロ以上違う大男の腕は、びくともしなかった。
それどころか、左腕一本で軽々と抱え上げられる。
「ホテル行くか？」
「……ばか……」
荷物扱いだ。
腹に回した腕で寿を抱えて、平然と歩く男。
下手に暴れたら苦しいだけだと判っているので、腹を締め上げる腕が強くならないように、注意深く身体を預ける。
寿の部屋のドアを開けた橋本は、そのままベッドに倒れ込んだ。
強引な野郎だと罵る事もできずに、重い身体を受け止める。
他の男だったら、噛み付いてでも逃げ出すだろうに、橋本の手を待っている自分がいる。コンプレックスを抉るような体格も、自分に執着していると思えば愛しかった。
「寿……」
顔を覗き込む橋本は、目元にキスを落とした。
「どうしたんだよ……」
所詮はがっついたガキのセックスだ。

顔を見詰め合ったり、甘い雰囲気などとは無縁のはずだ。それなのに、触れ合った唇が想いを語っていた。

唇が外れ、大きく息を吐いた寿は、上目づかいに橋本を見た。

「……何？」

「久し振りだな」

「そう？」

一月を久し振りというかどうか。しかも毎日電話してきていたのだ。

確かに、ここ一週間ぐらいは声も聞いていないが。

「自分で脱いで……」

目の前で、にっと笑った男の目は、酷く真剣だった。

「何言ってんだか……」

「俺を誘ってくれ。……記憶をオカズにして、浮気は我慢してやるからさ……。本当だったら、ビデオとか撮りたいけど、それは嫌だろう？」

「エロビデオの代わり？」

「そうだよ……」

「なんだかな……」

呆れてしまう。

男の裸の記憶がオカズになる橋本に。そして、せいぜい煽ってやろうなどと考えてしまう自分

に。

橋本の鼻先に、音を立ててキスをした寿は、思い切りよくシャツを脱ぎ捨てた。ジッパーの開いたジーンズを足をばたつかせながら脱ぎ落とす。

「……色気がない……」

「勝手に脚色しろよ。想像だけなら、何してもいいぜ……」

ソックスを穿いた足を突き出してやる。

と、橋本はゆっくりとそれを抜き取った。

もう一方の足も。

ぴっちりとしたビキニパンツの前は、橋本の悪戯(いたずら)でもうその気になっている。恥ずかしげもなく、そんな姿を晒せるのは、相手が橋本だからだ。

その腰を浮かせて、物欲しげにくねらせて見せる。

「来てよ……。焦らさないで……」

ちらっと頭の隅を過ったＡＶ女優の真似をしてやる。

笑いを誘ったつもりだった。

だが、ごくりと喉を鳴らした橋本は、酷く狂暴な目付きで寿を見据えていた。

視線が熱い。目付きだけで焼き殺されそうに。

くるりと身体を捻った寿は、目を閉じて、尻を持ち上げた。

自分に欲情する橋本。



そう考えるだけで、身体がどんどん熱くなる。
背中を覆う身体。
ぴったりと重なる身体は、快感だけでない何かを寿に与えてくれるものだった。

5

「おったんじょーび、お、め、で、とー」
妙な節を付けて歌う雑賀は、酷く楽しげだ。
隣りに引っ付いている大男が不機嫌な顔をしているから、余計に楽しいに違いない。
何しろ、辺りかまわず誰でも恋敵（ライバル）視するのが、矢崎という男なのだ。当人にとっては嫌味としか思えないお誕生日パーティーでも、矢崎にしてみれば〝可愛い操チャンが他の男の誕生日を祝っている〟という事になるらしい。
橋本帝国を一瞬にして支配した矢崎に、こんな一面があると知ったら、全校生徒はどんな反応をするのだろう。
まぁ、今のところは、最後の切り札として、大事に保管しておくのが妥当だ。
もっとも、寿がいくら事実を告げても、誰も本気にしないかもしれないが。
信用度が違い過ぎるし……。何より、雑賀が怒り出しそうだ。
莫迦莫迦しい。

自分で考えて、自分で答えを出して、ついでにどっぷり落ち込む。
「何百面相してんのかな……？」
頭上から声が降ってくる。
背後に立っているのに何故見える、と突っ込もうとして、玄関の鏡に自分が映っているのに気付いた。
自分の頭の上に、橋本の顔が乗っている。
それを見た途端に、不意にムカついてきた。
第一、何故橋本の誕生日を杉本家で祝わなくてはならないのだろう。
不条理である。
そもそも、雑賀からの電話が振るっている。——橋本さんそこにいんでしょう？　今から行くね——ときたもんだ。
今更なのは判っていたが、当然のごとく言われてしまうと、何だか腹が立つ。
「杉本……あがんぞ」
誰も許可などしていないというのに、雑賀はさっさと上がり込んでくる。見目にそぐわぬ図々しさだ。
決して広くはない玄関先に、野郎が四人も集まっていると、狭苦しくて仕方がない。何しろ、お互いが背後に背負っている男が、日本人離れした体格なのだ。タテに長いのももちろんだが、思い切り肩幅が広くて、鬱陶しくて仕方がない。

挙げ句に、折角承服できない気分に浸っているというのに、誰も気付いてもくれないのだ。
「やっぱり付いてきたんですねぇ」
寿は態(わざ)とらしい溜め息と共に、投げ遣りな笑みを矢崎に向けた。
「お邪魔はしないよ」
――その邪魔ってのは何だ？――そう口に出す前に、頭上から声が降る。
「既に邪魔」
にやにやと笑っている顔が、鏡に映っていた。
「こんなとこで睨み合ってんじゃないよ。ほら、とっとと上がる」
まるで自分の家であるかのように、雑賀が大男たちに命じる。そして、大きな箱を寿の顔の真ん前に突き付けた。
「ほい、かーちゃんのお手製ケーキ。そんなの抱えてないで、これを受け取んなよ」
背後から肩を抱えていた腕が離れて、目の前に突き出されたケーキの箱が消える。
――そんなのって……やっぱ俺の事だよね？――
鬱陶しい大男から解放してくれようという親切なのだから、喜ぶべきなのだろう。もちろん。
それなのに、妙にムカつく。
「ケーキねぇ……」
「甘い物が食えないってのか？」
「食えない事はないが」

「いーんだよ。誕生日パーティーだってシルシだから。……杉本の好きなチョコだぜ」
「私の誕生日じゃないのか？」
文句を言いながら、声が楽しげなのが頂けない。
「細かい事言うなって。いーじゃん、弟の嗜好を優先させろっての。どうせずーっとここに居座って、ご飯食べさせてもらってんだろ？」
雑賀の背後の矢崎が目を見開く。
一瞬遅れて、喉を鳴らせて笑い始めた。
そうだった。
雑賀は何も知らないのだ。
かなり不味い場面を目撃された事もあるのだが、雑賀はまるで気付いていなかった。矢崎との関係を怪しまれながらも、冗談や噂話の域を出ないのは、雑賀本人が恋愛に疎いからだろう。
寿にべったりと貼り付く橋本の態度は、誰の目にも怪しいと思うのだが〝兄〟という名目があるだけで当たり前と思ってしまうらしい。
「……兄ちゃんに甘やかされてるもんなぁ……」
「え？　何が？」
まるで自覚のない雑賀が、目を大きく見開く。
その美少女の肩に腕を回した寿は、リビングに案内した。
「そういや、爺ちゃんちの草毟りするとか言ってなかったっけ？」

ソファーを無視して、絨毯に腰を降ろした雑賀の横に、当然の顔をして矢崎が座った。
「終わらせたんだよ」
橋本が手伝った。
というよりは、それを口実に逃げようとした寿の思惑を、手伝いという名目で台なしにしてくれたのだ。元々、大した仕事ではなかったし、直射日光にも肉体労働にも慣れた力持ちが加わると、半日で片付いてしまった。
お蔭で、父親から思い切りせびり取ろうと思っていた小遣いは、期待できそうもない。
「ひょっとして手伝わせたとか？」
「ちげーよ。普通、顔出したりできねぇだろ？　いい根性してると思わないか？　離婚したヨメの再婚相手んトコの息子だぜ」
「……そっかぁ。……だよな。で、どうしたん？」
「ヒマを持て余している先輩」
胸を張ってきっぱりと宣言する大男は、ゴールデンウィークの後半のスケジュールを空けてもらうためだなどと宣った。
どう理解したのかは知らないが、爺ィの機嫌が良くなったのは確かだ。
「じゃ、チケット、本当に頼む？　どこまで行ける？」
「もうちょっと待って。バイト増やすし」
「了解」

にっかりと笑った雑賀が、テーブルの中央にケーキの箱を据えた。
このまま、箱を睨んでいる訳にもいかなくて、取り敢えず聞いてみる。
「コーヒー？　紅茶？」
「どっちでもいいよ。橋本さんは何にすんの？」
「ビール。お前らはノンアルコールにしろよ」
前生徒会長の命令には、誰も逆らえない。同じ未成年でも、大学生という資格を手に入れた橋本は、大手を振って酒を飲めるのだ。
「じゃ、紅茶にするよ」
逆らう気もなくなって寿はのそのそと立ち上がった。
手早く紅茶を淹れて、ビールと一緒にトレイに載せる。
テーブルに戻った寿は、テーブルの真ん中で鎮座する物体を見て、思い切り顔を歪めた。
ザッハトルテだ。
しかも、思い切り本格的な、素っ気ないまでにデコレーションされていない茶色の塊である。
「げえぇぇ……。ザッハトルテじゃんか」
「え？　チョコレートケーキ好きなんだろ？」
「チョコレートクリームが好きなんだよ。真っ黒なスポンジは嫌いだ」
実は、結構期待していた。下手な店のケーキより、雑賀ママのケーキは美味なのだ。ショックは大きい。

「だって、これなら俺も食べれるんだもん。……ごめんねー」
さほど悪怯れた様子もなく、操が謝る。本心からではないのは見え見えだ。
「……俺の誕生日だっての忘れてないか？」
ぼそぼそと呟いた橋本にビールを突き付けた。
「おめでと」
「これがプレゼントか？」
「充分だろ」
紅茶を配った寿は、未練たらしくケーキを見詰めていた。
これが普通のスポンジのチョコレートクリームだったら、どんなに嬉しいだろう。
「けどさぁ、橋本さん、誕生日にこんなとこにいていいの？」
雑賀の唐突な科白に、全員の視線が集まる。今更、誕生日を祝って貰いたい歳でもないのだから、どこにいても不思議はないだろう。誕生日を口実に食事を作らせるというのは、よくある話だと思う。
しかし、だ。
「こんなところ……か？」
「だろ？　彼女んとこにいなくていいの？　矢崎のにーちゃんそっくりの彼女がいるんだろ？」
初耳だ。
「へぇ……。ひょっとして噂の美人のにーちゃん？」

「すっげキレーだぜ。にーちゃんの方は。おんなじ親から生まれたとは思えない。もう全っ然似てねぇの」
「ふーん……」
相槌を打ちながら、橋本の顔を眺めた。
ポーカーフェイスを装っていたが、どうも目が泳いでいる気がする。
矢崎も目を合わせようとしない。
――さてはマジだな――
現在進行形かどうかはともかく、そういう女がいる事だけは確実だ。
当然のような気もする。
だが、何となく気分が悪い。取り敢えず、現在進行形だったら、絶対に厭だった。
「そりゃ、初耳。いいのかなあ。……弟のとこで油なんか売ってて……振られちゃうよ」
女がいるのなら、とっとそっちに押し付けたい。そんな気持を込めて宣う。妙な、割り切れない気持を認めない為には、それしかなかった。
「とっくに別れた」
「ひょっとして、京都に行ったから？　やっぱ、遠距離の所為？」
興味津々という顔で、雑賀は尋問を続ける。
雑賀に悪気がないのは判っている。だが、いちいち寿の神経に障る事を喋っていた。
遠距離恋愛が難しいというのも、美人のカノジョがいたという事も、一つ一つはどうという事

はない話だ。それなのに、それを聞かされた自分が、いちいち反応してしまうという事実が厭だった。

「操……」

流石に不味いと思ったのか、矢崎が雑賀の肩を抱く。

「何すんだよ！　やめろよ！　鬱陶しいだろ！」

「他人の恋愛に首を突っ込むもんじゃない。それとも何か？　お前が後釜を狙ってるのか？」

「あ、それいいなぁ、橋本さん、まだカオが利くし、カノジョって事にしといたら、ラブレターとか減るかも……。聞いてよぉ、また変な手紙送り付けるヤツとか出てきたんだぜぇ」

くるくると表情の変わるカワイ子チャンは、矢崎を揶揄って遊んでいる。

だが、下らない冗談だと判っていても、寿の気持ちは沈んでいった。

「杉本？　どしたの？」

「何か食い物作るよ」

「えぇ？　本当にザッハトルテ食べらんないの？　マジで？　ごめぇん、訊けば良かった」

マジに謝る雑賀は、手伝うと言ってキッチンに付いてきた。

きっといいやつなのだ。雑賀の事を嫌うのは、よっぽど根性の曲がったヤツに違いない。

しかし、今の寿はその根性の曲がったやつに成り下がっていた。

「主役の相手してやってくれる？」

「いいけど……」



「矢崎さんを苛めるのが一番のプレゼントだと思うんだ」
「なんだかなぁ……」
眉を寄せた雑賀は、それでも楽しげにリビングに戻っていった。
やがて、楽しげな笑い声がキッチンに届く。
声をあげて笑う橋本。
オヤジを扱わせたら右に出る者がない雑賀は、人懐こい子猫のように可愛らしい喧嘩を売っているのだろう。
会話の内容が聞こえないだけに、余計に腹立たしい。
「けっ……。勝手に盛り上がってろってんだ……」
自分が口にした言葉に、妙に傷付いた気分になる。
きっと、橋本にとっても何よりのプレゼントに違いない。今更、料理に手を掛けてやる事もないだろう。
冷凍庫から取り出した五目寿司の種を、電子レンジに突っ込む。
酒と昆布を入れて炊飯器をセットすると、寿はリビングに戻っていった。

6

散々飲み食いした挙げ句、やってきた時以上に上機嫌な雑賀を連れて、矢崎が退散したのは、

午前零時を回った頃である。
「……良かったな……オヤジさんが帰ってくる前に帰ってくれて……」
どうやら、本気でほっとしているらしい橋本を、寿は訝しげに見上げた。
多分、最終的には酒盛りになってしまったからなのだろうが、元々雑賀に酒を勧めたのは橋本である。
「……なんか、将来の姿が見えたような気がするな……」
後輩に酒を強要する始末の悪い先輩、というやつだ。
「どんなだ？」
「一気飲みを強要して、殺人で訴えられるようなヤツ」
「お前なぁ……」
大袈裟な溜め息を吐いた橋本は、寿が洗った皿を手際よく拭いていった。
シンクの前に二人並んで洗い物をするというのも、いつの間にか、すっかり馴染んでしまったスタイルだ。寿の父親も、いささか複雑な関係にある橋本の事を寿の友人として認めている。
ひょっとすると、ボランティアの家庭教師と思っているかもしれない。
「それにしても、オヤジさん遅くないか？」
ちらりと時計を見遣った橋本が、ぼそぼそと呟く。
「デートだよ、デート。ひょっとすると、再婚すんじゃないの？　でっかい息子がいない事を祈るよ」

実際、これ以上兄弟は増えて欲しくない。
「可愛い妹って可能性は考えない訳だ」
「……可愛いねぇ……」
「まぁ、期待していて裏切られるのは厭だしな。何だったら、母親の方に付いたらどうだ？　そうしたら正真正銘兄弟になれるしな」
「何考えてんだよ」
「決まってるだろ。お前の事だ」
肩に回される腕。
大きな身体が、背中から覆い被さってくる。
「何すんだよ……。だいたい、オヤジが本当に女と付き合ってるのか、判んないんだぞ。どうして再婚なんて話になるんだよ」
別に父親に再婚して欲しくない訳ではない。いや、今の生活のリズムを崩されるのなら、嫌かもしれないが、深く考えた事などないというのが、正直なところだ。
確かにデートだと言って出掛けていったのは事実ではある。しかし、それも本当かどうか。
「お前が言い出したんだろう」
宥めるように、耳元で囁く。
熱い息を吹き込まれて、寿は首を竦めた。
「だから、やめろって……」

玄関のチャイムが鳴る。
「オヤジさんか？……」
渋々と、身体を離した橋本が、玄関に向かっていった。
手を拭いた寿が橋本に続いてリビングに出る。
と、矢崎が上がり込んでいた。
「え？　忘れ物？」
「大学やめたって本当ですか？」
図抜けた大男が、さらに一回り大きい男に詰め寄っている。
「……お前にしては、情報が遅いな」
「本当なんですか」
ついさっきまで、タメ口をきいて酒盛りをしていたくせに、真面目な話となると、敬語になってしまうのが、先輩後輩の間柄というものだろうか。
「来年から同級生だな」
思いきり嫌そうな顔をした矢崎は、ぎろりと寿を睨み付けた。
「知っていたのか？」
ぶんぶんと首を横に振る。
冗談じゃない。そんな恐ろしい事を聞き込んだら、母親に告げ口するとか、教師に御注進するとか、とにかく思い留まらせようとはした筈だ。

「岡崎さんが喜んでましたよ。また一緒にフィールドに立てるって……。あんまり嬉しくて、俺にまで知らせてくれたみたいですね」

敬語とは、威圧感のある言葉だったらしい。喧嘩腰のヨタった言葉より、よほど怖かった。

――なんで、こんな場所で――

そう言いたいところを必死で堪えて、さっさと終わってくれと内心で祈る。

橋本が大学を辞めたというのは、確かにインパクトのあるニュースだが、矢崎に怒鳴り込まれて聞く事ではない筈だ。

「ったく……。今から教えて、びっくりさせる筈だったのに……何が悲しくて、お前に怒鳴り込まれてバラされんといかんのだ？」

ちらりと矢崎を睨め付けた橋本が、ぼやくように呟く。

それが、また怖い。

やはり、びっくりさせる相手とは自分の事だろう。バラされてしまった橋本が、何を言い出すか。この後、どんな不条理な事を言われるのかと思うと、矢崎を恨みたくなる。

この際、二人ともここから退去していただくのが賢明だろうか。

何か口実はないかと考えていると、雑賀の姿がない事に気付いた。

「……それより、矢崎さん。雑賀はどうしたんだよ。放り出してきたのか？」

橋本が溜め息を吐くのが聞こえる。

「なんだよ」

胡乱に見上げた寿に、橋本は玄関の方を顎で示した。
眉を顰め、玄関先に向かう。
「嘘だろ？　何考えてんだよ……全く」
玄関の上がり口に転がった物体に、思わず呆れ声が漏れる。
「雑賀！　こら、こんなとこで寝るなバカ！」
声を掛けたくらいではぴくりとも動かない。
出ていった時には上機嫌なだけだったのに、引き返してきたら、泥酔のお父さん状態だ。これで、手に寿司折りでも持っていたら完璧だろう。
「あーあ」
いくら嘆いても、誰も手助けに来ないところが嫌である。普段なら、近付く者総てを警戒する矢崎が、雑賀を放っておくほどの事態という事だ。
橋本が京都の大学をやめたというのは、そんなに重大な事件なのだろうか。
もちろん、寿には一大事だが、矢崎がこの状態の雑賀を連れて怒鳴り込んでくるというのが、よく判らない。それとも、他に理由があるのだろうか。もやもやとした想いが渦巻いている。
首を捻りながらも、雑賀をここに放置する訳にもいかず、雑賀の身体を引き起こした。
力の入らない首が、ふらふらと揺れ動いている。
「マジかよ。……おい、雑賀。大丈夫か」
むにゃむにゃと訳の判らない言葉を呟いた雑賀が、うっすらと目を開けた。

どうやら、意識はあるらしい。
と、とろりと蕩けそうな笑みが浮かぶ。
「……おい……」
美少女風の外見を裏切って、中身は悲しくなるほどただのヤローだと判っている。押し倒したいなどと思うのは、友達に対する裏切り行為に違いない。
それでも寿は、一瞬、目眩いを覚えてしまった。
「雑賀ぁ。こんなとこで寝るなよ。ベッドまで引き摺ってくぞ」
「……眠い……」
ぺたりと、二つ折りになった雑賀が、そのまま眠り込む。
「おいおい。どうすんだよ……。起きろよ……」
身体が柔らかいと誉めてやるべきか、ひょっとしたら猫の遺伝子が混ざっているんじゃないかと疑うべきか。
ぐんにゃりと脱力した身体は、今まで運んだ事のある酔っぱらいの中でも、特筆すべき扱い辛さだった。
「会長！　現役の方の！　雑賀運んでくださいよ」
何事か、ぼそぼそと話し合っていた大男たちが、雁首揃えて現われる。
「これ、お願いします」
苦笑を浮かべた矢崎は、それでも文句も言わずに雑賀を抱き上げた。完全に脱力した酔っぱら

いを、軽々と運ぶ。
ちょっと悔しくなるような力だ。
その悔しさも手伝ったのか、雑賀を構っている間は紛れていたもやもやが、復活してくる。
「俺の部屋へ運んでください。でっかい人たちはここで寝てくれますか。……あ、帰ってもいいですよ。雑賀の面倒はちゃんと見ますから」
なるだけ素っ気なく言ったつもりだった。
大学をやめるなどという重大事を、一言も相談して貰えなかったという事に無性に腹が立つ。
実際、相談されても困るのは目に見えていたが、その情報を赤の他人から聞かされたという事実がムカつくのだ。
公言している〝義理の弟〟でも、本人がしつこく主張している〝恋人〟であっても、事前に相談はしないまでも、誰より早く打ち明けるぐらいの事はしても良かった筈だ。
それとも、チームのメンバーの方がウエイトが大きいのだろうか。
「矢崎。雑賀はここに寝かせてくれ。毛布を持ってこよう」
ソファーを示す橋本は、わが物顔に命じた。
「何だよ、それ！」
「夜中に抱き付かれたいのかな？　操チャンは、隣りにいるのは矢崎だと信じてるよ。――酔っぱらった操チャンに迫られたら、お断わりできるかな？」
「バカ言うんじゃねぇよ！　このスケベ親父！　あんたこそ雑賀を狙ってんじゃねぇのか？」

「その気はない。だが、迫られたら、どうなるか判ったものじゃない」
何を下らない事を自信たっぷりに宣言しているのか。
ばかばかしい。
莫迦莫迦しいが、リビングに雑賀と矢崎。寿の部屋に橋本というのが、穏便な配置らしい。
「……ここで変な事すんなよ。親父がいつ帰ってくるか判んないんだからな！」
まさかそこまで節操ナシだとは思わないが、一応釘を刺しておく。何しろ、武道館の武具部屋で堂々と抱き合っていたような恥知らずなのだ。他人の家でえっちぐらいするかもしれない。
まぁ、九分九厘、父親は帰ってこないと思うが、そんな事は教えてやらない。矢崎にはもちろん、橋本にも、だ。
「放っておけ。……ほら、毛布だ。布団もいるか？」
わが物顔で動き回る橋本は、父親の部屋のクローゼットから、予備の毛布を持ち出してきた。
「結構です」
にっこりと笑った矢崎が、雑賀をソファーに横たえた。
「……じゃあ、お休み」
でかい男が肩を抱いて、寿を部屋に向かわせる。
「こら待ておっさん！　てめーは帰れよ！」
「車なのに？　酒も入ってるんだぞ」
「知るかよ。タクシーでも使えば？　いっそマラソンてのもいいんじゃねぇか？　どうせアメフ

トやるんだろ？　鍛えろよ」
何より大事なアメリカンフットボールの為に、京都大学を選んだ筈だ。その大学をさっさとリタイアするからには、よほどの理由があるに違いない。
だが、それを聞いてやる気にはならなかった。
「帰れよ！」
「話を聞いてくれ……」
耳にキスをする橋本は、後ろ手で部屋のドアを閉めた。
「だから！　帰れって！」
語気を荒らげても、橋本は大人しく聞き入れてはくれないらしい。
「聞いてくれって言ってるだろう」
「何を？　天下の京大をおん出て、来年からウチの大学入るんだろ。……これだけ聞かされれば充分だ」
纏わり付く腕を邪険に振り払って、クロゼットに向かう。
「ホントに察しがいい」
「そりゃどうも」
「そういう頭の回転が早いとこも好きだよ」
――バカか。あれだけ聞いて判らない訳ないだろうが――
いくらおだてられても、毎度の事ではありがたみも何もない。

「てことは、もういいんだろ？　だったら、さっさと帰ってくれよ」
ほとんど泣きを入れる気分で、言い募る。
腹を立てているのももちろんだが、酔っぱらった橋本と同じ部屋で眠りたくないのだ。
何しろ、ほろ酔い加減の橋本は危なすぎる。大人しく眠ってくれる筈がなかった。
隣のリビングに人がいないのであれば、別に構わない。父親が今夜帰ってこないだろう事を密かに喜んでいたのは、他ならぬ寿なのである。
もちろん、死んでも、橋本に教えてやるつもりはなかったが。
「ダーメ。話を聞いてくれるまで、帰らない」
クロゼットから、タオルを引っ張り出したところで、無理やり橋本の方に向き直される。
「判ったよ。聞いてやるから、放せって」
必死に厚い胸に腕を突っ張りながら、取り敢えず訴える。
「よし！」
何が〝よし〟なのか知らないが、どうにか解放はしてもらえた。
代わりにベッドの上に座らされる。
「聞いてやるから、あんたは床ね。……ここに上がっちゃ駄目！」
「判った。判った」
どうしてだか上機嫌に応じた橋本が、カーペットの上に座り込む。
そんなに何を話したいのだろう。

ろくでもない事だったら、この家から叩き出してやる。
最初はほんの些細な蟠りでしかなかったものが、言い訳がましく言い募られればられるほど、本当の怒りにすり変わっていくようだ。
「……京都にはお前がいない……」
「はぁ？」
何をすっ惚けているのだろうか、この男は。
「何を今更……。いるわきゃねぇだろ。それとも何か？　俺のそっくりさんでも見付けるつもりだったんか？」
「ゴールデンウィークまで待てば会えると思って、我慢していたんだ」
「だから、押し掛けてきたんだろうが。ガキがいると眠れないとかゴネて、親父まで丸め込んで。こんだけ引っ付いててまだ文句があるのか？」
「ないよ。……ただ……考えていた以上に一月が長かっただけだ……」
ずい、と腰をずらした橋本が、寿の足を抱き締めた。そのまま膝に頬を押し当てる。
ゆっくりと脹ら脛を撫でる男は、甘えているつもりなのだろうか。
こういう事をされると困る。鬱陶しい大男の頭を撫でてやりたくなるのだ。
「だからって大学をやめたって？　たったそれだけの理由で？　……そう言えば、俺がほだされるとでも思った？」
無言で、脚を撫で続ける橋本は、深い呼吸を繰り返していた。

「遠距離恋愛も面白いなんて腐った事言ってなかったっけ？　寂しくなったら会いに来いとか宣ってたよな……」

大学は関西に来いとまで言っていた。

それなのに、たかが一月で我慢できなくなったというのだ。

恐らく、本当だろう。

辛抱の足らないヤツだとあざ笑ってやればいい。モテないストーカー野郎みたいだと、バカにしてやってもいい。

だが、何者にも替え難いほど離れたくなかったと言われれば、嬉しくない筈がなかった。

ぎこちなく、髪を撫でる。

膝に載った頭が、ほっと溜め息を吐いた。

「……なーにバカ言ってんだか。本当はコンビニ弁当に飽きただけだろ。料理もろくに作れないくせに一人暮らしなんかしようってのが間違ってんだよ」

憎まれ口を叩く。

だが、甘ったるい声だという事は、自分でも判っていた。

寿の想いを、言葉に出して教えてやる気はない。それでもきっとばれているだろう。それぐらい、橋本の存在は大きかった。

「ほら、にーちゃん。他の人には黙っててやるから、本当の事を喋っちゃいな。ホームシックだろ？　慶介に会いたかったんじゃねーの？　年の離れた弟ってのは、めちゃくちゃ可愛いみたい

だしさ。恥ずかしがることねーじゃん」
それでも、認めたくない。
自分の気持も、何もかも放り出してしまうような橋本の想いも。
再び、溜め息が膝に掛かった。
「……鈴木がいたんだ……」
「へ？　鈴木？　誰？　それ」
「超高校級って言われたQB。二年上だが……」
余りにも唐突な話の展開に、寿は瞬きを繰り返した。
身体を起こした橋本が、宙で止まったままの手を捕まえる。
「二年浪人したらしい」
「まぁ、一浪二浪は当たり前のガッコだし……。あんたみたいにストレートで入るやつより親しみやすいってぐらいで……」
何を言うべきか迷った挙げ句に、口を突いて出たのは、そんな間抜けな言葉だった。
「アメリカに行ったっていう噂もあったぐらいなんだ。……身体を壊したとか、引退したとかいう話もあったぐらい、奇麗さっぱり鳴りを潜めていたんだよ」
「まぁ、国立じゃスポーツ推薦もないし、大変だよね」
「……お前、鈴木の味方をするのか？」
何で、そうなるのだろう。

こいつの脳味噌の回路は、やっぱりいつまで経っても理解できない。
まぁ、一つははっきりとした。鈴木某なる人物が、橋本より格上のQBらしい。大抵の事を人並み以上にこなし、何でも思い通りにしてしまう橋本にも、儘ならない事はあったようだ。
そんな子供のような事で拗ねる橋本は、困った事にやっぱり可愛い。
脳味噌が発酵してしまいそうだ、と思いながらも、衝動に近い感情は押さえようがなかった。
橋本の腐った思考回路に同調してしまいそうで嫌だ。
「まさか。……翔峰でアメフトやんだろ？　ま、頑張って一部に上がってください。このままじゃ、どんなにライバル視してても、絶対対戦できないじゃんか。……それくらいなら、同じチームでポジション争いしろっての」
嫌そうに眉を寄せた橋本が寿の腕を引く。
一動作で腕に抱き取られた寿は、次の瞬間、キスされていた。
軽い、啄ばむようなキスを受けながら、腕の中から逃げ出そうとする意志が萎えていくのを意識する。
こうやって、流されていくのだ。
思わず溜め息を吐くと、橋本の動きがぴたりと止まる。
「……溜め息より、色っぽい声が聞きたい……」
「バーカ……」
これ以上なく、色気のない声を聞かせてやる。

眉を顰めた橋本が、それ以上憎まれ口を叩けないように、唇を塞いだ。
何の躊躇いもなく進入してきた舌が、遠慮なく口腔を探る。
男のベロの味など一生知りたくなかった。
だが、今となっては逆らう気も起こらないほど、慣らされてしまっているのが悲しい。
「……んっ……」
くぐもった声は、自分でも恥ずかしくなるほど物欲しげだった。
「……だめだって……。隣りにいるし……」
「酔っぱらってる」
「矢崎さんもいるだろ」
「ほっとけ。どうせ知ってる」
「バ！」
力は橋本の口に吸い取られた。
「んん……っ。ん……」
必死に身体を捩る。
だが、二十センチ以上の身長差、五割増しの体重差は、如何ともしがたかった。
単なるデブではないあたりが厭だ。重さは充分デブなのに、体脂肪率はヒトケタなのだ。ほとんど全部筋肉なのだから、寿ごときが逆らえる筈がない。
「……いや……だって……」

ちょっと逆らっただけで、息が上がってしまう。
「噛み付いてもいいから……」
言いながら肩に顔を伏せさせた橋本は、寿をしっかりと抱きすくめた。
噛み付いたら歯が浮きそうな、がっしりとした肩。シャツごしに、軽く歯を立てた寿は、すぐに身体を剝がされた。
「何だよ……」
「ちょっと待て……」
慌ただしくシャツを脱いだ橋本は、手早く寿のTシャツを引き剝がした。
「やめろって！　……マジ、やめよう」
橋本の手に逆らいながら、声を殺して叫ぶ。
どうしても厭なら、大声を出せばいい。助けてくれと叫べば、矢崎は来てくれるだろう。
だが、寿は身を捩るだけだった。
ベッドに押し付けられて、下着ごとジーンズを引き抜かれる。そして、ずっしりと重い身体が伸し掛かってきた。
脂肪だろうが筋肉だろうが、重い事には変わりはない。
それなのに背中を覆う熱と重さに、安心してしまうのは、何故だろう。
「やめ……」
口に指が差し込まれる。



「嚙んでいい……」
そう言われても、嚙める筈がなかった。
二本になった指を吸う。舌を絡めて軽く歯を立てる。
「あぁっ……」
声が舞い上がる。
「しっ……。聞かれたくないんだろ……」
だったらやめろと言いたい。だが、口に捩じ込まれた指は、言葉を奪っていた。
そろりと後ろに忍び込んだ指が、悪戯を始める。
肩を舐める舌が、上下の口で蠢く指が、寿の理性を奪ってゆく。
「あ……あぁぁ……」
声など押さえられる訳がない。
昨日も、一昨日も抱かれたのに、まだ寿は満足していなかったのだ。セックスに餓えていた訳ではない。だが、人肌が恋しかったと、思い知らされる。
人と楽に付き合うための距離を学んだ寿の苦労など気付きもせずに、全身で縋り付いてもいい人間がいるのだと、教え込んだのが橋本だった。
寿だけが執着している訳ではない。図抜けた体軀を誇る男も、寿が欲しくて、熱い息を漏らしているのだ。
「寿……とし……。とし…なが……」

耳を噛む唇。ねっとりと舐める舌。
寿の唾で濡れた指が、胸の飾りを摘み上げた。
「はあっ……」
勝手に反応する身体が、忍び込んだ指を締め付け、その感触にさらに快感を煽られた。
ひくひくと痙攣する孔は、橋本を欲しがって舌なめずりしているようだ。
逃げていく指を捉えようとするが、揶揄うように往復した長い指は、寿から逃げていった。
「やだっ……。悠介っ……悠介……」
「大丈夫だ。どこにも行かない……」
ずん、と、重い衝撃が襲い掛かる。
熱い牡が寿を満たす。
「二度と離れない……」
「うん……」
頷くしかない。
帰ってきて欲しかったのは寿だ。いつでも傍にいて欲しかったのも寿だ。
鬱陶しいぐらい、引っ付いていて欲しい。いつでも欲しがっていてくれなければ厭だ。
「とし……寿っ……」
捻り込むように、打ち込んでくる身体に、呼吸を合わせる。
枕を摑む手を捕まれて、獣の息遣いが耳をくすぐる。

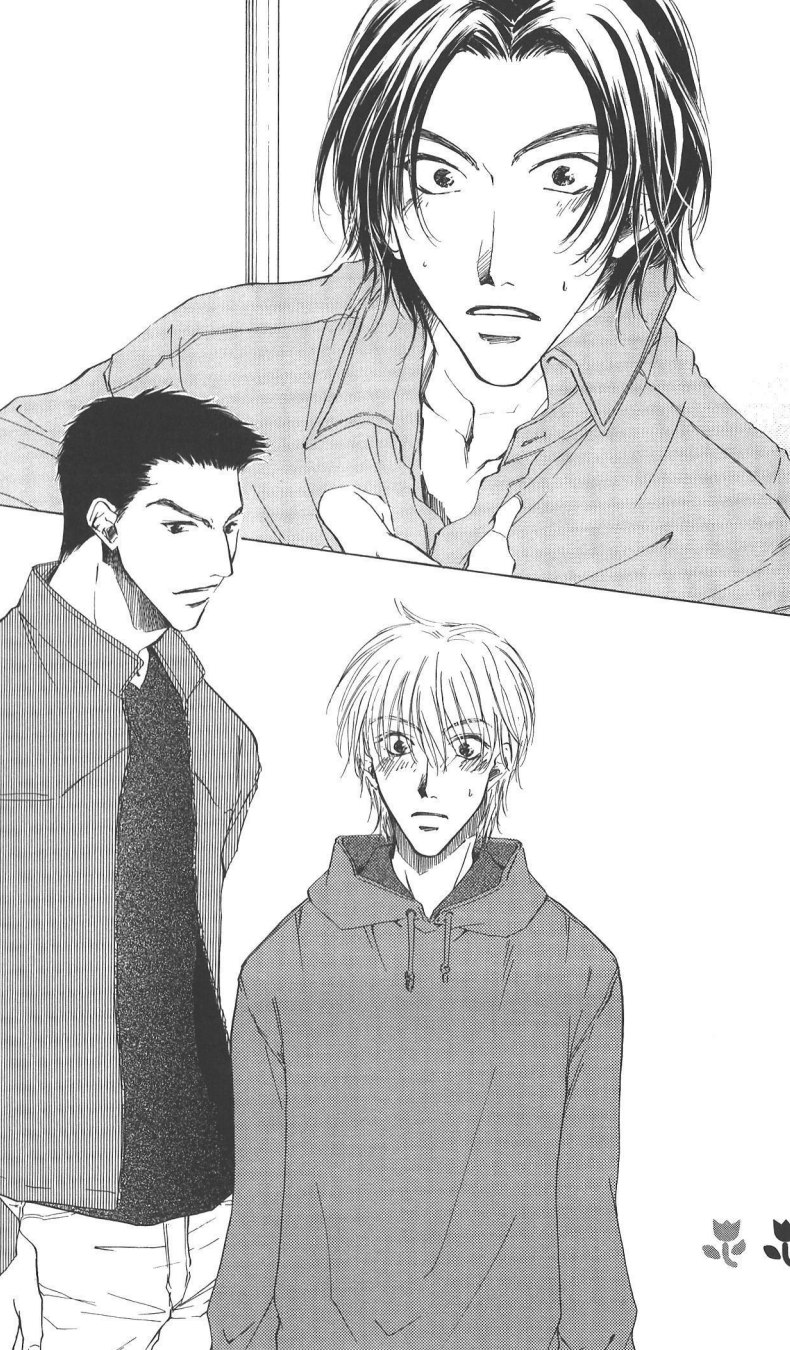
「あっあっあっ……」
喉から零れ落ちる声は、止めようがない。
「うっ……」
獣の喉からも、唸り声が漏れてくる。
それが嬉しい。
寿は、声を殺す事も忘れていた。

7

ベッドのヘッドボードに寄り掛かった橋本を座椅子代わりにして、寿は息を調えていた。
本当なら、シャワーでも使いたいのだが、隣に矢崎たちがいる事は忘れていなかった。正確にいえば、思い出したのだ。
「寿……」
耳にキスする橋本は、まだ満足していないらしい。汗の滲んだ身体を拭いてくれるタオルの動きは、粘っこいものがあった。
「やめろよな」
邪険に言い放っても、橋本の甘ったるい声音には変化がなかった。
「今更……。一度聞かせてやったんだ、もう一回も二回も同じだろう」

判っていてやってるのは間違いない。矢崎への嫌がらせか、寿への意地悪かは知らないが。
「バカ言ってんじゃない。蹴り出すぞ」
矢崎と顔を合わせたくないからシャワーを我慢しているのだ。
隣室に友人がいると判ってるのに我慢できなくて、えっちしてしまったというだけで充分みっともないのに、これ以上恥を晒す気などない。
「冷たいな……」
「何がっ！　どうせずっとヒマこいてんだろ？」
「いや。大学の方で練習に参加させてもらう事になっているから、そう暇でもないが……。もちろん、寿とデートする時間は確保するよ」
「バカか！」
肩にキスをした橋本が、胸に手を這わす。ただ撫でるだけでも、小さな突起に指が引っ掛かる。先程まで熱くなっていた身体は、それだけで背筋を快感が駆け上がった。
「やめろって」
腕から逃れる。
「……いいだろ？　来いよ……」
ベッドに伸びたままの橋本は、目覚めた牡を隠そうともしなかった。
ごくりと喉が鳴る。
寿にしても、満足した訳ではないのだ。

「バカ！」
ガウン代わりに、橋本の巨大なシャツに袖を通す。
ばっとドアを開けた寿は、その場で凍り付いた。
矢崎の軽蔑の眼差しなら、覚悟していた。隣りに可愛い恋人がいるのに、手出しできない矢崎が怒りに燃えているなどというのも、考えられる事だ。
だが、目を丸くした雑賀の姿など、想像もしていなかった。
「……あ……」
「お盛んな事で……。俺に釘を刺しといて、この仕打ちか？」
雑賀に手を伸ばした矢崎は、思い切り引っぱたかれて顔を歪めた。
やっぱり、矢崎への嫌がらせだろうと確信したものの、今更判っても、もう遅い。
「……ゴメン雑賀……。嘘ついてた……」
言い訳など少しも思い浮かばなくて、何より先に謝ってしまう。
「……あ……いや……。……うん……」
酔いもすっかり醒めたらしい雑賀は、口籠もって俯いた。全く、想像もしていなかったのだろう。元々、恋愛感情には鈍い雑賀は、義理の兄弟だと説明された通りに信じ込んでいたようだ。
「操……いいだろ？」
唇を寄せる矢崎の顔を、雑賀が思い切り引っ叩たく。
「俺の方こそ、ゴメン！　帰るから……。ごめん。邪魔しちゃって……」



ああ。やっぱり可愛い。
あのクソオヤジに惚れていなければ、雑賀を口説いていたかもしれない。そんな事を考えてしまうぐらい、頬を赤くした雑賀は可愛かった。
「いいよ。泊まってって。……ちょっと待って、シャワーしたら、夜食作るし……」
「いいよ、悪いし……」
言い募る雑賀にひらひらと手を振って、バスルームに向かう。
きちんと挨拶しなければ帰る事もできない雑賀の性格を考えての行動だ。
いきなり、親友のベッドシーンを聞かされた雑賀には悪いと思うが、寿自身も、見せ付けられた事があるのだ。
そのどちらもが橋本の陰謀かもしれないと思うと腹が立つが、ヤツへの復讐は、別の機会に取っておこう。何しろ、チャンスはいくらでもある。
今は、雑賀の御機嫌を取る事の方が大事だ。
「…やっぱエサだよな……」
何を作ってやったら喜ぶか。
冷蔵庫の中身を思い起こしながら、寿は手早くシャワーを浴びた。

あとがき

最近、ガーデニングに嵌まってる新田です。

いやー。あんまりお金が掛からないトコがいいよねー。

今まで、色んな趣味に嵌まってきたけどこれが一番金が掛からん。ガーデニングって言っても、ハーブとかだから、あんまり失敗がないしね。

いや、どうでもいい事なんですけど……。

そう言えば、この間、昔からの友人と久しぶりに電話で話してて、新しいパソコンが欲しくなったんだよね。……単純でシンプルなヤツをカスタムで組もうかなーなんて話してて……あれー、そういやこの頃、パソコン欲しい病が治まってたなぁ……なんて気付いちゃった。なんでだろ——とか言ったら、里見が横から、そりゃ、車買ってからだよ、だと。

そっか、言えてるかも、車の方が大事やもんねー。

結構、のめり込むタイプだからなぁ。どうやら、一度に一種類って言うのがお約束みたい。

夏が来ると、車のラジエターが変えたくなるんだけど、それに、今年はシートをフルバケットに変えようかな、なんてアホなコト言ってるし。言ってるだけだけど……。ま、確かにパソコンどころじゃないやぁね。

なんだか、異常に仕事が立て込んでて、ちょっと切れかかってるし……。

いや、これは本当。だって、ＦＦⅨ買うだけかって、封印してるくらいだし、折角買ったプレステ2も、まだテレビに繋いでないくらいだもん。ま、プレステ2に関しては、繁いだところで専用ソフトはなんにもないんだけどね。

なんか、やってる事が、中途半端って言うか、行き当たりばったりって言うかぁ……。

あ……遊びてー！

何か虚しい、遠吠えだったような。聞かなかった事にしてくれ。

実は、あとがきが十頁くらいあると言われて、ちょっと、我を失っているんだよん。

どうしましょう。

病気自慢シリーズは、流石にネタが尽きたし、なぁ。

取り敢えず、今回の書下ろしについて一言言っとこうか。またもや、本本コンビ。だって、こいつら可愛いんだもん。リクエストもあったしさぁ。

情緒もへったくれもないけど、そこがまたね。もしかして、この人たちが一番本能に忠実なのかも……。楽しーやねぇ。

まぁ、中身の方は……あとがきから読むヒトの為に、内緒にしておきましょう。ほほほ……。

そういや、番外編てのを書くのは、もしかして、商業誌では初めてかもしれない。新鮮だ。

て、もう、書く事ないじゃん。

しょうがないなぁ。と、言うワケで、反則技出しちゃおうかな。

あーあ、あとがきを書く才能が欲しいぜ。

ヒミツの会長

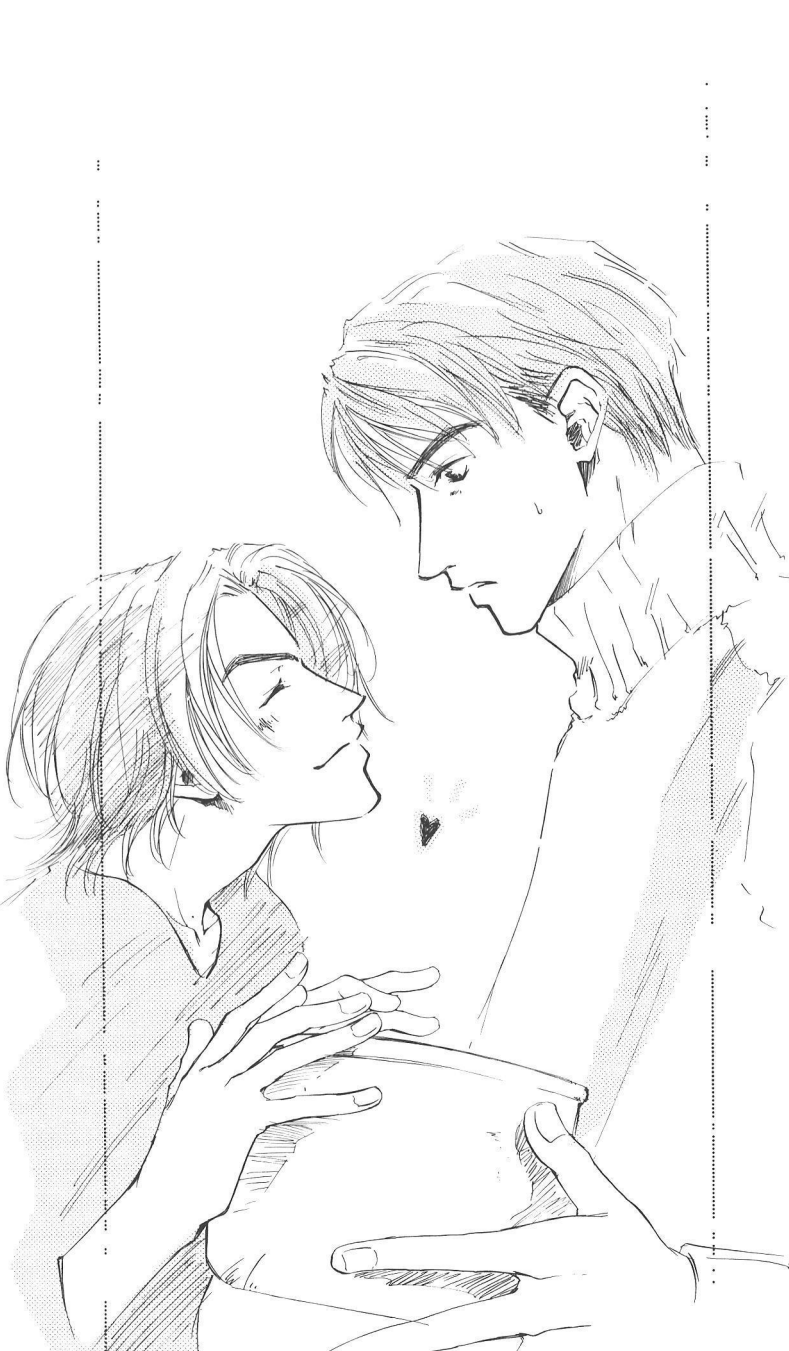
「なぁ……。これ、その内人間になんのか？」
「失礼な。ちょっと見ないぐらい整った顔だって、看護婦さんに保証されてたぞ。絶対ハンサムになるってな……」
「これが？」
何が楽しいんだ、こんなもの、としか言いようのない、赤剝けのサルの写真を見せられて、寿は思い切り顔を顰めた。まぁ、これがいずれヒトになる事は、寿も良く知っている。何しろ―。何が厭だと言って、自分の子供の頃にそっくりなのが、最低だ。
あの、根性の座った母親の遺伝子は、やはり根性が座っていたという事か。
「手足も大きいし、デカくなるって言われたよ」
それがどうした。俺よりデカくなったら、殴ってやる。
慶介は正真正銘の兄弟なのだから、ちょっと張り倒すぐらいは許される筈だ。
だいたい、言われるだけなら、寿だってそう言われたと聞いた。父親も長身だし、母親も背は高い方だから、そう言われただけだと信じている。
「……こいつ、俺のガキの頃と、同じ顔してるぜ」
なるたけドスの効いた声で言ってやる。

「え？」
巨大な男は、眉を寄せて、まじまじと寿を眺めた。
親友（マブダチ）の雑賀操に言わせると〝アニメの軍人〟な男の顔が、奇妙な具合に歪んで行く。まるで化け物でも見たかのような顔だ。
「…あんたのガタイに俺の顔を乗せて見ただろ……」
それはそれは気持が悪いだろう。
「絶対可愛くないな」
「どっちにしろ、可愛かないだろ」
あっさりと言ってやる。
「久しぶりに会ったのに、どうしてそう冷たいかなぁ……」
入試のために、京都に行っていたのだ。帰ると同時に、押しかけて来た橋本は、どうした訳か生まれたばかりの弟の写真まで持ってきた。
「ついでにしばらく京都見物すりゃいいのに」
「そうもいかないだろう。一応、授業は出ないと……」
「は？　授業？」
妙な事を聞いたような気になって、寿は橋本の顔を覗き込んだ。
「そう。授業」
「授業なんてないだろ。聞いた事ないぞ、そんなの……」

いくら、ほとんどの生徒が翔峰大学に進学するとはいえ、一応高校三年生なのだ。普通は三学期は授業はないだろうし、ましてや、残すイベントは卒業式だけという時期になって、授業と言うのは、ちょっと信じられなかった。
「内部進学の連中はもう終わってるんだがな……」
「何の授業？　そんなのあるの？」
「家庭科」
「家庭科ぁ？」
素っ頓狂な声を上げた寿は、目の前の男を頭からじろじろと眺め下ろした。
「飯を炊いて、味噌汁作って。後、ボタン付け」
「……確かに、家庭科だ……」
必要最低限の。
小学生の頃、それぐらいの事はやったと思うが、大抵の連中は忘れているのだろう。
一人暮らしを始めるタイミングを見はからって、もう一度基礎の基礎を教えると言うのは、如何にも翔峰学園のオヤダマ達が考えそうな事だった。
「そういやジジイの頃は、薪割りとかまど作りもやったって言ってたな……」
「……そう言えば、寿の爺様は翔峰の卒業生だったな」
「そうそう。お陰で、翔峰に放り込まれた。……全くいい迷惑だぜ」
「じゃあ、感謝しなくちゃな。……これから、お爺様と呼ぼう」

何を感謝するのだとは、聞きたくない。
ふいと、その場から立ち上がった寿の手を、橋本が捕らえた。
「何だよ」
凄んで見せたのに、橋本は何も言わずに引き寄せようとする。
「まぁまぁ」
何がまぁまぁなのか知らないが、睨み付けてやっても、橋本の手は離れようとしない。無理やりに自分の膝に座らせられて、挙げ句、すりすりと頬擦りまでされる。
「放せよ。……飯が喰いたいんだろ？」
「いや……別に飯じゃなくてもいいよ」
何をＡＶみたいなこと言ってやがる、だ。
が、このまま膝抱きにされていたら、先の展開は目に見えている。絶対厭だ、とは言わないが。
胸の辺りに回ってきた太い二本の腕を摑むと、思い切り押し広げて、すっくと立ち上がる。
「そうだ！　家庭科実習しよう！」
「は？」
くるりと向き直って、改めて右の手首を摑み、巨大な男を引っ立てるように立たせた。
「家庭科実習……て」
「飯炊いて、味噌汁作って……おかずは何にしようかなー」
「かんべんしてよ。……今更……」

言いながらも手を引かれるままに、キッチンまで付いてくる。
「美味しいご飯食べさせてくれたら、今日はスペシャルサービスしちゃうんだけどな」
大きな手に、炊飯器の内釜を手渡しながら、にっこりと笑い掛ける。
「サービス？」
「そ……。でも一人で作るんだよ」
僅かに俯いた橋本の口元に、伸び上がってキスしてやる。
「ホントだな!?」
背中に浴びせられる念を押す声が、なんだか情けなく聞こえて、寿はクスリと笑った。
キッチンのドア框のところで振り向いて、結構真剣な顔で内釜を睨んでいる橋本に声を掛ける。
「なんなら、派手な看板のホテル行く？」
顔を振り向けた橋本に左目を瞑って見せると、投げキッスまでおまけに付けてやる。
橋本が本当にマジな表情になった。
父親が再婚するまで橋本が朝食を作っていた事は知っている。少なくとも、食えないものは作らないと思う。冷蔵庫の中にはどういう組み合わせにしても何品か作れるくらいの食材は入っているし、料理をしている寿を日頃から観察している橋本だ。なんとか、形にするに違いない。
――なんかヤバいコト言った？――
自問自答しながら、リビングに戻った寿は、ソファーに落ちていた写真を拾い上げた。
見れば見るほど、自分の生まれたばかりの頃にそっくりだ。



不意に思い付いて、サイドボードに近付く。アルバムが並んだ一角から、一番分厚いそれを抜き取った。
表紙を開き、薄紙を一枚捲ると、早速問題の写真が引き伸ばされて張り付けられている。
「やっぱり似てる……」
似ているどころか、同じ写真だと言われても信じるかもしれない。
それとも、赤ん坊なんてのは、みんな同じ顔をしているのだろうか。妙な気分になりながら、アルバムを閉じると、元の場所に戻した。
本当に同じ顔に育ったら、少し不気味だ。
「なぁ、鍋でもいいか？」
カウンター越しに橋本が聞いてくる。
どうやら、橋本は冷蔵庫の中の水炊きの材料に目を付けたらしい。
「だーめ。それは明日オヤジと食べる」
「食いたいなー」
「……どうせ、ウチで喰うんだろ？　鍋は食べるヤツが全員いないとダメじゃん」
言った途端に、橋本が破顔する。
「私も頭数か……」
橋本が頭数に入っていなかった事があるかと聞きたい。
「さっさと作れよ。……オヤジが帰ってきたら、全部チャラだぞ」

はっきり言って、そう急かす事でもない。近頃の父親は、寿が高校生になった事もあって、以前ほど意地になって夕食時に帰ってくる事はなかった。橋本という家庭教師が来ている事を知っているからか、夜半過ぎに帰る事もよくある。特に金曜あたりは飲んで帰って来る事が多かった。

「汚いぞ……」

文句を言いながら、橋本がカウンターの向こうに消える。

どうやら、真剣にメニューを考える気になったらしい。

――うーん、こりゃ、ホントにサービスする事になりそうだな――

ラブホに行くなら、少々濃厚なサービスをしてやってもいい。橋本がそうなように、寿だって、二週間振りの逢瀬なのだ。

「オヤジがいたら、流石にねぇ……」

口の中で呟いた寿は、鼻歌交じりにキッチンに立っている橋本を監視するために、キッチンのオープンカウンターに足を運んだ。

「しょむないもの作ってもチャラだかんね」

笑いながら宣告すると、橋本は自信ありげに笑い返した。

「みくびるなよ」

ここで寿様が監督するのだ。不味いものが出来上がる訳はない。

野菜を刻み始めた橋本の手元を観察しながら、寿は心の中でエールを送った。

終わり

て、いかがでしょうか。

これは、あくまでも後書きだよん。この後どうなったかって？　そりゃもう……へっへっへっ。後書きに挿し絵があったら面白いけど、まぁ、無理だろうな。でも、言うだけ言っておこう。ひょーたくん、杉本っちが出てるよー。

続きは、そうだなぁ。次のクールが熱いの後書きで……て、怒る？　まあ、機会があったらということで、許してね。

本本コンビは、こういう日常が楽しそうだと思わない？　え、ワタシだけ？　ま、いいけどさ。いや、そんな事はない。少なくとも、これを書いた里見も同じ事を思ってる筈。新田一実の中では満場一致の可決だね。良かった良かった。

さて、次の新書は、雑賀ブラザーのお話だ。あ、これも、番外編？　ネタが尽きないで、いい人たちだなあ。

と、言う事で、こちらも、どうかよろしくね。

新田一実

＊ ＊ ＊

「クールが熱い・2」2です。あったいです!! YEAH!
またまた書き下ろしが、あの2人!!!で、しかも、えらこびの富山ひろ生です。新田さん!ありがとうです!!まんのために!!!←ちがう。
1巻目の作業から、そんなに周が知っていないせいか、愛のつのるスピードが並でないかんじです。ヤバイです。だれたって、それな本…!!ですか…!!:。このような公(オオヤケ)の場で、自分の番組をひけらかすのは、よろしくないですねの矢礼しました。でもうれ!!!

ラフをFAXするたびに、新田さんより「どんどん操がかわいくなっていって笑える」との、お本人(?)の言葉をいただいちゃったりしているのですが、それはきっと、本編(嫌)中の操ちゃんが、どんどん美少女!:になっていっているからでしょうのトーゼンです!文章失礼におほっですよ!新ん(おお)熱(ねつ):。操を描くときに、心の中で「美少女…美少女…美少女(さすなに)…」と唱えながら臨ましていただいておりますですよ。特に最近。(しかし、本物の女は描くの苦手とゆうのが、本当描きの悲しさ性(サガ)…まんたんすか??)
うっかりつられて本体くんまで美少女になったりしないようただけは、くれぐれも気をつけますので、新田さま&読者のみなさま。どうか温(ぬる)い目で～～～。よろしくです。

1999.7月. 富山ひろ生。



ECLIPSE ROMANCE 新田一実の本

本体価格855円＋税（＊印 本体価格854円）

＊品切れの場合は、店頭で注文するか、郵便振替でご購入下さい。
郵便振替の際は、巻末の振り込み用紙の表に、あなたの住所・氏名・電話番号と、通信欄には、書名・冊数を明記し、定価＋送料分を郵便局でお振り込み下さい。
（送料1冊310円 2冊380円 3冊450円 4冊以上500円）



＊時に抱かれて

ill. 氷栗 優

天使の肖像と評判の絵画を描く男・アモンと、そのモデル・ルシファー。二人の心には互いに癒せぬ傷があった。やがて肖像画に魅された写真家の鷹取恭平が現れた事で、二人の現実が微妙に変化してゆく。描かれた肖像を魔物と評し、ルシファー自身に執着を見せる彼のレンズはルシファーの魔性を写し取り封じた過去を暴き出すのだが——。



＊Love Me Please

ill. 氷栗 優

美人で天才科学者、でもちょっと変わり者。それが僕の兄ちゃん・須永克彦。そんな兄ちゃんのベターハーフになるのが僕の密かな夢だった。当然、障害は山のようにある。兄ちゃんを良からぬ目で見ている研究所のオーナー、竹林を追い払うだけでも一苦労だというのに、今度は妙な人造人間まで割り込んできて——!?



＊不完全恋愛マニュアル

ill. 富士山ひょうた

ご近所のよしみで、兄弟同然に育った俊明と雅己。可愛くて美人で三歳年上の俊明を追いかけて、東京の大学に進学した雅己には、おおいなる野望があった。それは……俊明を恋人にする事。見た目を裏切り、強くて男らしい俊明を、容姿、頭脳共に優秀、ただし超弱気の雅己はモノにすることが出来るのか!!



長嶺先生の憂鬱
ill.富士山ひょうた

室戸美咲こと長嶺敏樹は、来る仕事拒まずの職業作家。ホモ恋愛小説執筆の依頼を受けたはいいが、恋愛不感症を自認する敏樹には勝手が判らない。そんな折り、弾みで食事に誘った馴染みのバイク便の兄ちゃんに告白されてしまう。しかも、肉体関係の強要というオマケ付きで。恋愛不感症男にショック療法は効くのか……!?



久住先生の誤算
久住先生の告白
ill.富士山ひょうた

久住鷹哉・29歳と9か月。そこそこに売れているイラストレーター。彼の趣味は気に入った相手をからかうこと。今の標的はガソリンスタンドでバイトをしている浪人生の黒川昌毅だ。彼を家に誘う事に成功した久住はいつもの様にからかうが、それによって昌毅は傷付いてしまう。思わぬ事態に困惑する久住は……!?



さよならを言う気もない
ill.富士山ひょうた

バーテンダーの玄将は、高校生の義都に「声に惚れた」とナンパされ、つき合い始めるが、次第に年の差のギャップに苦しみ始める。そんな中、米国から帰国した玄将の又従兄弟・祥之が二人に割り込み、義都に興味を持つ。一方、義都は玄将を包み込むような、大人の魅力をもつ祥之に憮然とし、お互いすれ違いはじめ……。



クールが熱い 1
ill.富士山ひょうた

歴史を誇る私立高校男子部へ通う雑賀操は、少々素行不良の一年生。操は何かと自分を構ってくる、品行方正な副会長・矢崎を鬱陶しく思うのに、その矢崎と自分が噂になっていることを知り腹を立てる。ある日、末兄につき合い飲みに行った帰り、バイクに乗った矢崎と出会う。操は矢崎が優等生の顔をした不良だと思い、弱みを握ったと思い込むのだが!?



ECLIPSE ROMANCE

この本を読んでのご意見・ご感想
ファンレターをお寄せ下さい。

〒153-0051　東京都目黒区上目黒1-18-6　桜桃ビル3F
(株)桜桃書房　第一コミック編集部
「新田一実(にった かずみ)先生」係／「富士山(ふじやま)ひょうた先生」係

クールが熱い2
～祭りの夜に～

2000年9月15日 初版

著　者――新田一実
発行人――長嶋正巳
発行所――株式会社桜桃書房
〒153-0051
東京都目黒区上目黒1-18-6
【営業】TEL. 03-3792-2411
FAX. 03-3793-7048
FAX. 03-3792-7143
【編集】TEL. 03-3793-4939
FAX. 03-3793-9348
郵便振替――00190-6-27014
印　刷――共同印刷株式会社
装　丁――鳥居泰果
Printed in Japan

乱丁・落丁はおとりかえいたします。
©2000 KAZUMI NITTA

9784756713445

1920293008554

ISBN4-7567-1344-0

C0293 ¥855E

定価：本体855円＋税

全生徒から恐れられている生徒会の副会長・矢崎に気に入られ、押し切られる様に恋人になってしまった学園のアイドル・操。当然、操はこの関係に納得がいかない。自分の兄の様になれないかと、矢崎を懐柔しようとするのだが、兄の隆三に矢崎との関係を責められ――!?
そんな中、文化祭で、事件に巻き込まれる操。矢崎はどう回避する!?
書き下ろし作品では、生徒会会長・橋本と操の親友・杉本の秘密のラブストーリー掲載。

ILLUSTRATION▶富士山ひょうた

